

佐幕の精神は、明白の儀で御座る。聞く所に依れば、故人、吉田元吉殿の一派が、重く採用られて、藩廳は、佐幕派を以て、充滿されて居るとの事、現下、歸國せられるのは、薪を抱いて、火に投ずるが如きもので御座る。まづ此處しばらくは、滞京を、然る可し、と存する』

半平太は、腕を挿んだ儘、思案の態であつたが、

『御配慮の段は、千萬忝けないが、併し、この歸國は、中止致す事に参らぬ』

『とは、何故で御座る』

『御請を致した後でも御座れば……』

『御病氣なされ。それで、相濟む』

『イヤ、左様は相成らぬ。拙者も、武士で御座れば、今更に、病氣届は、出来申さぬ』

『成程、武士としては、立派な御覺悟ぢや、が、彼等に、如何なる謀計のあらうも知れぬ。その危きを知つて赴くは、智者の事でない。強て御止りを願ひたい』

『折角の御親切ながら、此儀は、御意に従ひかねる。すでに危きを知り乍ら、作病構へて赴ぬ事が、もし他に暴露たら、拙者の面目が、相立ち申さぬ』

決心は、面に現はれて居る。

今は、支那も、是迄と諦めた。哀れ、半平太の武運は、弓矢神も、見放したまひけん、と支那が、いふた通り、歸國を爲ると、すぐに捕へられて、後年には、死を賜ふ事になつた。

半平太について、島村衛吉、小畑孫三郎、河野萬壽彌等の人も捕へられて、五十人組は、終に滅茶々々になつて了つた。

退助は、固より、五十人組の所行については、惟焉たらぬ一人であつたが、といふて、武市等を、捕へる様は、實

に怪しからぬ事である、と思つて居た。重役から再勤の沙汰が来たけれども、市原の如きものと相携へて、藩政に臨むは、士人の恥辱であると、喝破して、遂々、御請を仕なかつた。

然るに、その後、福岡藤次、後藤良輔の二人が、參政になつてから、頻りに再勤をすゝめて来た。これは同じ吉田

派でも、市原等とは違ふ。それに、小笠原唯八も来て、すゝめるので、終に我を折つて、役につく事になつた。二人

のはからひで、退助は、江戸詰となり、鍛冶橋の藩邸へ、遣つて来た。

一一一

嘉永以降、是非紛々として、開國鎖港と、勤王佐幕、各自、信ずる所に據つて立働き、暗殺もあれば、旗上もあつ

た。鎖港勤王の論は、幕府を倒す可き、無上の利器であつた。之に反して、開國佐幕の説は、固より幕府の利益を、

思つての議論ではあつたが、惟幄に、其人を得なかつたので、却て毒蛇となり、最負の引倒しと、なつて仕舞つた。

算へて見れば、纔かに十年ほどだが、その間の變遷は、實に劇甚いものであつた。一日、一刻と、時計の針の

進むに従ひ、幕府の威信は、一步々々に、消えてゆく。思へば、果敢ない運命であつた。

祖先以來の關係で、山内容堂は、力の限り、幕府の壽命を保たしめん、と、盡せば盡すほど、他藩の非難も起つて、

家臣までが、動もすれば疎外されるやう、になつた。されば、慷慨、義に走つて、死を急ぐものも出来るのは、止む

を得ない。

五十人組の所行は、稍や常軌を、逸するの傾きはあつたが、要するに、藩政の方針に、不服の餘り、事を發したの

であるから、大に酌量す可き點はある。

然るに、武市以下の人々を入牢せしめた、については、器々として、不平の聲が、高くなつて来た。けれども、そ

の實は、容堂侯の命令に出たのであつて、決して重役の専斷からではなかつた、といふ事が知れたので、止むを得

ず、緘黙して、事の成行を、待つ事になつた。そのうちに、武市は、死罪との流説が、追々傳はつて、それが、江戸藩邸へも、響いて來た。

退助は、之れを聞くと、非常に驚いて、

「假令ば、武市に、藩命抗拒の大罪あるにせよ、死罪は穩當でない。今の天下は、表に泰平を装へども、裏には、禍亂の氣が充滿して、明日をも知れぬ有様である。天下の危機が、迫るの時に臨んで、一人の家臣といへど、妄りに失ふは、策の得たるものにあらず、況て、武市の如きは、多く得易からざる、傑物である。曲げても、彼れを赦して、貰ひ度い。若し一人の爲めに、藩法は、曲げ難しとならば、永牢せしむるも可ならずや。今直に殺さねばならぬ、といふの理ある可からず」

と、いふ意味の事を、早飛脚を以て、容堂侯に上書したが、惜い哉、時期すてに遅れて、武市は、既に切腹した後であつた。

案の如く、この事あつてより、土州藩の悪評は、日を逐ふて、酷くなる。退助は、耳を掩ふて、聞かないやうにして、一心に、蘭式の兵法を研究して、傍ら知名の人物に交り、偏に他日の變に、備へんの心懸、されば、浪士の間にも、退助のみは、非難を受けず、獨り土州藩士のうちに於て、別格の扱ひを受けたのは、流石、後年の板垣退助と、言はるゝ人丈けに、別な所があつた。

野根山の壯學

一

事後になつて、考へてみれば、武市派が、吉田を仆した事は、明かに失敗であつた。若し、此事がなかつたならば武市にも、その禍は、及ばなかつたであらうし、従つて、平井、間崎の身にも、あゝした處分が、なかつたらうと思はれる。

尤も、是等の人は、吉田の事件が、ないにしても、どうせ、危ない綱を渡つて、身を危くする人達には、ちがひないが、それにしても、もう少し、生かして置いたなら、もつと大きな事の犠牲に、なつたかも知れない。

容堂、豊範をはじめ、吉由に、心酔して居た人が、多いだけに、その横死についての怒りも、甚だしかつたに違ひない。又、藩中には、吉田派のものも、少なからず居たのであるから、復讐的に、武市派を、ひどく壓迫して來るのは、當然の事であつた。

而し、武市や、間崎、平井等が、藩獄へ投込まれたのは、吉田事件としてとなく、中川宮を擁して、不穩の企てをしたといふ事が、口實になつて居るが、結局は吉田事件の罪を、之れへ、結びつけてしまつたのだ。

先づ、平井と間崎が、捕へられて、それから、武市に及んだ。従つて、河野萬壽彌をはじめ、武市派の有力者が、續々、投獄されたのである。

上川岡平五松堀中井宮中北海今中村田秋南
岡田本井風山見山原田平添路橋平右馬太
膽乙八收幾深久刺應節大倍十權菊馬太
治郎助郎助藏庵擊輔齋治馬吉助馬郎吉吉衛

弘吉上森佐田清古濱和市江戸千長村深安千
光本田助寅豪治之迂辰牛三參四策吾吾馬馬
助助兒郎郎郎助郎彌馬郎太郎郎策吾吾馬馬

田楠坂森川高阿橋岩安今中竹谷觀公吉尾宮
所瀬本田田部本神岡橋村村脇寺文永崎川
駒六十三貞太司鐵一太之右之清僧藤良源五
吉衛郎郎七郎馬猪郎郎助馬助馬隆三吉八郎

岡都浪中堀柏小土鳥上西片山高山武三濱粟
賀平内原畑方羽田田岡崎橋崎政宅田井
甫越保賢禎次左三峰可四廣俊喜喜四良之
助入肇郎進吉郎平郎馬藏郎馬助藏馬郎作助

島安服三山筒久那下川近中片片千中田矢白
村岡部原木井松須方久藤藤平岡岡屋村中野石
左覺東彌喜三米代盛三健三盛之太次郎郎作
次助藏太助吉馬馬郎次彌助藏郎郎郎吾門助

石小岡中志吉村千谷宮鎌小中上河武
川川野島和松田頭嘉嘉嶋田田畑岡田野市
潤平五與之恒三源太頼菊三光楠萬壽平太
郎馬郎市助吉郎次郎吉馬郎次次彌太

佐楠伊安岡野田大岩森吉安島弘小大
井本藤岡田々所利崎脇田岡村瀨笠石
松文之覺啓庄次鼎馬唯之次省之助太
郎吉助馬吉吉郎吉助郎馬丞助太馬郎

板岡田山小沖小宮檜千山島吉多坂鳥
垣崎岡本松野畑崎垣屋本村井田本村
寛山祐四熊平郎勝清寅之三太茂哲龍衛
助郎吾郎市吉馬藏治助治郎市馬馬吉

島上平山伊尾池北村濱石吉望會岡間
村田石本藤崎田代上田川本月和傳恒之哲
瀬官五兼十之三忠保清久善清左衛門助馬
六吉郎馬吉進郎吉次藏馬吉平門助馬

中中西田土田島三藤仲依高士島川門
澤城山口居所地瀬本本田橋方本原塚田
安益直文左之之磯入駿太彦權之左衛門
馬郎郎良助助吉次馬郎吉助門助助助

二藩の武市といふ人は、實に偉いところがあつて、人を引附ける、一種の魅力は、非常に富んで居た。江戸へ出て、薩長
その名簿に、名を認めて、同盟に加はつたものが、百九十二人ある。

西馬平馬 池田退藏 安東眞之助 島村外内 岡本猪之助
 安山金馬 足達行藏 細木核太郎 楠目民五郎 一瀬源兵衛
 岡本龍馬 宮地宜藏 山田三郎 庄村良達 西村廣藏
 柳井建次 森下幾馬 山田三郎 庄村良達 以
 當時は、勤王論の、勃興した際であるから、其點から見れば、此位の人を集めたのは、或は當然であるかも知れないが、兎に角、武市に對する、同志の信用は、非常に深いものがあつた、と見るべきである。

一一

武市等が、藩獄へ繋かれた、といふ事が知れると、同志の間では、可成り、やかましく論ずるやうになつた、殊に其時は、藩廳の役人が、多く更迭されて、樞要の位地には、元の吉田派が握り、奉行の一人には、後藤長輔が、なつて居たのであるから、武市の味方としては、その危険を感じたのは、無理のない次第である。

後藤は、後の象二郎であるが、吉田とは、叔甥の關係に、なつて居るのだ。而も、その後藤が、此事件の主任になつたといふのであるから、それに對して、警戒の必要を、感ずるのは當然である。

いろ／＼に手續をつくして、調べの内容を、探つてみると、不利益な事はかりが、聞えて来る。

京都から、新たに捕へられて来た、無宿者の鐵藏といふのが、武市門下の岡田以藏だ、といふ事が判つた。

それを變いて、武市派の人は、また一段と、心配が増した譯である。

岡田は、思慮の淺い、飛上りの奴ではあつたが、其代り、劍術は達者で、人を斬る事は、天才的に巧みであつた。大概な暗殺事件には、關係をもつて居た。本間精一郎、香川肇、宇郷支番、渡邊金三郎、目明し文吉、島田左近、井上佐一郎等の暗殺をはじめ、其他、多くの事件に關係があつて、苟くも勤王派が人を斬るといふ場合に、岡田が關係

して居らぬ、といふ事は、ない位であつた。

此奴が、押へられて来た以上、どうせ、骨を挫くほどの拷問にも、掛けられるであらうから、如何に岡田が、突つ張つたところが、結局は、何か言ふにちがひない。さうなれば、自然武市や平井、間崎にも、災ひが及ぶだらう、と考へて来ると、同志の人々は、居ても立つても、居られなくなるのが當然だ。

安藝郡の田野村中岡の隣村であるが、字壬生岡に、清岡道之助といふ人があつた。例の公張の兄であつて、武市には、京都に出て居る時、初めて會つて、一度で、肝膽相照らすやうになつた。それから、國へ歸つて来て、しきりに往來するやうになつた。

安積長齋の門に入つて、學問も、相當に、深い方であつた。京都で、武市に會うた時、武市が、姉小路公知の護衛として、江戸へ御供をする、と聞いたので、

「先生、拙者も、是非御供をいたしたいから、御周旋を願ひたい」

「よろしい、拙者から、お願ひをしてみよう」

「此度の勅使は、やはり、攘夷の一條で、御座らうな」

「無論」

「吾々にも、何か、働く事があらうか」

「豫め、どういふ事がある、とは言へぬが、いづれ此度の勅使は、難件をもたらすのであるから、相當に、むづかしくもならう。そこで、吾々の働くべき場合が、生じて来ると思ふ。お互に自重して、しつかり、やつて見ようではないか」

「御尤も」

「清岡さん、お手前は、此度の勅使下向について、何か、お聞及びになつた事でもあらうか」
「イヤ、何も、聞込んで居らぬが、前年の和宮様御降嫁の時に、その原因が、芽ぐんで居たといふやうに、聞いて居る」

武市は、思はず膝を打つて、

「そこちや、流石は、お手前ぢや。よく其處に、お氣がつかれたな」

といはれて、清岡は、少し、顔を赤くして、

「手前の想像は、中りましたか」

「大當りに、當つて居る。此度の勅使を、さういふ風に、見る人は、恐らく少ない、と思ふが、よくお察しぢやつた實は、和宮様の、御降嫁を願ふ時分に、その條件として、幕府は、攘夷の實行を、誓つて居るのぢや。然るに、御婚禮の事がすむと、素知らぬ顔をして、あれからといふものは、如何に、朝廷の御沙汰があつても、幕府は、言葉左右にして、約束を、行はうとせぬ。此背約不徳の行爲は、實に怪しからぬ事であつて、此度は、三條卿と共に、姉小路卿が、下向されるのであるから、必ずや、其點に就て、嚴重な御懸合があらうと存する。然るに以上、幕府と衝突して、その儘に、引揚げるやうに、相成るかも知れぬから、その時こそ、我等が大いに働くべき場合が來ると考へる」

「成る程、よく相判つた、及ばずながら、一働きたす覺悟で御座れば、宜敷く、御引廻しを願ひたい。而て、姉小路といふ御方は、どういふ御人物か、一應、お話を願ひたい」

そこで、武市は、膝をすゝめた。

「姉小路卿は、堂上人に似合はぬ、氣魄を有つて居らるゝ、一箇の大丈夫ぢや」

「ハ、ア」

「斯う申しては、失禮に當るが、お公卿といふものは、どことなく柔弱な、色白の人が多いけれど、卿は、色黒く、その態度も、武士的で、なか／＼確乎として居る、御方じや」

「それは、洵に、頼母しい事ですな」

「吾々の仲間へ入れて、少し、揉み上げたら、立派な事をする、お方と考へて居る」

「さういふお方のお供なら、一段と、勵みも御座る」

「いづれ、道中筋では、また、ゆる／＼御紹介もいたさうから、思ひの儘に、話し込んで御らんない」

斯うした事情から、清岡は、武市に紹介されて、出發前に、姉小路に、會はせて貰うた。それからといふものは、

段と、武市を信するやうになつて、往復の道中筋は、すべて武市の指揮に、従つて居た。

清岡が、護身のために携へた、刀の刀身には、

「生爲皇 國民、死爲皇 國神」

といふ十字が、刻み込まれてあつた。

一一一

武市が、捕はれてから、大分長くなるが、その調べは、割合に、抄らなかつた。もう元治元年の夏になつた。土佐の夏は、可成り暑い。冬でも、さまでに、寒い、といふ事を知らぬ國の事であるから、夏の暑さは、格別である。

それでも、山間にある、僻村の夏は、城下に居るほどの、苦みはない。鬱蒼とした森の蔭や、小川の流れに沿うて大きい立樹の下に立てば、幽邃な趣きがあつて、肌ざはりのよい、涼しい風も、吹いて來る。清岡道之助と、從弟の治之助が、主として、四方へ、櫓を飛ばした。それは、七月の眞夏の末であつた。

豫てより、同志の間では、武市等の赦免を、願つて出ようと、計るものもあり、三人寄れば、必ず、其話に落ちて行くのが、常であつた。

清岡から、大切な要件で、至急に集會をしたい、というて、前から聯絡のある、同志へ、知らせがあつたから、各郡に跨つて、代表的のものが、追々に、集つて来た。

集會の場所は、田野の佐渡屋であつた。料理屋といふほどのものでなく、草深い町村へ行くと、よく見掛ける。旅館でありながら、料亭も兼ねよう、といふ、斯うした集會には、便利な家であつた。

集まつて来た、有志の人々は、

幡多郡の樋口眞吉、田邊剛次郎、高岡郡の片岡團四郎、香美郡の大石彌太郎、谷作七、森助太郎、長高郡の池田退藏、其他、高知の城下に寄つた方面からは、小笠原忠五郎、門田爲之助、西山直次郎、河原塚茂太郎、望月清平等の人々であつた。

いよ／＼相談が、始まる迄には、いろ／＼の雑談もあり、すべてが、緊張した氣分で、洵に、勇ましき集まりであつた。

「清岡さん、もう始めたら、どうぢやな」

「大分、時刻も移つたから、始める事にいたさうか」

「まだ来る人の、見込があるかのう」

「イヤ、もう此位なものぢや。まだ二人あるが、それは、來てからの相談でよからう」

「それでは、始めて下さい」

「承知しました」

「取敢してある、茶器なども、其儘にして、別に、席順といったやうなものもなく、雑然とした、席の中央へ、先づ、

清岡が、進み出た。

清岡は、一目眇して、それが爲めに、人相は、あまりよくなかつた。同志の間では、田野の獨眼龍と、呼んでゐた。

「さて、本日、お集まりを願ふたのは、餘の儀でも御座らぬが、例の、武市先生の件に就て、篤と、御相談をしたい爲めに、御案内申した次第である。何とかして、先生等を、救ひ出したい、と思つて、各々の御高見も、伺ひたく、

又、最近に、藩廳の方の模様を、何か、聞込んだ仁は、此場に於て御明しを願ひたい」

といつて、清岡は一座を見廻した。

「些と、お尋ねを、いたしたい事がある」

斯ういうて、席を進んだのは、大石といふ人であつた。

「どういふ事で、御座るか」

「自分は、別に、藩廳の方の事は、耳にして居らぬから、それは、他の仁から、報告を願ふ事にして、自分の聞か

見たい、と思ふ事は、折角に、斯く有志を、集める以上、清岡さんにも、お考へがあつての事ぢやらうが、先づそ

れを承つてから、銘々の意見を、述べる事にいたしましたら、どうであらうか。全體、あんたは、此件を、どういふ

風に、致したらよい、と思はれるか、腹藏のない所を、お洩し下さい」

といはれて、清岡は、

「御尤もの仰せぢや、遠路のところを、わざわざ、御來集を願つて、何等の腹案もない、といふのでは、洵に、申譯の

ない次第で、實は、自分にも、多少の考へは、ついて居る。先づ、それを申述べる事にいたさう」

清岡は、自分の側に居る、治之助に、何か囁いた。治之助は、すぐに立つて、廊下へ出たが、別室に控へて居る、

三四の者と呼んで、四方の警戒を、させるのであつた。

「武市先生の件については、もはや、議論の餘地もなく、此儘に、打過ぎて居る間には、先生の一命は、危くなるば

かりであるから、此場合には、斷然たる手段に訴へて、先生を、救ひ出す外はあるまい、と存する。

第一が、藩廳に向つて、赦免の強訴をする。第二は、その容れられざる場合、些と、手荒のやうではあるが、破獄をして、救ひ出す外はあるまい。それが、首尾よく參つたら、同志相率ゐて、長崎へ走り、彼の地の同志と、共に將來の大事を爲し遂げたい、と思ふが、それともに、先生を救ひ出す、名案があらば、お伺ひいたしたい』

集まつて来た人は、相當に、過激な連中ではあつたが、清岡のいふ處を聞いて、非常に驚いたらしく、互に顔を見合せて、容易に、發言しそりもなかつた。

藩廳へ、強訴を試みる、といふ程度の事なら、さ迄にも、驚くまいが、破獄をして、武市等を、長崎へ擔ぎ出す、といふに至つては、あまりに、過激な手段であるから、誰れにしても、これに同意を、爲し得ないのが當然である。

しばらくして、それ／＼に、意見を述べ始めた一時は、互に争うて、議論をするから、可成り、騒がしくなつたけれど、それが止むと、寂として、再び睨み合ひの形になつた。要するに、議論はしたが、どうすればよい。といふ、結論には、無論、ならなかつたのである。

其晩の會合は、つまり、どうするか、といふ事を決せずに、再會を約して、別れる事になつたのであるから、清岡の考へとは、全く、懸け離れた結果に、終つたのである。

再度の會合には、多少の缺席もあつて、やはり、議論倒れで、何の得るところも無かつた。

そこで、清岡は、一身の外、味方なし、といふ考へになつて、死生ともに、清岡と同じうする者だけの範圍で、威敗は問はず、兎に角、強訴を起す、といふ事に、極めてしまつた。

其時に、藩廳へ出した書面は、次の如きものである。

時上覺

皇國、當今の形勢を、奉、伺、候、處、將軍、御上洛、御大名様方御參府、御緩み、御婦人様方、夫々國許へ、御引取に相成、各國に於ても、富國強兵の大基本相立、尊攘の大義相辨へ、何時、夷狄掃除、皇國の御武威、十分相揮候様、有之度との、御廟議と相成候儀は、全く先年來、御隠居様方、御盡力被爲遊、追々大守様にも、御出馬被爲遊、御周旋被爲在候處より、斯迄、御運びに相成候儀と、奉、存、候、且又、御隠居様、去冬、御上京被爲在、御周旋被爲遊候處、薩州様越前様とは、兎角、御違論に被爲渡候儀、御隠居様には、矢張り、根元の鎖港論、御主張、被爲在候故の御事に哉、御滯京不日御歸國被爲在候、固より、草莽の者の、可奉、推、察、譯には、無之候へ共、斯迄、御違論に被爲渡、速に御歸國被爲在候上は、屹度、此上御憤發も被爲遊、富國強兵の御基相立、他邦は擱き、御當國に於ては、自然、御自立の御覺悟被爲在、尊攘の大義、何處迄も、御確守被爲遊、御詮議を初め夫々御行届の御沙汰にも可相成と、一同、奉、仰、望、罷、在り候處、御歸國以來の御容子、如何の御深意も、被爲在候哉彌々海防嚴備の被仰出も無之、御國中、士氣御取立の御模様共、不、奉、伺、却て、御國産、樟腦類を、長崎邊へ、御積廻に相成、交易品の御手渡に相成候様、頻に風説御座候、固より、傳承仕候儀に付、如何の御仕方有之候哉、不、奉、存、候へ共、右等の儀に付、人心益々疑惑仕り、必死の覺悟仕候者も、自然相弛み、乍恐御政體をも、色々奉、讓、候様子、相見へ候。

且又、武市半平太以下の人々に於ても、今以て、寛典の御處置も無之、私共迄も、何共、恐縮、至極に御座候。右人々、乍不及も、尊攘の大義に基き、國家の御爲、盡力仕候者とは、相見へ可、申、既に是迄相應、時勢の御用をも、被仰付置居候者に御座候間、尙、其、實情、正邪の分、能々、御明辨被仰付、斷然の非常寛大なる御處置、被仰出度、左無くては、右等有志の者、今日に至り、上より、重々御疾惡の姿と申様に相成、自然、人望に差響き可申と、奉、存、候。

前書の通り、人心疑惑、仕居候場合、又々斯くの次第と相成候ては、方今の時勢、如何の向背に、相掛り候哉難

計、何卒、御國內人心の所向、屹度、御示被仰付、是迄の疑惑、瞭然相暗候様、被仰出度、尤も、右等の儀今更申す迄は無之、既に、先達て以來は、聊か存寄等、申出候者も有之趣、然に、右御詮議振、如何被爲在候哉、今以て、斷然たる御示をも、不奉拜承、私共に於ても、此節の御詮議振、如何被爲渡候哉と、且夕奉仰望居り候間、何卒、非常の時勢故、亦非常の御處置を以て、尊攘の大義、始終御遂被爲遊、區々の小義に、御泥み不被爲在、根元の大義、御首唱の御國、今以て其御姿、何處迄も、御立被爲遊、諸事大義に相關候儀は、諸國に御後れ不被爲在様、有之度、扱又、過日來、夷狄長崎へ襲來候勢有之、諸國應援盛に被行候由、右に付、因備の輩、國の爲、援兵人數をも、豫め手配致有之儀、御國元に於ては、如何被爲在候哉、孰れ前以て、御手配に相成候、尙其勢に依り、御人數をも、差出置申程に無之ては、何時、火急の變も難計、若し、諸國に取後れに相成候ては、甚以て恐入たる次第と、奉存候。固より、私共、輕輩とは乍申、是迄の御國恩も愚か敷、偏に、土佐守様御馬前に於て、萬々、遂一死のみに御座候。依ては、御國事に付、不堪感激儀は、不待已、紙上に仕り、差上候間、出徒の責、幾重にも、御寬恕被仰付、御國是一定、非常一洗、御示表、急々被仰出度、伏て奉歎願候、願首死罪々々。

私共爲決心、此處に屯聚罷在候間、若夫成の罪名も、有之候はと、後日、如何様共、可被仰候。以上

元治元年七月廿七日

清岡治之助 清岡道之助

御目附所

右屯聚人々、同志の儀には候へ共、夫々名前相記候も如何敷、則、私共爲總代、右の通り、差出候間、宜敷御披露可被仰付候、以上

四

斯うした強訴の、容れられる筈はなく、藩廳の方へは、その強訴状は、たしかに届いたのだが、何の沙汰もなく、過ぎてしまつた。

そこで、清岡從兄弟は、深く決心して、他郡の同志は、それとして、自分らの周圍に居る、安藝郡の同志のみを以て、手強く、赦免を迫り、若し、それが容れられなかつたら、すぐに脱藩して、長州へ、落ち行くべく、決したので

る。さらに、佐渡屋へ集まつて、決死の誓ひをして、同志二十三人は、七月二十四日の夜、野根山の峠を越へて、岩佐の關まで、落ち込むこゝにきめた。

二十三人の中には、未丁年者が、四人居る。それは、左の人々である。

木下慎之助(十六歳) 安岡 鐵馬(十八歳) 榎垣繁太郎(十六歳) 宮地 孫市(十九歳)

昨今の青年には、此位の年頃で、斯うした壯烈な、覺悟を爲し得るものは、殆んど無からう、と思ふ。

此一擧は、いづれにしても、生命懸けの事であつて、眞に、死を決しなければ、その一列に、加はる事は、出来ないのである。

また、假に、その覺悟はある、と聞いても、清岡等が、容易に、之れを許すものではなく、よほど信する處があれ

ばこそ、同志の列に、加へられたのであらう。いよゝ相談が極まつて、其場から、すぐに結束して、岩佐へ、向ふ事になつた。帶刀は、いふまでもないが、それゝに、武器の用意をして、足拵へも嚴重に、田野を離れると、先づ、奈半利川を渡り、それから、峻しい道と、だんゝと、山の方へ、入つて行く。野川口からは、全く溪流に沿うて、米ヶ關へ出た。

それから、野根山峠へ出るまでが、さらに峻しい山路であつて、途中の難儀は、いふ迄もなく、辛うじて、岩佐へ著く事が出来た。

これから、阿波領へ出る、唯一の路であるから、其處には、關所が設けられてある。此所には、同志の木下嘉久次や、川島總次郎が居るから、萬事に、好都合であつた。

前に、強訴狀が出て居るし、昨今の清岡に對しては、藩廳の方でも、注意を怠らなかつたから、一同が、土地を脱け出した事は、すぐに、知れて居たのである。

安藝郡を支配する、役人等は、すぐに一同の跡を逐うて、岩佐へ、乗付けて來た。けれども、對手が對手であるから、辭を申うして、その應接は、極めて丁寧なものであつた。

郡吏に對する、應對は、すべて、清岡從兄弟が、當る事になつて居る。

「清岡さん、飛んでもない事を、して下されたな。而し、事の勢ひといふもので、これも止むを得ませんが、兎に角、この峻阻な山の中に、兵器を携へて、立籠るやうな事があると、それこそ、由々敷き大事にも、なるのであるから、兵器を棄て、山を下る事にして欲しいが、どうであらうか」

「われ／＼と雖も、固より、事を好んで、斯様な振舞を、爲すものではない。藩廳の人々が、あまりに無理解であるから、據所なく、斯様な事にも、相成つた次第で、今更に、兵器を棄て、山を下るなぞいふ事は、出来ませぬ」

一問一答、郡吏と清岡の間には、同じ事が繰返されたけれど、つまりは、同じ事であつた。郡吏は、止む事を得ず、引取つてしまつた。

然るに、翌日となると、また、藩廳の命をうけて來た。と稱して、清岡に、面會を求むるものがあつた。その役人の口上は、

「願出の趣は、御開届けに相成る、といふ事であるから、兎に角、山を下つて、裝束の森まで來て貰ひたい」

といふのであつた。

それを聞くと、治之助は、微笑を含みながら、

「然らば、お尋ねをいたし度いが、願ひの趣きを聞届ける、といふ文書は、御持參になつたでせうな」

「えッ」

「その文書の無い限り、その仰せには、従ひ兼ねる。察するに、左様な詐略を用ゐて、吾々を欺かうとするに違ひない、只今は、無事に、御返し申すが、再び、斯様な詐略を用ゐて來れば、生かして歸さぬから、左様、お心得なさい」

言葉は、割合に静かであつたが、嚴然とした態度で斯ういうた、治之助の背後には、道之助が、刀の鯉口を切つて、獨眼で、睨みつけて居るから、役人も、這々の體で、引取つてしまつた。

そのうちに、麓の方で、鐵砲を打つ音が聞えた。藩兵に對抗するだけの、用意はないのであるから、此上は、國越えをして、豫ての見込み通り、長州へ落込むほかはない、となつて、其翌朝は、未明に岩佐を出て、わざと、反對の路を執り、北川郷の奥の竹屋敷を経て、白濱の方へ、廻つて來た。然るに、風の都合で、船が入つて來ないから、止むを得ず、また路を變へて、國境の甲浦に出て、突喰を通り、牟岐浦に出た。

此處は、阿波領に、なつて居るので、客易に通さう、としなかつた。殊に、當時の徳島藩は、まだ佐幕であつたから、その折衝は、なか／＼に六ヶ敷かつた。

徳島藩の方では、此一列の足止をして置いて、土州藩へ、其旨を通じて來た。その結果、遂に、清岡等は、兵器や帶刀を取上げられて、土州藩へ、引渡されてしまつた。

此際に、清岡としては、まだ争ふ道もあり、力を以て、抵抗する事も、知つて居たが、他領の徳島藩を騒がして、累を土州藩へ及ぼすに、忍びなかつたから、潔き覺悟を以て、徳島藩の指圖に従つたのである。

假に、土州藩へ引渡されても、尙ほ争ふべき、餘地は、充分にある、と考へて居たのだ。

所が、田野へつれて來られて、高知へは送られず、其儘に、奈半利嶺へ引出され、二十三人、ひとしく斬罪の申渡しをうけて、無念の死を遂げたのである。

清岡等の行爲は、藩應の方から見れば、まことに穩かならぬ事であつたらうが、それにしても、一應は、取調べをしていふべき事は、言はせてから、斬るのが、本當であつたのに、それらの手續を、すべて省略して、何事も言はずに斬つてしまつたのは、殘忍な取扱ひと、いふてもよからう。

これは、元治元年九月五日の事であつた。

象山と岡中

一

總説の章でも、少しく述べて置いた通り、坂本は、有外に、知己を持つて居て、早く、世に傳へられ、殆んど知らぬものは、無いからみだ。

坂本の履歴は、その一半が、小説的であつて、頗る波瀾に富んで居る。殊に、お龍といふ、美しい婦人との、ロマンスも有つて、一段と、話の種を、残して居る。

中岡にも、女はあつたけれど、坂本のやうに、誰れ憚らず、ふざけ廻る、といふ調子がなく、こつそり樂む風で、極めて親しい、同志以外には、あまり知られなかつた。

要するに、坂本は、獨特の長所を有つた、偉い人であつた、がどこことなく、才人肌の所があり、中岡には、さうした風がなかつた。

また、坂本には、多くの崇敬者があつて、その死後、六十幾年の今日に至つても、熱烈な信者を、持つて居るほどだ。従つて、坂本に關する、傳説は、殆んど遺すところなく、穿索し盡されて、ます／＼其名は、弘く知られたのである。

坂本が、單獨で、手をつけたのが、長崎の海援隊であつた。まだ海軍思想の、ひろく行渡らぬ時代に、先鞭をつけ

て、斯うした方面へ、進出した、といふ事が、一層、坂本の知られた原因である。

大江卓の批評に、

「中岡は、臺閣の器であり、坂本は、曠野の猛獣であつた」

と、いうて居るが、實に、適評であつて、兩雄の面目を、よく掴み得た批評と、いふ可きである。

大江は、土佐の宿毛から、出て来て、後には、中岡の陸援隊へ入つたが、坂本にも親しく、その事業にも、關係をもつて居たから、兩雄の長短は、よく解つて居たのだ。

斯うした人の批評は、篤く尊重して、兩雄を知る上の、參考とすべきである。

當時の大江は、齋藤治一郎と稱して居たから、どうかすると、知らぬ人もあるが、可成り、働いた一人で、鷲尾隆聚が、高野山に、攘夷倒幕の旗揚げをしほ時は、今の田中光顯伯と共に、參謀の一人であつたから、維新當時の人物としては、見逃し得ぬ、關係をもつて居る。

殊に、明治になつてからの大江が、人權恢復のために、盡した力は、容易ならぬものがある。

穢多非人の稱を廢して、長く、その因襲に苦しめられて居た人々の權利を復活せしめ、一般の人と、何等の相違なく、横行濶歩するやうにしたのは、主として、大江の力であつた。

それから、人身賣買の禁止を發令して、全國の遊廓を解放し、すべての遊女をして、自由に、生家へ歸る事を、評した事などは、普通の役人に、爲し得ざる所である。

けれども、人間の性慾を、政治や法律の力で、禁制し得ない事を、よく知つて居たから、従來の遊女屋を、貸座敷として許し、遊女の出稼も認めて、たゞ金の貸借關係から、遊女の身體を、束縛する事を、禁じたのである。

近年になつて、自由職業なるものが行はれ、それを、事めづらしさうに、言ふ人もあつたが、そんな事は、明治四

年に、大江が、ちやんと、極めて置いた事で、めづらしくも、何ともない事だ。

これは、大江に關しての、挿話であるが、著者は、此人と、可成り、親しくして居たので、坂本や、中岡の事に就ても、いろ／＼の逸話を、聞いて居る。

その中の、めづらしい話を、一つ、紹介して置かう。

坂本が、海援隊をつくつて、隊士の品行に關する、規定をさだめな時、その中に、「人妻を姦したる者は、斬に處す」といふ一項があつた。

その頃の武士が、女についての品行は、ずいぶん、ひどいのであつたから、坂本が、斯うした規定を、設けたのだ處が、隊士の一人が、それを見て、

「先生、此一箇條は、取除いたら、如何です」

「どういふ譯か」

「それは、銘々の憤みとして置いて、規定の上に掲げるのは、何となく、吾々の品行がよくない、といふ事を、裏書するやうなものですから、面白くないと思ふ」

「イヤ、さうでない。君等にしても、ずいぶん遣りかねないからな」

「先生は、どうです」

坂本は、額を押へて、

「實は、拙者が、第一に危険なのだから、斯ういふ事にしたのだ、ハッハ、、、」

「いづれにしても、窮窟すぎますな」

「なに窮窟な事はないさ」

「やうでせうか」

坂本は、その規定の胸へ、小さく、
『但し、後家は、此限りにあらず』
と、書いたので、一同、手を拍つて、咲笑したといふ事であるが、斯うした、小さい事にも、坂本の氣風が、現はれて居て、ちよつと面白い逸話だと思ふ。

一一

坂本は、はじめ、熱烈な攘夷論者であつた。それが、一變して、尊王開國論者になつたのは、勝安房の卓見を聞いて、それからの事である。

中岡にも、それと同じ事があつた。

その時代の事を、考へてみると、大概な人は、攘夷論であつたらう、と思はれる。また、さうあるべきが、本當のやうに、思はれもする。

何しろ、長い間の鎖國主義で、世界とは、全くの没交渉であつたから、外國の關係なぞを、考へて居たものは、殆んど無かつた。

偶々あつたところで、支那や朝鮮に關する事が、せい／＼のところ、和蘭、印度ぐらゐのもので、それ以上の事に考へる及んで居るものはなかつたのだ。

それであるのに、嘉永の年になつて、亞米利加の軍艦が、不意に、品川灣へ乗込んで來た、開國を強要されたのだから、一旦は恐怖して、さらに憤慨となり、そこに攘夷の思想が、勃然として興つて來たわけだ。

今では、亞米利加が、親切に、國を開きに來てくれたのだ、とか、或は、ペリーは、開國の恩人である、とか言つて居るが、當時のペリーは、脅迫的に、開國を迫つたのであつて、決して、親切に、持掛けて來たのではない。

將軍の居城近く、軍艦を乗付けて、空砲をぶつ放したり、水深の測量をしたり、或は、談判の役人を、威嚇した事もあるのだから、それが大きく傳へられて、國民の神經を、刺戟した事實は、やがて異人排斥の聲になつて來たのである。

之を簡単に、日本の武士が、頑冥不靈であつたものとして、片づけてしまつては、あまりに、自己没却の、甚だしきものである。

中岡が、最も親しくして、深き信頼を拂つて居たのは、長州の久阪玄瑞であつた。

久阪は、元來が、醫者の件で、小さい時分に、坊主にされたが、それを嫌つて、寺を飛出し、還俗してから、武士の仲間入をしたのだ。

松陰門下、三百人の中で、最も傑出して居たのが、高杉晋作と、久阪であつた。けれども、學問と分別に於ては、高杉より、すぐれて居た事、遙かに上であつた。

それほどの人物でも、はじめは、世界の大勢を、見破る事が出來ないで、攘夷論に、癡り固まつて居たのだから、面白い。

中岡も、やはり、久阪と同じやうに、はじめは、攘夷論者であつた。此點は、坂本も同様で、皆、共通して居たのだ。

文久三年に、中岡は、江戸へ出て、岡らずも、久阪に邂逅した。

『オイ中岡、信州の佐久問象山を、知つて居るか』

『イヤ、まだ知らぬ』

「少しは、聞いた事もあるか」
 「何だか知らぬが、毛唐人臭い、變な奴だ、といふ事だが、足下は、知つて居るのか」
 「拙者も、まだ、面會した事はないのだが、實は、恩師の松陰先生から、象山は、偉い人物だ、といふ事だけは、聞いて居る。」
 「どうぢや、二人で、訪ねてみようぢやないか」
 「ウム、可からう」

「何日の事にしようか」
 「先方の様子を聞いてみて、それからの方にしよう」
 「然らば、足下の便りを、待つ事にする」

其日は、大した話もなく、ほんの雑談で、中岡は、引取つて来た。

それから、二三日すると、久阪からの、便りかあつて、これから、すぐに行かう、といつて来たので、中岡は、久阪の處へ、出掛ける事にした。

象山は、信州松代の人で、名を、修理といふ。非常な學者でもあつたが、兎に角、時代を超越した。卓見を持つて居る人であつた。

邊幅を飾り、大言壯語して、人を煙に巻く、風があつたので、一部のものからは、山師といはれて、ひどく排斥されたが、其實は、眞面目な人であつた。

自分の門人に、蘭學の出来るものがあつて、それを發見すると、すぐに師の禮を執つて、その教へを受ける、といつた調子のあるところがある。恐らくその頃の儒者で、象山ほどに、蘭學の讀めたものはなからう。

江川太郎左衛門や、高島秋帆に就て、西洋の調練と、砲術も、一通りは學んで居た。どちらかといへば、西洋好き

の人であつた。

象山の塾は、今の歌舞伎座のある、すぐ前の新道であつた。震災前までは、當時の家の一部が、まだ残つて居たが震災のために、跡方もなくなつて、其位置さへ、はつきり知る事が、出来ないやうになつた。

三

中岡と久阪は、打揃うて、象山を訪ねた。

平生でも、黒羽二重の紋付に、白い襟を重ねて、緞子の袴を、穿いて居る、といつた調子で、一見した時は、どこかの大名家か、と思ふやうな、風采である。

「私は、吉田寅次郎の門人、久阪義助と申します」

「手前は、土州藩士、中岡慎太郎で御座る」と、二人の挨拶はすんだ。

象山は、デロリ、デロリと、目を光らせて、二人の態度を、見て居たが、
 「やア、俺が、佐久間修理ぢや」

これで、暫く言葉がなく、互に黙つて居たが、象山は、微笑を漏しながら、
 「吉田は、惜しい事をした。あれだけの人物は、何處の藩へ行つても、容易に得られない。と思ふ。洵に、残念な事をいたしました」

象山は、非常に剛腹で、あまり、人の事は褒めない風があつた。それが爲めに、人からも、嫌はれたのであるが、今、初對面の久阪に、松陰の事を、非常に惜しんで、その爲人に、好感を持つて居た如く、話しかけたのは、それを

聞いて居る、久阪にも、意外に感じたくらゐであつた。

「舊師が、在世中には、種々、御教訓を賜り、深く感銘して居られました。舊師からは、先生の事も、よく承はつて居ります。併し、舊師のために、先生へも、御迷惑を、お掛けした事は、申譯がありませんね」

「ウム、あの時の事は、實をいうと、俺か、吉田を促して、あゝいふ事にしたのであるから、洵に、氣の毒に思つたのぢや。それでも、お互に、謹慎ぐらゐで済んだのは、まあ、結構であつた」

これは、例の松陰密航の事を、話しはじめたものだ。

それから、象山も、打解けて、いろ／＼の懷舊談に耽る。聞いて居る二人のためには、可成り、参考となるべき話も、多くあつた。

中岡が、膝を進めて、

「近頃、品川灣に、砲臺が、新たに築造されましたが、あれで、外夷の襲來を、防ぎ得るものでありませうか」

と、質問した。

象山は、目を、ギロリとさせて、

「お前は、どう思ふ」

「ハッ」

「お前は、それを、どう考へるか、といふのぢや」

此反問には、中岡も、ちよつと、答へが出来なかつた。自分には、疑ひがあるから、尋ねたのだ。それであるのに却て、どう思ふか、と聞かれたのでは、ちよつと、答へ、出ないのも無理はない。

これが、象山一流の應接法であつた。すべて、人と對談する場合に、象山は、斯うした調子で、對手を、ギヤフンといはせて置いて、それから、話しにかゝるのが、最も得意であつた。

勝安房が、その通りの調子を用ゐて、人と應接した。象山に教へられた勝は、よく象山の調子を、呑込んで居たものだ。

「私には、あの砲臺で、外夷の襲來は、防ぎ得まい、と考へて居ります」

「左様か、その仔細は……」

「廣々とした、海の中に、あゝしたものを、行つて置く事は、敵の目標となりますから、却て、襲撃の便宜にはなつても、敵を防ぐといふ、利益は、ないやうに思はれます」

「その通りぢや、お前は、なか／＼物判りがして居る。敵の目標になるからいかぬ、とは、巧い事をいうたものぢや。然らば尋ねるが、あの砲臺を打崩すには、大砲の威力によるのぢやが、その大砲に就ての研究は、出來て居るか、どうぢや」

「其儀は、また研究が、屈いて居りませぬ」

「それでは、折角の名論も、根柢のない事になる。敵の目標になるから、都合が悪い、といふ丈は、よく判つて居るが、それを打崩すべき、大砲の威力が、判らないやうでは、議論にならぬ。打角の事ぢやが、落第ぢや、ハッハ、ハ、ハ、ハ、」

そこで、久阪が、口を容れた。

「先生、大砲の威力とは、どういふ事でありませうか、一應の御教示を願ひたい」

「砲臺を築く以上は、此方にも、大砲の備ひはある。たゞ其大砲が、どれだけの力を、持つて居るか、といふ事が、つまり、議論の要點になるのぢや。形は、同じ大砲でも、打ち出す弾が、どれだけの距離を飛んで、尙ほその破壊力が、どれほどあるか、といふ事が、判らなければ、勝つも負けるも、その見込みは、立たぬ譯ぢや」

「なる程」

それで久阪は、退却した。こんどは、中岡が代つて、
「全體、大砲の威力は、敵前、どれ程の距離を隔てゝも、効力のあるものでせうか、御教へを願ひたい」
門答が、斯ういふ調子になつて来たから、象山も、頗る乗氣になつて、これから、砲術に關する、説明をはじめた
此時に、大砲の彈が、はじめは圓玉であつたのを、たび／＼の経験から、先を失らせて、椎の實の如き形にした、
といふやうになる事まで、細かに、説明をはじめたから、二人は、膝の進むを忘れて、象山の話に、耳を傾けた。

四

象山は、少しく容を正して、

「お前達は、此頃流行の、攘夷論者か、それとも、又お先眞暗な開國論者か。全體、どちらかね」
突然の質問で、二人は、急に答へが出来なかつた。

象山は、ニヤ／＼笑ひながら、

「大方、攘夷論者ぢやろう、と思ふが、あれア、いゝ議論ぢや。後先の考へもなく、盲滅法に、強い事をいひのぢや
から、どうしても、年の若い、元氣な連中には、喜ばれる議論ぢや。また、それと向ひ合つて居る、お先眞暗な開
國論、これが又、面白いものでなあ、西洋の事情、一つ知らないで、たゞ自分だけが、利巧ぢやといつたやうな顔
付をして、國を開いてから後の状態が、どういふ風になるか、それさへも考へずに、開國を唱へて居るのぢやから
これも、あまり感心が出来ぬ。早くいへば、どちらも、どちらぢや」

一流の辯舌で、まくし立てられるから、二人は、たゞ黙つて聞いて居るばかりであつた。象山は、開國の利を説い
て、攘夷の不利を斷じ、今の攘夷派の短見と、妄動を、口を極めて、罵倒し去つた。
その前に、坐つて居る二人は、強烈な攘夷論者であるが、象山の論鋒に對しては、一言半句の、反駁も出来なかつ

た。

象山は、西洋の事情を、よく知つて居た。世界の趨勢にも、通じて居るのだ。二人は、非常にすぐれた、人物では
あるが、その點になると、まだ象山と、太刀打するだけの知識は、持つて居なかつたから、議論の上では、どうして
も物にならなかつたのが、當然である。

其後も、二三度、象山を訪ねて、だん／＼その教へをうけた。さうなると、今迄に唱へて居た、攘夷論が、頗る淺
薄なものであつて、世界の趨勢に通ぜざる、盲目的の意見であつた、といふ事が、はつきり判つて来た。

従つて、それから後の二人は、あまり、攘夷論に深入りせず、主として、勤王倒幕の方へ、走つて行つたのである
殊に、中岡は、開國進取の意見を、持つやうになつて、その立場は、よほど變つて来た。けれども、自分が理解し
た如く、他の攘夷論者が、理解してくれなければ、倒幕運動の方へ、ひゞきを持つやうになるから、中岡も、表面は
攘夷論を棄てるといはず、その議論になると、少しづつ、ぼかして行つたのである。

坂本が、勝に依つて、開國主義になり、中岡は、象山に説かれて、攘夷論を捨てた。勝は、象山の門人であり、坂
本は、その事から、勝の門弟となつた。中岡は、象山の門人には、入らなかつたが、その教へはうけた。斯うした因縁
を、よく考へてみると、其所に、一種の興味を感じる。

容堂と中岡

一

土州藩の武士は、大別して、上士、下士の二つとなる。上士とは、一豊入國以來、うちつゝいての家來で、所謂、直參なるものである。

山内は、長曾我部の遺臣と除かう、として、一豊と忠義の二代につゞいて、様々の手段を以て、殺し盡さう、とした。

さうした時代の狀勢を、察するには、『龍山物語』といふ書物を讀むと、それがよく判る。左に、其一節を掲げて見よう。

北山の庄屋、高石左馬助と云ふ者、土爲より東方、十五六町、下津野村に住し、元親の比は、北山の内にて、給田八十石を得て居けるが、北山五百石を押領し、家來を百姓になし、數年心の儘に、所務せしが、刑部は、本山千石を賜に依て、北山分、刑部代官所に預る。

此故に、同八年十一月、刑部、家臣に命じて、上納を令催促。左馬助、生得剛勢なる曲物にて、累年、作り取の心を不忘、吾物を取る様に覺へ、却て、憤りを含み、數々、刑部の令に不服に依て、家一軒より、一人あて、人質を

捕へ、男女三十三人、浦戸の牢屋に入置き、猶ほ上納を促す。然れども不拂、刑部怒つて、令人左馬助を召寄す。左馬助、彌々含逆意、兎角、龍山へ引籠り、鐵砲を可放内存を、弟吉之助と云者、其外北山邊の百姓共へ、内談を示し、内々用意を企て、夫より土爲に來る。

刑部の面前へ呼出し、直に上納を責むる。左馬助、聊か恐るゝ氣色なく、我れ上納せんと欲すれども、物なしとて互に言葉戦ひし、終に座を立ち、刑部を罵つて、土爲を退去す。刑部、與力井口惣右衛門と云者、常に左馬助と好し故に、翌朝、刑部、惣右衛門に命じて、左馬助が様子を見せしむ。(中略)

左馬助も、惣右衛門が詞、容貌を、つくづくと考へて、少し心解け、其方、實に、我を窺にあらざる哉と問へば、答へて曰く、固より云ふ如く、土爲にては、何の沙汰もなし、我、何の爲めに、其方を可窺やといへば、然らば、實にてあるべし、茶を沸せと云て、咄に移り、又た惣右衛門、彌々大切なる所と思ひ、何心なく茶を呑み、緩るゝ物語などして居る。

左馬助が曰く、龍山へ、家財運送に、事忙し。其方、見分に來らずとある故に、命を助く。我、龍山へ取籠り、鐵砲を放す。其有様、土爲に歸て披露せよ、と云ふ。

惣右衛門、しすましたりと思へども、急ぐ體ならば疑と思ひ、尙ほ、何となく應て曰く、扱てく不思議なる所へ來り、不寄存、疑を得、既に犬死をせんとしたり。我、何の爲に、可披露哉、聞へば外より聞ふべし、何の妨に可成様なし、我に不構、運送の下知せよ、と云ふて咄かくる。

左馬助、彌々心解けて、兎角、座の紛になれば、急ぎ可歸、只今は、我を窺ふにあらざる故、命を赦す。重ねて、討手に來りなば、其時はゆるさじ、といへば、惣右衛門が曰く、夫れは過分也、然らば可歸、隨分精を出されよと立去る。

途中、足早ならば、跡より鐵砲を放つの患有るべしと思ひ、諸方遠見の體にて、一際靜かに歩行して、下津野の川

原より窺ひ見れば、如案、左馬助兄弟は、鐵砲に、火繩を持添、屋敷端まで忍び出て、惣右衛門が様子考へ、不審なる體にも見へず、彌々心解けて内に入りぬ。惣右衛門、不思議に命を助かり、鰐の口を遁たる心地して、急ぎ土爲に歸り、事の由を、詳かに披露し、急に討手を可指向とて、退出す。

左馬助は、即日、北山の内、瀧山にて、土爲より東北二里程に、深鬱の高山あり。彼山の南裏八合に、横十二三間幅四間程、天然の巖窟也、險難至極にして、鳥も、たやすく通ひがたく見へたり。前は、篋竹野にて、少し小高き矢筈野也。細野村より、此野を越へて、瀧山へ至る所也。左馬助兄弟、右の巖へ釣橋を拵らへ、五十間ほど下に、葛を以て材木を釣り、大石を載せ、麓の方へ、石畔を積置たり。是は、寄手、篋竹野より出る所、鐵砲間合の考と見へたり。其夜、近邊の在家へ押入、兵糧財寶を奪ひとり、汗見川大川内兩村の百姓共へ、廻文を廻はし、一時の人数、男女百人斗也。左馬助下知して、汗見川一村の者は、寺家村の川原、汗見の小倉山へ取出、大川内一村の者は中島村へ出張り、婦人、足跡者共、鐵砲の玉薬を込べしと、それく手配して、討手の來るを待かけたり。

刑部は、惣右衛門が云より、世上の沙汰と聞き、手廻り十人程召連、爲見物相越す。時に、寺家へ出張し、幅五六十間ほどの川を隔て、種々悪うし。きびしく鐵砲を打かけ、刑部すでに、危く見へければ、與力共、諫て曰く、一揆の奴原、雖爲下郎、たやすき事にあらず、先、有歸宅て、明日の可爲詮議とて、強て、馬を驚返へさす。

刑部怒りて、翌日、手勢三十人ほどにて、中島へ出る。寺家の奴原、又た如前日く、きびしく鐵砲を、雖打懸、遙かの川を隔る故、余議なく、中島に到る。中島の奴原も、同じく鐵砲を打かくる。されども、きびしく被押懸、中島より瀧のカバ山と云ふ山へ引退く。

刑部、乘勝て、彌々きびしく、追ひかくる時に、一人、木蔭に忍び居て、刑部を目がけ、鐵砲を放つ。此玉、刑部鞍の前輪に、打込みとまる。彼、比鐵砲を棄て、瀧をつたひ遁れ退き、中島出張りの奴原も、悉く大瀧村へ遁走、與力共、續ひて雖追懸、深山へ遁隠れて見へず。刑部手勢、大瀧村を放火して歸る。寺家の奴原、此有様を見

て、難叶思ひ、遂に一戦にも不及、汗見川へ遁籠る。

此節、伊勢大夫來て在りしが、左馬助、數年、御師旦那の由緒を以て、扱を願ひ、翌日、秋を竹の先に挟み、扱ひくにて瀧山に到る。左馬助、是を見て曰く、難所に寄る事なけれ、打ぞといへば、大夫を打と云事不可有とて、強て至る。左馬助曰く、何者にもあれ、今此所に向ふは敵也とて、以鐵砲、即時に打殺す。此騒動、高知に達し色々詮議あり。

野村因幡守曰く、某、去年、巡見の仰を蒙り、廻國せし時、本山村一村にて、訴狀十九通出せり。甚だ六ヶ敷所たりしが、果して、騒動を仕出せり。近郷豊永村へ、何の事もなく、様子宜かりつるが、此度は如何有ける哉など、はなしける所へ、庄屋豊永五郎右衛門來り。因幡、之を呼出して曰く、只今、はなしたり。本山騒動を仕出せり其村如何と問ふ。

五郎右衛門曰く、豊永村別條無御座候、近郷の義故、右(云々)罷出候と答、先一だんの事とて、本山村の詮議に移り、野村因幡、山内掃部、兩人を加勢に仰付る。御入國翌年の事なれば、近郷の案内さへ、未悉難知、まして、本山へんの義、案内を知る者少し。故に、五郎右衛門幸の義、手引を可致となりければ、五郎右衛門が曰く、本山へ、常に、不罷越、自高知の道筋、猶以不奉存、豊永村竹崎太郎右衛門義、本山に縁あり、案内は存じ候是に手引を致さすべしと云へば、尤可然とて、太郎右衛門に命じて、五郎右衛門相共に道引し、急に兩組本山へ越し、刑部に對面し、都合三組、瀧山へ攻めかく。

左馬助兄弟は、石畔の影に、鐵砲玉挺備へ、傍に、足弱共を、玉薬込に、引付け置き、瀧山の向、篋竹野の端一筋道、矢比七八十間の場、出口へ討手の出づると、心掛けて待ちかける。討手の輩一人、右の出口へ出れば打、出れば打、手拭をひたして、鐵砲につけ込み返し、一發も不外打殺せば、敢て可進様もなかりけり。

時に、濱田勘助、是れは、因幡手に屬して在りしが、大身槍を掲げ、隙間を窺ひ、瀧下へ走着けば、同手より、田

川九郎兵衛、今一人、勘助に續て瀧山下へ着。此時、吉之助、岩の出張の上より、以鐵砲、勘助を打たんとするに、岩影故、不能打、勘助は下より突かんとすれども、岩に隠れて不能突、此隙間に、關の手の大勢、一度にドツト瀧山の下に至る。

左馬助、此を見て、時分は爰ぞと思ひ、彦右衛門と云ふ百姓に下知して、彼釣石を、切て落せば、瀧山下、寄手の面々、石に打れ、死人手負、凡そ百人斗也。關の手、左馬助が謀計に落て、進退を失ひし打節、霧深く覆ふ。其紛れに、竹筥野を越て、細野村へ退く。

勘助三人の者は、岩影故、落し石の難を遁れ、引退かんとする時、岩石茂の難所故、槍諸方へマギリ、諸木の枝に掛り、自由に身の振廻しも難成、アバカウ所に、田川曰く、勘助槍を何するぞ、命有ての槍ぞ。戰場に赴き、太刀カタナ棄ること、尋常の習也。打捨て歸れと云へば、げにもと思ひ、槍を捨て歸る。

其後、二人の内より、勘助日頃の高言に違ひ、此度於瀧山、敵に恐れ、槍を捨て、歸りたりと流言し、此沙汰、世上に隠れなく、勘助も、諸人へ言譯すべき様なく、不及是非とて、武士を止め、浪人となりぬ。畢竟、剛氣高慢にありし故、妬み憎む者多く、依之、右の流言を得たりと云へり。

關の手、軽々しく心得、思の外、人数を討ち、三組大に怒り、瀧山東の手鉢ノ窪と云ふ高山へ取乗り、大筒に小玉數々込め、岩屋へ、如雨打かくれば、左馬助も、五日が間は保ちみれど、此大筒に膽を消し、其上、後卷に取巻れば、可遁やうなしと思ひ、霧隠れて瀧をつたひ、汗見川賣生里へ通行き、ゆかりの者へたより、深く身を隠せば、残る奴原も、めんく岩屋へ隠れ、彼方此方へ忍び、遂に、行方不知成にけり。素より、大難所の岩、何所を尋ぬべき様なく、討手の輩も、追捨て歸りけり。

夫れより、遁隠れし百姓共、浪々の身となり、何を營み、口體を可養様もなく、禽獸の如く人を恐れ、迷惑して居けり。此節は、在々に、人少く、北山分五百石、誰鐵を入るゝ者もなく、悉く荒地となり、上の御爲にも成

がたし、時に、豊永五郎右衛門は、近郷の庄屋故、寄々百姓共へ對面し、當人の外は、不得已組せし事なれば、強て御答可有様なし。貢物未進なき様なせばよろし。それく吾屋に歸り、元の如く、百姓を勤めよと云けれど魚の水を得たる心して、一同に悦服す。五郎右衛門が訴上にも有御許容て、往年百姓共所持の腰刀を悉く被取上、本の如く、農業をつとむ。

左馬助兄弟は、翌年二月、雪解けて、讚州へ落ち行きし也。
(註) 刑部といふのは山内刑部である。高石左馬助は大石良雄の先である。

前にいうた如き、追害を受けた時、辛うじて其難を遁れ、山村の奥深く、かくれて居たのが、其後、寛典を得て、郷士となり、それから、子孫が、追々に殖えて来て、各郷に、根を張るやうになつた。

それらの中から、藩の方へ、召抱へられる者も、出て来たが、藩士としての特權は、さらに、與へられなかつた。土州藩では、之を下士と稱し、外の藩にある、輕格としての、取扱ひになつて居たのだ。

太平は、三百年つゞいたが、藩に於ける、上士と下士の争では、片時も、絶える間はなかつた。事毎に衝突してともすると、殺傷沙汰に及んだ事も、屢々であつた。

上士が、直參風を吹かして、下士を侮るところから、下士の方では、實力を養うて、それに對抗するやうになつた。即ち、文武二道に親んで、上士に負けぬやうに、努めたのである。

幕府の末に、勤王攘夷の叫びが、だんく高くなつて来た。各藩の間にも、動搖が起つて、勤王か、佐幕か、開國か、攘夷か、といふ事になつて来て、いづれにも其方面を、定める必要が、起つて来た。

理屈の上からいへば、勤王と攘夷は、必ずしもその聯絡を、保つ必要はないのであるが、實際に於ては、勤王と攘夷は、どうしても、一つになる傾きがあつた。

土州藩では、上士の部に属するものは、多く佐幕開國に傾き、下士の部に属するものは、殆んど、勤王攘夷に赴つた。それに、多年の感情が、絡んで来たから、その争ひも、頗る激しいものであつた。

上士は、長い間、相當の食祿を得て、安逸に、世を送り得た爲めに、遊惰に流れる風があり、文武の研修も、意り勝つものが多かつた。

下士の方は、それに反して、文武の修業を怠らず、貧賤に安んじて、自ら耕し、自ら食ふ、といった状態で、永い年月を、苦しみ抜いて来たから、身體は強健であり、文武の二道にも、すぐれた者が多く居た。

武市、坂本、中岡、平井、間崎等の人々は、いづれも、下士の中から、出て来たのである。けれども、内内は、藩主に、よい殿様が、つよいて出た爲めに、いくぶんか、人材登用の現はれもあつて、下士の中から、君側の家臣も、拔擢されて居たのである。

文久三年の正月に、藩主の豊範が、江戸から京都へ上り、引つゞいて、隠居の容堂が、京都へ、出て来た。何といふても、薩長二藩の外では、土州藩に、浪人や有志の人氣は、集まつて居たのだ。

若し、土州藩が、最初から、藩論を統一して、勤王の一點張りで、進んで来たならば、或は、薩長二藩を凌いで、維新第一の功を成したかも知れぬ。

藩中に、人物も多く居たし、地理の關係からいへば、極めて好都合であつたから、若し、土州藩が、薩長の如き立場に居て、京都に、頑張つて居たならば、大した事になつたのだらうが、公武合體といふが如き、俗論に囚はれて藩の全力を、勤王に、傾ける事の出来なかつたのは、洵に、惜むべきの至りだ。

藩主と、容堂が、前後して、入浴したといふ事は、一般の注意を惹いて、浪人や有志の間には、頗る重く見られたのであるが、入浴した後にも、さらに其態度を、明かにせず、相變らず、浪人や有志を、嫌ふやうな様子があつて日

一日と、山内の評判は、悪くなつて来た。

加茂川に、あたら仇浪立たせしと

思ひ定めて 渡る月日か

此歌は、その時に、容堂が詠んで、家臣によつたものであるが、忽ちに、それが傳はると、益々、容堂を、悪くいふ者が、殖て来た。

今宵は、容堂が、左右の者を集めて、小宴を張る事になり、その準備が整うた。左右の者というても、あまり澤山の人數ではなく、ほんの二十八あまりであつたが、樋口眞古、門田爲之助、池知退藏、島村壽之助、中岡光次等、多くは、年の若い、元氣なものばかりであつた。

容堂は、人物もすぐれて居たし、學者でもあり、なか／＼鋭い質の人であつたが、一種の酒癖があつて、酔うてくると、人を、椰檮弄するやうな事を、好んでする事があつた。それは、家臣にばかりでなく、同列の諸侯に對しても、よく其惡癖が出るので、御側に附いて居る家臣が、その跡始末に苦んだ事も、屢々であつた。

『壽之助』

『ハッ』

『其方の差料は、あまり長過ぎるやうぢやが、それでは、振廻すにも、骨が折れるぢやらう、どうぢや』

突然に、こんな事を言はれても、家臣としては、返事に困るのが、當然だ。島村は、黙つて、下を向いて居る。

『ハッハ、ハッ、壽之助、何とか申さぬか』

『恐れ入りました』

「恐れ入つたとは、どういふ意味か」
益々困つてしまつた。對手が、殿様でなければ、何とでも、いへるが、酒の上で、こんな事をいはれても、相手に
なるものは、困るばかりだ。
今度、門田に向つて、

「其方の顔は、どうして、さう青いのぢや。少し、赤くなつたら、どうぢや」

「洵に恐れ入りました」

「アツハ、、、、、皆、恐れ入るな。少しは、恐れ入らぬ者がなければ、面白くない
と、言ひながら、左右を、ぢろりと、見渡した。末席に居たのが、中岡である。

「コレ、光次、前へ進め」

中岡は、わづかに膝か向け直した。

「其方は、何を考へて居る」

「私は腑に落ちませぬ事があつて、それを考へて居ります」

「フ、ム、其方の腑に落ちぬとは、どういふ事か」

「我君の御参朝が、何日の事か、さらに相判りませぬので、不思議に思つて居ります」

これには、容堂の方で驚いた。御所へ出る事が、後れて居る事を咎められたのであつた。固より、君臣の別があつ
て、言葉は丁寧に、上手な言廻しではあるが、その意味からいへば、参朝の催促である。

「其方は、異な事を申す奴ぢや。余の参朝が、それほど氣になるか」

「只今、京洛の巷では、我君の御進退に、みな眼を注いで居ります。斯様な場合に、御参朝の後れまする事は、家臣
の身として、心配せずには、居られませぬ」

「余の参朝が、後いとか、早いとか、いふ事は、固より、論すべきほどの事ではない。いづれにしても、我藩を除い
て天下の御爲になる藩が、多くあると思ふか」

「さ、それならばこそ、私は、疑ひもし、又心配もいたすので御座います。それほどに、天下の重きを任ずる、我君
が、何故に、御参朝を、お急ぎにならぬか、それが不思議でなりません」

「ハツハ、、、、光次は、なか／＼理屈を言ふ奴ぢやのう」

其後の事は、それで済んだが、翌日になると、側目付の板坂三右衛門から、使ひが来て、中岡に、ちよつと来てく
れ、といふ事であつた。そこで中岡は、すぐに板坂の邸へ、出て行つた。

「やア、中岡さん、よく来てくれた」

「只今、お使ひがありましたから、すぐに参りました」

「あんたは、えらい事を、やつたな」

「ハ、ア、どういふ事ですか」

「昨夜、御酒宴の席に於て、大殿様に、苦言を呈した、といふではないか」

「別に、苦言といふほどの事でもありませんが、思ひついた事を、ちよつと申上げたのであります」

「イヤ、それが偉い。あれだけの事を、申上げるのは、普通の覺悟で、出来るものではない。それをあんたは、平氣
で言うて、今俺に聞かれても、軽く答へて居る。そこがあんたの偉いところだ」

と、やたら無性に、褒められるので、昨夜の御前勤めよりは、此方が却つて、薄氣味悪くなつて来た。

板坂は、少し、膝をすゝめて、

「只今、大殿様の御前へ召されて、あんたの事を、いろ／＼とお尋ねがあつた。その跡で、大した御沙汰を、承はつ

て来たのぢや』
 『ハ、ア、どういふ御沙汰でありませうか』
 『大殿様、御鑑識を以て、あなたに、御徒目附兼他藩應接密事係を、申付ける、この事で御座つたが、大した事ではないか。これからは、追々に、御出世の事と申して、取敢ず、それをお知らせして、一言お喜びを申し度く、斯くはお招きいたした次第ぢや』
 これを聞いた時、中岡も、案外の思ひをした。昨夜は、少し言ひすぎたから、多少のお叱りがあるものと、覺悟はして居たのだが、意外千萬に、斯うした新役を授けられやうとは、夢にも思つて居なかつたのである。

此役は、一口にいうと、國際探偵みたいな役で、どこへでも、出て行く事が出来、どんな行動を採つても、よい、といふ役目なのであるから、中岡のやうに、四方の志を持つて居るものには、此上もない役目である。
 板坂が、一切の手續きを踏んで、正式に、中岡へ、此辭令の下つたのは、それから二三日の後であつた。

一一

坂本と、中岡が、その當時の境遇は、此所に相違があつた。
 坂本は、早く脱藩して、日蔭の身となり、勝安房や松平春嶽の口添ひを得て、その罪をゆるされ、それから、國への出入が、自由になつたけれど、それ迄は、可成り、窮屈な身の上であつた。
 之に反して、中岡は藩廳へ召されて、容堂の御前へも、出るやうになり、忽ちにして、容堂の急所を押へつけ、斯うした巧い役目を、申付けられ、極めて自由な立場に居て、活動して居たのである。
 併し、念のため、斷つて置くが、此點を以て、兩雄の人物を、對照しよう、とするのではない。たゞ、その出發の

時から、斯うした相違があつた、といふ丈けの事を、兩雄の境遇の上から、言うて置くに過ぎないのだ。

中岡は、安藝郡北川郷の、柏木といふ所から、出た人である。天保九年四月の生れで、家は、貧しかつたけれど、代々、里正を勤めて居た。中興の先祖は、長曾我部の臣で、わづかに身を完うして、此地に遷れ、それから、幾年の後、藩廳から認められて、里正の位置にいたのである。

奈半利川を遡ること二里、北に、天狗ヶ森を控へて、南に烏ヶ森を見る。東は、二つの山脈が連つて、野根山にいついて居る。西は、川を隔て、蜿々たる山脈があり、極めて幽邃閑雅な土地であつた。さうした所から、中岡は、生れて来たのである。

江戸へ、修業に出たのは、十七歳の時からであるが、一旦、國へ歸つて、二度目に、江度へ出た時、淺蜷河岸の、桃井春藏の塾へ入つた。

其頃に、塾頭をして居たのが、武市半平太である。固より、同郷の先輩でもあるし、また、多く武市に、教へを受けたので、その親みも、頗る深かつた。

徳川の太平が、長くつゞいた爲めに、士風の頹廢は、可成り、ひどいものであつた。果は、町道場にまで、頹廢の風が及んで、これには、道場の主人も、頗る惱ませられたのだが、桃井の塾は、武市が來てから、その取締りが、嚴重であつた爲めに、不良の分子は、みな退塾して、健全なものだけが、跡に残つたので、道場の風儀は、非常によくなつた。

中岡が、武市に心服したのも、一つは、さういふ點からであつた。國許に居て、麻田勘七に就て、劍術は、ひと通り修めて居たが、さらに江戸へ出て、修業してから、一だんと業も進み、其上に、桃井塾へ入つた爲めに、その進歩は、著しいものがあり、既に、免許に近い腕をもつて居た。

坂本は、これも中岡と同じやうに、江戸へ出て来て、先づ劍術の修業からはじめた。初めは、京橋の桶町に、千葉貞吉の道場があつて、それに通つて居たのだ。

貞吉は、周作の弟で、技術は、頗るすぐれて居た。坂本は、此所で、目録を許されてから、お玉ヶ池の道場へも、出入するやうになつた。それであるから、本當は、周作の門人ではないのだ。

周作には、三人の子があつて、長子を重太郎といひ、次子を榮次郎というた。どちらもよく使つたが、殊に、榮次郎の方は、すぐれて居た、といふ事だ。

坂本は、重太郎と親しく、これは餘程深く交つて居たやうに思はれる。はじめ、勝安房に、會ひに行つた時は、重太郎の紹介であつた。

桃井塾と、土州藩邸は、割合に近くもあつたし、殊に、千葉貞吉の道場とは、接近して居たので、何日か、坂本と中岡は往復をするやうになつた。

「オイ、坂本、桃井先生の道場へ、来て見る。國の武市先生も居て、話も合ふぞ」

「武市先生は、非常によく使ふ、といふぢやないか」

「何しろ、塾頭で、代範をして居るのだからな」

「竹刀捌きがいよとかいつて、大層な評判だ」

「中段に構へて、氣合を入れながら、附け入つて来る時の鋭さは、實に、天下第一品だ」

「さうかな」

「それよりか、天下國家の問題について、意見の高いことも、劍を學ぶ人としては、珍しいほどだから、是非一度、

會つてみなさい」

斯うした話があつて、それから程なく、坂本は、中岡に伴れられて、桃井の道場へ行つた。

武市との親みは、これから始まつた。さうして、後には、全くの武市派になつて、長州への使ひとしては、坂本が多ク武市の代理を、勤めて居たのである。

九門の戦と中岡

一

元治元年の夏、七月十九日に、京都に、戦ひが起つた。之を一般には、九門の役と稱して居る。長州藩の兵士と、佐幕派の衝突であるが、主として、會薩二藩と、長州藩の衝突であつた。文久二年の初め頃から、長州藩の勢力が、だん／＼と、京都へ入つて來た。桂小五郎が、政務座役として、毛利邸を預かつて居た時であるが、恐らく、桂の一生を通じて、最も努力したのが、此時代であつたらう。桂の智恵もあつたらうが、兎に角、毛利は、金がつゞいたから、あの大仕事が出来たのだ。政治運動といふものは、昔から、金がなければ、出来ぬことになつて居る。人を集めるにも金、人を動かすにも金、自分が飛出すにしても、金がなければ、思ふやうに、活動はできぬ。世間には、金を汚いものとして、見て居る輩もあるが、それは、考へよう一つだ。又、金を使ひやうで、綺麗にもなる。強ちに、汚いものとのみは、いへぬ。机の上で、議論して、紙の上で、理窟を世べて、それで天下の事が定まる、と見たら、大へんな間違ひだ。さういふ事を、考へて居る者がある、とすれば、それは、よほど長生をする人間にちがひない。關ヶ原の戦に負けて、毛利は、長防二州の中大名となり、僅かに、三十五萬石になつてしまつた。而も、日本海

に面して、三方は山に圍まれて居る、といふ、不自由な所へ、押込められて、其處へ、城を築く事になつた。萩の城下は、さうした所で、いはゞ宛命を申付けられたやうなものだ。萩には、全然、城などはなかつたのだから新しく築城をしなければならぬ。戦には負けて、所領は、四分の一となり、其上に、そんな所へ押込められて、新しく城を築く、といふのだから、毛利の苦しみは、ひと通りでなかつた。指月の城は、毛利の君臣、一致の力で出來た、というてもよい。代々の藩主には、明君が多く、中には、城内へ水田を作つて、自ら植付もすれば、刈取もやつて、米の改良を計つた、殿様もある。これがために、防長米が、名を成したのだ。とも傳へられて居る。天保の頃に、敬親といふ英主が出て、此人が、藩政の大改革を行ひ、財政の整理までも、成遂げたのである。而し、それは、たゞに敬親ばかりが、偉かつたのでなく、家臣の中に、優秀な人物が、現はれたから、改革の結果は、頗る良かったのだ。村田四郎左衛門といふ人が、よく敬親を助けて、政治、財政、兵制の改革まで、行つたのであるが、一般には、清風先生として、知られて居る。敬親の養子が、長門守定廣である。少し突飛なところはあつたが、此人が、非常な遺手で、京都への手入れは、多く定廣の畫策であつた。殊に、人材登用に努めて、その出身を問はず、苟も、才能のある者は、これを用ひたのが、あの大仕事の出來た、一原因である。前にいふた、村田清風、それから、桂小五郎、大村益二郎、周布政之助等は、早く拔擢された方で、少し遅れて、高杉晋作、伊藤俊輔、山縣狂介等の人も居る。

桂が、京都の藩邸を受持つて、自由な活動の出来たのも、金が自由になつたからだ。朝廷への獻金は勿論、公卿、浪人、各藩の有志、あらゆる方面に、金を撒いた事は、素晴らしいものであつた。遂には、廟議を動かすやうになつて、京都は、攘夷の本源地となり、關東へ、二度も、勅使が下向した、といふのも、要するに、長州藩の勢力が、伸びて来たからだ。

而しながら、滿れば缺くる、諺の通り、それ迄に張り切つた、勢力の蔭には、それを呪ふものがあつた。何等かの機會に、毛利の勢力を、覆へすべく、次第に其時は、近づきつゝあつた。

流石の桂も、幾分の警戒はして居たらうが、年もまだ、二十七歳のことであつたから、老成の人とちがつて、多少の油断はあつたにちがいない。

薩藩は、長州藩が、京都を、手一ぱいに、搔廻して居る、其状態を見ては、嫉ましくなるのは、人性の常で、何日か知らず、會津藩と、握手してしまつたのだ。

會津は、純な佐幕であつて、それと薩摩が握手するなぞは、頗る變な事ではあるが、長州に當るには、さうする外はなかつたので。此事について、働いたものは、高崎猪太郎と、奈良原喜八郎の二人であつた。

一一

孝明天皇の、大和御幸が問題となつて、朝廷の中にも、兩派に分れて、はげしい争ひが、起つて来た。會津中將は、巧みに、中川宮へすがつて、毛利を驅逐すべく、策動を試みた。その背後に、薩藩のあつた事は、いふ迄もない。

それが、巧く當つて、夏八月の政變は起つた。一夜にして、毛利の勢力は覆へされ、大膳大夫敬親は、禁裡守護職を罷免されて、會津中將が、その後任を拜し、又、それ迄に、毛利を助けた公卿は、すべて處分された。三條中納言

外七卿が、剝官されて、京都を逃げ出したのは、其時の事である。

中岡が、薩長土三藩の聯盟を考へて、しきりに、策動をはじめたのは、其前からの事であるが、土州藩の態度が、容堂の爲めに決らず、三藩聯合は、極めて、望みが薄くなつて来た。

そこで、中岡は、薩長二藩の聯盟に、努めるやうになつた。同時に、坂本が、同じ意見から、二藩聯盟の運動を起した。茲に於て、中岡は、坂本の蔭にかくれ、自分は、別の方面に向つて、策動をはじめた。

西郷、木戸、大久保が、如何に偉い人でも、その出身や、其時の位からすれば、御所へ近づく事は出来ぬ。その出来ぬ以上、朝意を迎へて、機敏な働きは、出来ない譯だ。

どうしても、朝廷と、三傑の間に立つて、聯鎖となる人がなければ、回天の偉業は、思ふやうに、運んで行く事が出来ぬのだ。其人を得るか否かによつて、三傑をはじめ、勤王派の運動上に、非常な影響を、及ぼすのであるから、中岡は、其點に注目して、人知れず、運動をはじめたのだ。

香川敬三の紹介で、岩倉具視に逢うた。一度、話してみたら、爲人の非凡な事も判つて、ひどく岩倉に、傾倒したのである。

三條に近づくには、頗る便宜があつた。山内家と三條家との關係もあり、殊には、平井收次郎の妹が、實美の兄實陸の夫人に附いて、三條家に居たから、これも好都合であつた。中岡は、既に三條の人物を呑込んで、可成りの程度にまで、話は進めて居たのだ。

併し、實をいうと、三條では、中岡も、少し食ひ足らなかつたのだ。ところが、岩倉に逢つてみて、ひどく惚込んでしまつた。其人の善悪は暫く置いて、岩倉ならば、體かに、一芝居打てる、見たのだらう。

岩倉は、堀川家から出て、岩倉家へ、養子に來た人で、大した學問はなかつたが、議論に強く、押し利く事では

公卿の中で、第一番であつた。其上に、機變の才に長じ、存外に膽力もあつた。あの時代には、どうしても、斯うした人物でなければ、いよくといふ時の役に立たぬ。それを見込んで、中岡は、岩倉へ飛入つたのである。然るに、岩倉は、和宮降嫁の一條から、倒幕派の反感甚だしく、遂に、排斥運動が起つて、宮中から、斥けられてしまつた。

此事については、前にも、ちよつと述べてあるが、平井をはじめ、士州藩が多く、此運動に参加して居たのだから、中岡としては、可成り、苦しい立場であつた。

それから、しばらくの間は、薩長聯盟の策動で、多く長州の方へ行つて居た。その間に起つたのが、京都の政變であり、重ねぐの手違ひで、洗石の中岡も、頗る頭を悩ましたのである。

彼是れする中に、三條等七卿は、山口へ乗込んで来る。長州の藩論も、二つに分れて、なか／＼にむづかしかつた。七卿には、戸田雅樂と、上方桶左衛門が、附いて居る。中岡とは、前から、親しみがあるから、しば／＼、七卿にも接近して、後日の伏線は、此時に作られたのであつた。

(註) 戸田は、後の尾崎三良、土方は、久元の事である。

七卿は、三田尻の招賢閣へ引上げた。此所から澤主水正は、平野次郎と、南八郎に、誘ひ出されて、生野の銀山へ向つたのである。

幕府からは、七卿の事について、やかましく、干渉して来るので、遂に、毛利の方でも、七卿の保護は、出来ない事によつて、九州へ、送り出さうとした。

藩論は、明かに二つに分れて、七卿追出しを主張するものは、勢力ある連中に多く、之を擁護しよう、とするものは、松陰門下の元氣連中であつた。

結局は、七卿が、九州へ落込むことになつて、此事は、一段落となつた。

三二

斯ういふ風に、述べてくると、極めて、簡単に、事の運びがついたやうに、思はれるであらうが、實は、二年越の問題で、事件が始まつてから、終るまでに、正月を一度と、益が二度あつた譯で、問題としては、相當に、複雑なものであつた。

長州藩の中にも、硬軟二派の、争ひがあつて、互ひに、斬りつ、斬られつした。硬派の方を、正義黨と稱し、軟派の方を、俗論黨と名づけて、火の出るやうな争ひが、つゞけられて居たのだ。

七卿の事が、片づくこと、今度は、池田屋の一條が、問題になつた。京都の池田屋へ、新撰組が斬込んで、多くの長州人が、斬られて居る。而も、斬られた人達は、桂や久坂が、糸を引いて、或重大な事件を、計畫して居たのが知れて、さうした事に、なつたのであるから、これは長州藩としても、軽く見通す事が、出来なかつた。

いづれにしても、長州人が、公然京都へ、出入し得るやうでなければ、本當の仕事は、出来ないものである。そこで先づ、毛利公が、勅勘を蒙つて、禁裡守護職を罷められて居る。一事から、處置をつける必要がある、といふので、その運動に、京都へ押出すべき相談が、だん／＼持上つて來た。

表面は、七卿の勘氣御赦免を嘆願する、といふのであつた。それに毛利公の御赦免を願ふ事も加へて、藩の代表者が、京都へ上つて行く、といふのであつた。此計畫については、藩中でそれに反對するものがあつて、可成り、紛糾をつゞけたが、遂に、硬派が勝ちを制して、京都へ乗出すことになつた。

家老の福原越後、益田彈正、國司信濃の三人が、藩を代表する事になり、四百餘名の藩士が、護衛の名を以て、各々、甲冑に身を固め、大砲まで引出して、行くのだから、なか／＼の騒ぎであつた。

これが、勘氣御赦免の嘆願運動と聞いては、驚かざるを得ない。甲冑を身に付けて、大砲を引廻し、而も、その人数は四百人といふのだから、恐ろしい嘆願である。

京都へ着くまでには、途中から、だん／＼加はる者も出来て、遂には、七百餘名の人數になつた。

其中に、眞木和泉守を、棟梁として、一團の義勇兵があつた。これが、忠勇隊というて、後の陸援隊である。

長州人のうちにも、なか／＼すぐれた人物が居た。來島又兵衛、久阪玄瑞、入江九市、寺島忠三郎などいふ、屈指の人物が、附いて行つたのだから、大した景氣であつた。

久阪の事は、たび／＼言うてあるから、それを繰返す事はしないが、來島といふ人は、相當の位置もあり、短氣な癖はあつたが、極めて率直な氣風の勇士であつた。

入江は、松陰門下の俊才で、高杉が、最も畏れたのは、此人と河上彌市であつた。河上は、南八郎と變名して、生野の銀山で、死んでしまつたが、どちらも、すぐれた人であつた。

寺島も、度胸の太いのと、文字のあるのでは、塾中の評判者であつた。

此連中が、京都の附近まで来て、三手に分れて、陣を構へた。それを、入洛させまい、として、茲に、争ひの起つて、九門の戦は、始まつたのである。

當時、徳川慶喜は、まだ一橋中納言の時代で、將軍の後見職として、京都に居たのだ。長州の連中が、武裝して、京都へ乗込む、と聞いたから、早速、使者を送つて、福原越後だけの入京は許すが、其他のものは、入京相成らぬ、と、嚴重な沙汰を下した。その結果が、到頭、衝突となつてしまつたのだ。

尤も、その交渉も、一度や二度ではなく、福原が、伏見へ着いてから、數日間の押合ひであつたから、其間には復雜な事情も起り、旁々、早く衝突して、追ひ拂つてしまはぬと、幕府の不利になる、と見て、徳川の方から、喧嘩

を賣りかけた、といふ事情もあるのだ。

此戦は、九月十七日の夜明から始まつて、八つ過まで、續いたのだが、上京の一部と、下京の大部分は、兵變にかゝつて、焼野原になつたのである。

はじめは、長州兵の力強く、九門まで、押掛けたのだが、何分にも、續く兵がないのと、彈藥の欠乏から、晝過ぎになつて、全く敗北してしまつた。

會津と薩摩は、完全に提携して、よく戦つた。長州の人達は、會津藩に對する、怨みはいふ迄もないが、殊に、薩藩が、長州藩に、背中を向けて、會津藩と組んだ事に、非常な反感をもつて、必死の戦ひを、つゞけたのであつた。

此時に、西郷が、島流しから、赦されて來て、大阪へ着くと、もう戦の事が、きまつて居たので、如何ともする事が出来ず、たゞ何となく、京都の藩邸へ入つた。そのうちに戦さが始まつたので、止むを得ず、御所の門を固めて長州兵と、はげしい戦ひをした譯であつた。

それを見て、來島が、西郷を、討つつもりで、馬を陣頭に乘出した。處が、流丸に中つて、落馬した。しかし、流丸でなく、狙撃された弾かも知れない。が、流丸といふ事に、なつて居るのだ。

それほどの戦いであつたから、極く輕傷ではあつたが、西郷も、負傷のために、引取つたのである。

四

中岡は、太宰府へ行つて、三條に逢ひ、岩倉との提携に就て、だん／＼と、話込んで見たが、三條は、容易に、ウムと言はなかつた。

元來、三條と岩倉は、何となく、反が合はないのだ。表面に立つて、争ふやうな事はしなかつたが、岩倉に對する

三條の反感が、可成り、深いものであつた。といふて、人に話の出来るやうな、争ひをした事は、一度もない。たゞ何となく、氣が合はない、といった調子で岩倉を、嫌つて居ただけの事である。

岩倉の方では、それを知つて居たかも知れないが、實をいふと、岩倉の眼中には、三條はなかつたのである。剛腹な岩倉は、どの公卿を見ても、小供のやうに、思つて居たが、三條に對しても、同様であつた。

何事かあつて、互に、顔を赤めての喧嘩をしたから、それを調停する、といふのなら、却て、爲し易いけれども、これというて、喧嘩もせず、たゞ何となく嫌ひだから、反が合はぬ、といった人の間に立つて、調停するといふ事は非常にむづかしいものだ。

中岡は、朝廷と三條の間に、三條と岩倉を立たせて、聯絡の役目を、執らせようとするので、長い間、苦勞をして居たのだ。

初めは三條も、なか／＼承知しなかつたが、遂には、口説き落されて、萬事は、中岡に一任する、となつた。

そこで中岡は、長州へ引返して來た。時に、三家老が先立ちで、京都へ押出した、と聞いて、今の場合に、さういふ事をしては、長州藩の不利、此上もないと考へたので、すぐに跡を追うて、京都へ上つたが、着いた時は、すでに戦端を開くまでに、なつて居たから、據所なく、手を引いて、しづかに、戦争の成行を見て居たのである。

然るに、眞木の率ゐた、忠勇隊の中には、土州人が、可成り入つて居る、といふ事が判つた。其中には、那須信吾の養父、俊平も居て、土州人の活躍は、なか／＼に、めざましいものがあつた。斯うなつてみると、中岡も、傍觀の立場に、引込んで居ることも出來ず、そろ／＼乗出して來た。

もう一つ、中岡の感情を害したのは、此際に、薩摩が出兵をした、といふ事であつた。これは、實に意外に考へられた。殊に、西郷が、陣中に来て居る、と聞いては、疍積の虫が、一層、込上げて來て、戰場へ臨む氣にもなつたの

だ。戦ひは、始まつた。中岡も、必死に戦つたけれども、全體に於て、敗軍ときまつたから、據所なく引上げて來た。

右の足を撃たれて、跛をひきつゝ、中沼塾の側まで來たが、何分にも、足の痛が激しくて、一步も歩けなくなつた。平生から見覚えのある、佐土原藩の醫者、鳥居大炊左御門といふ人の家へ、のそ／＼入つて行つた。

『頼む』

『どうれ』

見れば、血だらけな人が、跛をひきながら、立つて居るので、取次の書生も、少し驚いたらしい。

『決して、御心配の者では、御座らぬ。此先の中沼塾に居る、石川といふ者で御座るが、今朝の戦ひに、長州の奴等が、あまりに面憎く考へたので、只今まで、薩州兵の味方をして、一先づ、引揚げて來たところで御座る』

と聞いて、書生は、

『それは、御苦勞様でございました』

『先生、御在宿なら、ちよつと、療治を願ひたいのぢやが、如何でござるか』

『ハッ、先生は、在宅でございますから、只今申上げます』

書生が、奥へ入ると、間もなく、鳥居先生が出て來た。それから、療治をはじめて、すつかり、繻帯をしてくれたから、大分、痛みは楽になつた。

一旦、中沼塾へ、引上げて來て、しばらく休んで居たが、何分にも、此戦ひに、西郷の來て居る事が、癪にさはつて堪らぬので、今、繻帯をして貰つたばかりの、痛い足を引摺りながら、薩州邸へ、乗込んで來ると、折よく、西郷が居て、面會する事になつた。

「やア、中岡先生、足な、どうしなされた」

中岡は、會釋しながら、痛い足を突出して、

「今、戰場から、引上げて来たばかりです」

「ハ、ア、先生も、戦さに、出なはつたのか」

「左様」

「土州な、出兵して居らぬやうに、思ふたが、先生な、どの藩に屬して、居なされたか」

「長州兵の中に入つて、思ふさま、薩州兵と戦ひ、此負傷をしたのです」

西郷は、眼を圓くした。

「長州の兵に、加はつたのでござるか」

中岡は、ずつと進んで、

「西郷さん、どういふ譯で、あなたは、今日の戦さに、出たのであるか。拙者には、どうしても、その次第が判らぬ

薩長二藩の關係は、非常に、むづかしいといふ事は、あなたも、御承知の筈ぢや。今日の戦ひに、薩人が、出て來

る、といふのが、すでに間違つて居るのだ。其上に、あなた迄が、出て來たのでは、取返しがつかぬではないか」

と、これから、中岡は、薩長聯盟の計畫を打明けて、これから先の意見までも加へた。それは豫て、西郷も、承知

して居るのであるから、正面から、斯うして談じ込まれては、流石の西郷も、ちよつと答へが出なかつた。

「そぎや、言はれては、何とも、申譯もごはへん。實は、大阪まで來居つた時、戦さが始まる、と聞いて、據所なく

出て來たので、ごはすよ」

「それでは、あなたに、戦意がなかつた、といふのですか」

「左様」

「然らば、どういふ譯で、鐵砲を撃ちなすつた」

「長州兵と、幕府方の兵な、いくら戦つても、俺どんな、構はぬつもりでござしたが、何分にも、長州兵な、御所の

門に迫つて來て、紫宸殿の御庭に、大砲の彈な落つるといふのでござすから、御所の御衛りをいたした丈でござ

すよ」

「それが、あなたの本當の心なら、既に戦ひも終つたので御座るから、速かに、兵士は、大阪へ、引上げるやうに、

仕て欲しいのですが、それは、どうですか」

「よろしい、確かに承知した」

それで、話がすんだから、後は雑談に移つて、中沼塾へ、引上げて來た。

(註) 中沼塾とは、中沼了三先生の塾である。此人は、明治天皇の御幼少の御、侍講を勤めたのである。今の西園

寺公も、教へをうけた一人だ。中岡は、前から、此塾に出入して、教へをうけて居たばかりでなく、遅くなると、

泊り込む事もあつた。中沼先生は、よほど中岡を、信じて居たらしい。

五

小松帯刀が、その後、中岡が西郷に懸合つた事を聞いて、中岡の篤度胸に感心した。

「中岡さん、此間は、大層、御立腹で、西郷も、弱つたといふ事であるが、あなたも鼻息は、なか／＼荒いすな」

「あの時は、ひどく疝癢にさはつて居たから、西郷さんの答へが、氣に容らなかつたら、一刺しにするつもりで、覺

悟して行つたのです」

「ほ、う、それはきつか事でした」

「なアに、大した事ではないのです。西郷さんを、島から助けようとして、吾々同志が、三十幾人連判して、久光公

へ、願ひ出た時も、若し、それを聞届けられなかつたら、久光公を刺すつもりで、附けて居た事もあるのだから、西郷さんでも、返事一つで、刺したかも知れない」
小松は、それを聞いて、再び驚いた。
「イヤ、土佐犬の本性は、恐ろしい事ぢや」といつて、額を押へたが、果は、大笑ひになつて、其晩は、薩州邸へ、泊り込んだ。

九門の戦ひに、長州兵が、散々な敗北を遂げる、と同時に、下關では、英、米、佛、蘭、四箇國の軍艦が押寄せて来て、はげしい鬨ひが聞かれた。

中岡は、すぐに引返して、再び、長州人のために、非常な働きをした。坂本は、此時、長崎に居て、その戦争がすんでから、下關へ、やつて来た。

それから、中岡も、一緒になつて、二藩聯盟の事に、奔立をはじめた。

高杉は、此戦ひの最中に、座敷牢から出されて、毛利公の名代、宏戸刑馬と稱して、敵艦へ乗込み、講和談判の衝に當つた。

伊藤と井上が、英吉利から歸つて来て、此講和については、非常に盡力したが、高杉を、談判の使節にしたのは井上が、毛利公を説いた結果である。

講和談判は、うまく終局を結んだが、それと同時に、京都の戦に關する、責任を問ふために、老中の小笠原壹岐守が、廣島まで乗出して来て、毛利家へ、懸合を開いた。
それが色々にもつれて、到頭、幕府は、長州征伐の兵を起した。

此時に、西郷が、うまい芝居を、打つて居る。
征長軍には、薩藩は、加はらぬ事にして、尾州中納言が、征長總督として、廣島へ乗出して来た時、ひそかに面會して、此戦の仲裁を受けけた。

尾州侯は、征長出兵には、反對であつて、容易に賛成しなかつたのだ。其上に、自分が、總督として押出すなごは、一層、迷惑を感じて居たのだが、徳川將軍の命令、もだし難く、嫌々ながら、引受けて来たのだから、西郷の仲裁説に、同意を與へたのである。

松平春嶽は、副總督として、小倉へ来て居る。西郷は、春嶽を説くべく、小倉へ廻つて来た。それを聞いて、中岡が、小倉へやつて来たので、西郷と、會ふ事になつた。

「西郷さん、こんどは御苦勞ですな」
「此戦ひの仲裁をしよう、と思つて、やつて来たのぢやが、今度は、あんたに叱られるやうな事は、ごわすまいな、ハツハ、」

中岡は、思はず頭を押へた。
「今日は、お禮に来たのです」

「これなら、長州人も、いくらか、堪へてくれるでせうな」

「而し西郷さん、京都の戦ひで、長州人か、二十人ばかり、擒になつて居るが、あれは全體、どうなるでせうか」
「ハ、ア、あの儘で、ごわすかな」

「さうですよ」

「よろしい、すぐに、長州藩へ、送り届けるやうに、これから申付けませう」
中岡は、西郷に分れて、下關へ引返した。

此時には、西郷の思ふ如く、仲裁が屈いて、尾張中納言は、廣島から、引上げてしまった。其代り、三人の家老は當面の責任者として、切腹する事になった。

其間に、井上聞多が斬られて、瀕死の状態になった。高杉は、身の危きを悟つて、筑前へ走つた。然るに、三家老が切腹した上、毛利侯父子は、寺院に、謹慎の身になった、と聞いて、高杉は、博多から、引返して来て、山縣狂介を説付け、奇兵隊の力を以て、萩の城下へ迫り、俗論黨を仆して、再び自分等の天地を拓いた。

幕府に對しては、宣戰の布告をして、國境に、兵を繰出す等、高杉一流の、壯快な芝居を打つた。それに引出されて、幕府は、二度目の征長軍を起す事になった。

今度は、仲裁者もなく、本當の戦ひになつて、長州人も、必死の働きをした。高杉は、海陸の總督として、大に奮つたのが、此時である。

けれども、海軍の方が、どうしても駄目だ。そこで、遠く使ひを送つて、坂本を迎へる。中岡も、高杉を助けて、坂本を説いた。

茲に於て、坂本は、海軍の方を引受けるために、海援隊の連中と、櫻丸を貸して、幕府の海軍と、戦ふことになつた。

中岡も、或時は船に乗り、又或時は、陸に戦ひ、長州人のために、少なからぬ努力をした。坂本と中岡の好意に對しては、長州人も、ひどく感激したのである。

此二人が、仲間立つて戦つたのだから、薩長聯盟が成立したのも、當然だといふ事になる。當時、中岡が、國許へ送つた手紙があるから、それを掲げよう。

一筆啓上候。秋冷の時節に御座候處、益々御機嫌よく、御座被爲在、御家内様御一同、御安全に、御渡被候儀と、萬賀奉候。隨而私儀、今以無異相務居申候。

當年二月初旬以來、當國征伐として、數萬の軍勢、幕府より、差向に相成候處、九州口は、老中小笠原壹岐守、總大將として、肥後、肥前、並久留米、柳川、小倉、其他、凡二萬人の人数を以て、豊前國小倉に、陣取相成、長州下關へ、打入の都合に候處、長州より、さかよせ致し、軍艦五隻を以て、田の浦臺場く打掛け、陸軍一千許り、上陸に及び、一戦にて、同所を乗取候。

七月三日、大里と申す處に打入り、又大に勝利を得、同二十七日、又打入り、海陸に、戰爭甚だ烈敷、朝六時より、臺場六ヶ所乗取り、眞中一手は、百四五十人位にて、肥後の備へと打入、不食不飲にて、七つ時迄戦ひ、右百四十人許りの内にて、手負死人百十何人に及び、残る者わづかに相成候事にて、其れより、大戦ひに及ぶの覺悟に御座候處、老中初め、幕府の軍勢、皆々にけ去り、肥後其外に、諸國の兵も、皆引き、終に當月朔日(八月一日)に小倉の城、落城に及び申候。

此度の擧は、長州甚だ強く、身方千人許りにて、敵之二萬人を、打退け候上、兵糧米も四千石計り、大砲百丁餘、玉藥藏も有之候、皆々分取致し申候。

北口も、石州濱田落城にて、天領迄は取込、軍勢多く、出張に相成居申候。藝州は、今以大戰爭にて、未だ、勝敗相付不申候。いづれ早々勝利に相成り、皇國御一定に、相成不申ては、萬民の苦、不一方と、心痛仕り居候申候。

昨夜も、陣所に、宿し申候處、十三に相成候家老と、十六に相成候家老と、皆同宿仕候。食事は、梅干にぎり飯の兵糧を食ひ、軍仕度其儘にて、元より、蚊屋ふとん等も無之、カムト枕にて、足輕など、頸を並べて、伏し居り申し候。少年ながら、必死を極め、戰爭等仕り、感心の事に候。

彼是、申上度儀、御座候得ども、陣中の事故、彼是、取忙しく、筆に盡し不申、奉恐入候。
先は、無事の次第まで申上度、幸便に托し、如此に御座候。恐惶、謹言。
寅八月十三日 認

御父上様
御兄上様
初太郎様

道正

最後の時勢論

中岡が、時勢を論じた文章三種、其一は、「愚論竊かに知己の人に示す」と題したもの、其二は「竊かに古今宇内の盛衰得失を察するに云々」といふ一篇、而して其三は「竊かに示知己論」と題するものである。
前二種は、總説の部に、引用してあるから、茲に、その第三を掲げることにする。これは、慶應三年十月二十六日の夜、中岡が、燈火冥想、虚心公明の態度を以て、想ひを、内外の事に馳せ、筆を下して、書き去つたもので、中岡の論文としては、重要なものである。
殊に、其死の二十日前に書いたものであるから、之れを讀んで、その遭難に想ひ至れば、感慨の、特に深きものがあらう。

窃に示知己論

予、草莽無頼の者也。言を、王公貴人に献せんと欲して、其道なし。故に虚心黙坐、一點の私念を交えず、既往の過を悔ひ、將來の事業を企て、思ふ處を處として、天下の同志に示す。

石川清之助

一、尊王開國、攘夷の兩説有り。輔幕攘夷の空論有り。輔幕開港の私倫粉々、實功いづれもなし。之を要するに、皆、僻する所に偏泥し、其の空論、期するは一也。豫の論する所は、其の僻を去り、私を去り、平素、實地に立

ち、其の得失を、聊か知り覺へての論なり。聞く人、虚心を以て、辨ず可し。

一、予が説は、尊攘なり。或曰、尊王は、即ち善し。攘夷は、不可也。近來、西洋諸國に、公法といふもの、日に益に、遂に各國同盟、政事、甚美にして、先年所謂、外夷と異り、禮を以て交り、信を以て盟へば、何と彼を惡み恐るる事あらん。某曰、然り。君、見込なれば實効を立つ可し。實効あらば又吾朝の一盆なり。然るに、自古、天下有亂、其の政事人心、一張一弛、一盛一衰、是皆、有機て變ず。英人の説に曰く、萬古不易の法なし。人才、國に不絶ば、時々變革し、之を制す。然らば、當今、英佛諸國の同盟も、互に亂に飽き、力、相敵するに依て起れり。今、西洋諸國、治世の極にして、此處へ若し、一大強國起り、我が兵力を挾んで、盟を破り公法を不問、無理に、諸國の小弱を侵掠し、同盟の國より、之を助くると雖も、不勝、終に強國の意の如くすれば、於、是、始て西洋も亂となり、公法も、自然廢し、忽ち小弱の憂となる可し。

一、今時、恐る可きものは、魯也。今、虎狼の心を包藏し、數年來、大兵を養ひ、國用を備蓄し、石炭を用意し、諸國は交易を意とせず、彼の策をして、若し起たしめば、必ず突然侵掠、其の恐れあるは、我朝を以て甚しとす清、之に次ぐ。近日、長崎新聞に、魯兵、突然、崎陽に來り、頻に練兵して、威を張る由。某、初て之を聞きしより、忽寒心、膽將裂、然るに、此説の通りにて、之より彼、亂暴を起すとも、我に於て、固より術なきにあらず。英佛等も、亦傍觀するに非ず。一時の難は、防ぐ可し。されば、今日の急に、尊王攘夷の大本を立るに在り。其策は他なし。國體を立て、皇基を定め、兵を、充實するに在り。之を行ふは、人才也。主とする所は、王室を尊び、萬民を憐むを以て、經世の人とす、才あり膽ありと雖も、此の二條を本とする人にあざれば、政務を任ずるを得ず。只、才の長ずる所を量つて、一事に任じて可也。此の大本を立てんとするには、是非、第一等の公論を以て、幕府の私政を去り、王朝の御基業を、回復するに在り。若し、是迄の如く、姑息の情にて、徳川家の暴威を助げんとすれば、皇國は、徳川の爲めに衰へ、徳川亦千歳の罪名を重ね、家跡、却て滅却に至らん

は必然なり。

一、今より後、此上一年の苟且に過れば、外夷の處置は、遂に出來ぬように可相成と、實に不堪恐懼、右之形勢故也。其の攘夷の策は、今日深く外夷と結ぶに在り。既に結ぶと云からは、涙出でて吳に妻はすの譯にて、其懇親の尤も深厚し、吳に妻はすの二字を、能く玩味すべし。而して、海外諸國、書生を出し、或は外國人を雇ひ、國産を開き、斷然と、大に國を開く可し。如、此して、忽ち武備を設け、兵を練り、名分條理を亂り來る、強惡の外賊を、討つ可し。此事、亦必ず不遠、只、魯のみならず、采利堅亦可恐所在り。某、今春、英の士官と、宇内内の事を談じ、頗る卓識を、聞くを得なり。其説長し。故に、某、攘夷は、吳に妻はすの心得にて、頗る寸陰を惜む。中々、世間の攘夷家、開港家の空論にて、國の興る事は、ゆめ／＼なし。長州高杉晉作は、方今、洛西第一の卓識家の名あり。此説に曰く、英佛方今、大強の勢を以て、支那の衰勢を目かけ、正々堂々を以て、勝んと欲するを、日本、現今に取り、手本とせば、大間違なり。今日、我手本とするは、英佛等の未盛の時、國を起せし節、戰爭度々之あり、之を學ばずんば、何の益かあらんと。此れ名論とす。此れ某の攘夷説也。

一、古人曰く、使功不如使過、眞なる哉、此言、林則徐、斷然、阿片を燒き、事を開けば、即ち之を貶す。而して、支那、遂に今日の衰に至れり。長州の名士、事を、京師に過り、即ち此徒を貶し、國家、殆ど滅せんとす。其士を用ゆるに及んで、能く是を存し、敵を破り、國威を、海外迄も張るの本をなす。薩人、英人を、生變に斬り、遂に戰爭に及びし處、其徒、大に能く戦ひ、此よりして、遂に大島大流の人材被用、大に國體を一致し國體一新の本を成せり。故に今、兩藩の論には、薩を興すものは生變なり、長を強くするものは、度々、長の敗軍、失策の功、又無きに非ず。

一、世人、或は徳川を助げん、と云。或は徳川を不助と云々。議論紛々未決。某、曰、尊王室は則ち、徳川を助る也。助徳川は、則ち尊王室也。故に某は、助徳川論也。助徳川、今日の策は無也。政權を、

朝廷に返上し、自ら退て道を治め、臣子の分を盡すにあり。強て自ら威を張らんとせば、則ち必滅無疑。諸侯、若し信あらば、今日、暴威を助けて、自滅に至らしめんよりは、早く忠告し、一大諸侯となり、永久の基を立てしむべし。左すれば、六百年來、衰へし朝威を、徳川の世に及んで、明公あり、之を太古に復し、名分を明にせりと、後世迄も、米利堅ワシントンの如き名譽を、宇内にあぐべきに、何ぞ一人是をなさざるや。此説、英醫馬關に來り、戰艦を療す。足を破り、悪血の爲めに、痛み不絶。醫、是を見て云、此儘存せば害あらんと。鋸にて、もとより切たり。是等、姑息を脱せしなるべし。助徳川の論と同一也。

一、右數論は、某、自ら考へるに、頗る私心なき説と思へど、他より見れば、亦、私論も有る可けれ共、事實を擧げたるは虚なし。

御疑の諸君は、實地につきて、見給ふ可し。穴賢

十月二十六日夜、燈下勿書畢。讀すれば、亂文にして不分候へ共、書直すべき論に非れば、此の草稿の儘にて、推覽を希ふのみ。

坂本と海援隊

一

龍馬の祖先は、明智左馬之助光俊である。坂本の城、つひに落ちて、光俊の妾は、一兒を抱いて、土佐國才谷へかくれた。それより、坂本を姓として、土州人となつた。

龍馬は、天保六年十月十五日の生れで、父は八平、母を幸と呼ぶ。傳説には、母の幸が、黄金の龍を、夢に見て、その時より妊娠をした。父の八平も、龍馬の生れた夜に、黄金の駒を夢に見る。是に於て、生れた子を龍馬と名付けたとある。

唯だ妙なことには、脊中に鱗のやうに、薄く斑紋があつた上に、産毛が、其うへを掩うて居る、その奇端を見ては、どうも普通の子供ではない。と、父母の愛は、一層深かつたのである。

かゝる奇瑞が、あつたにも似ず、龍馬の性質は、極めて臆腫して居た。寝小便もすれば、泣虫でもあつた。郷黨一人として、龍馬を、仲間にするを好まず、何事があつても、龍馬は、何時も別物にされた。然るに、龍馬は、之を氣に止めない。平氣で、別物になつて居た。父は龍馬が白痴の如くなるを憂ひ、妙心寺といふ、寺へ入れて、坊主に、仕て了つた。龍馬も、強て拒まず、面白さうにして、讀經の稽古を初めた。かくて居るうちに、お經を讀んでは黙想にふけり、沈思することが、屢ばであつた。

一日、机に向ひ、お經を繕いて居たが、

「アツハムム、釋迦の奴、嘘ばツかりいひ居る」

外の弟子坊主が驚いて、熱と、龍馬を見つめた。

「釋迦か、莫迦か、莫迦か、釋迦か、アツハムム」

聞いて居た、坊主は堪り兼ねて、

「何を云はつしやるか。そんなことを云うて、お師匠さんに聞えたら、何となさる。」

龍馬は、ニヤリと笑つて、

「どうかしたのかい」

「お前、今のことは夢中であつたのか」

「今のことゝは」

「釋迦か、莫迦か………釋迦が嘘付だのと」

「ウム………それか、それは云うた」

「云うたぢやない。そんなことを云うて、お師匠様に知れたら、何とする」

「何ともせぬ」

「しかし、叱言が出るぞ」

「出ても構はぬ」

「放逐されるぞ」

「放逐されても、よろしい」

「そんな無茶をいうて、それでは、釋迦が、なぜ莫迦か」

「釋迦に、聞て見ろ、すぐ解る」

「エッ」

「アツハムム、そんなこと、那處にしても、お前に、損得は無からう」

みんな呆れて、黙つて了つた。

終に寺を出て、髪を貯へ、元の武士になつた。文武二道は、胸目もふらず、修業を積んで、郷黨も、稍や目をつけるやうに、なつて來た。

一一

幕府時代には、何處の藩にもあつたことだが、家格のあるものが、軽い身分のものを、侮り辱しめる。理窟から云へば、一も二もなく、善くない事には違ひないが、一般の風俗にはなつて居た。然らば、兩者の軋轢は酷いもので、いつも之れが爲めに、紛紜して居る。果は、切つたり、張つたりの争鬭から、血で血を洗ふに均しい、兄弟喧嘩をする。伶俐の沙汰とは、勿論云へぬ。

土佐にも、矢張り仕事があつて、年來、兩者の軋轢の絶えた事がない。

山内家が遠州の掛川から、土佐に、轉封して來た時に、從行て來た家來を士格と稱し、これが直參で、非常の勢力を有つて居るが、前から土着して居た武士は、一向に幅が利かぬ。一口に輕輩と云つて、頭から侮辱まれて居る。實力の上から押せば、輕輩の方が、遙かに優つて居るのだ。智に於ても武に於ても、容易に士格に降るものではない。及ばぬものは、たゞ山内家を笠に着ることである。そこで領主の威光を後援として、上格の者が、人も無げなる振舞には、輕輩と云はるゝもの、一人として、切齒せざるものはなく、それが、幕末の文久元年の頃に及んでは、愈々甚太しくなつて來た。坂本も、此輕輩の一人であつたのだ。

當時、士格の内でも、人に知られた劍客に、山田廣衛と云ふものが居つた。腕前の出来る所から、人にも尊重され、自らも傲然と構へ、動もすると、他を凌ぐの節がある。

一日のこと、同じ士格の七八人と、郊外の一旗亭で、飲み合つた歸途、伴れになつたのは、松井繁春が唯だ一人、恰も通りかゝつたのが、井口村の土堤の上、頃しも、花の彌生時、春雨が、シト／＼と降り來る中を、ブラ／＼と、遣つて來る。酔うて熱つた顔に、落花と雨が降りかゝる。その心地よさは、千金の價値だ。

「山田先生、危なう御座るぞ」

「いや……大丈夫、何のこれしきの酒に」

口には云へど、ヒヨロつく足元。

「オット………危ない、口は豪いが、足が駄目ぢや、アツハムム」

「さうでないさ。一流を極めた、山田廣衛ぢや。まさかに、酒に足は取られまい、ゑーい………アナ心地よき春の風」

と、謠ひ心の一節も面白く、堤上を、靜かに來る、彼方より、向ひ風の吹きつくる、糸のやうな春雨を避けんとてか傘を半開にして、急足にかけ來る、一人の武士があつた。あなや、といふ間も、あらばこそ、山田廣衛の胸の邊りへ、ドンと衝當つた。不意の出來事に、さすがの山田も、ヒヨロ／＼と轉ばんとして、僅に足ふみしめ、

「無禮者ッ」

松井は驚き、
「こりヤツ、何奴なるぞ。山田先生へ對して、無禮であるぞ」
「これは、疎忽をいたしました。御勘辨下され」
「貴様は、何者かッ」

「疎忽は互のこと、どうぞ御勘辨下され」

「ヤツ………貴様は、平井ぢやな」

「如何にも、仰せの通り」

「輕輩の身分を以て、無禮千萬な。大小投出し、土に手をつき、謝罪をいたせ」

「なんと仰しやる、土に手をつけと」

「如何にも、山田廣衛とも、いはるゝ程のものが、輕輩に、つき當られたとあつては、身の汚れぢや。土に手をついて、詫入るがよい。彼れは、吐ざくに於ては、一刀の下に、斬つて捨てるぞッ」

之れを聞いて、平井は堪りかねた。

「身の汚れとは何事か。拙者とても、武士で御座る。その一言は、聞き捨てに相成らぬ」

「アツハムムム、えらいな、汚れるに依つて、汚れると申した。それが、何と致した。何ぢや、其のさまは」

ぶツ、と平井の顔へ痰を吐きつけた。左なきだに、腕をさすつて居た、平井誠一、こゝに至つて、もはや堪忍もならず、一足さがつて、刀の柄に、手をかけた。

「かねて、聞き及んだ、山田廣衛、相手に取つて不足はなし、いざ尋常に、勝負せよ」

「吐ざいたな小僧、生命知らずの蚊蜻蛉武士、さア來い」

はやくも、下駄を抜き、身構へする。平井は、

「ヤツ」

と、一聲、電光の如く斬り込んだ。

山田は、ヒラリと、飛び退いて、腰の一刀を引抜いた。
「小僧……味をやるなッ」

ジリムと構へて、気合をはかる。平井の元氣は、如何にさかんでも、山田は、兎に角、一流を極めた劍客である。何條、及ぶ可き筈であらう。撃合ふ太刀先も、亂れ勝ちに、ふむ足元は、動もすれば浮き立つて、元氣も、次第、次第に、衰へて来る。呼吸もせはしくなれば、つけた刀に、クルヒも出て来た。

「さア……斬つて来んか、ゑいッ」

山田には、餘裕がある。

「松井氏、早桶の支度ぢや」

平井は焦つて、斬り込まんとするが、少しの隙もない、哀れ、平井は、眼も眩み、今は、最後の覺悟で、身を捨てこそ浮ぶ瀬もありと、

「えいッ」

踏み込んで、斬りつけた。廣衛の體は飛鳥の如く、開いたかと思ふと、もう平井の手元へ、飛び込んで居た。電光一閃、平井は、右の肩先へ、ざくツとばかり斬り込まれた。

「わッ」

タヂ〜と退るを、ふみ込んで、

「えいッ」

横に拂つた一刀に、腰車を割付けられて、ドツカと倒れる。ふみ込んで、又一刀、平井は、虚空を掴む、斷末魔、あへなく呼吸は、絶えて了つた。刀を杖に、山田は、ホツと、呼吸を吐く。さアツ、さアツと、降り来る雨に、顔をうたせて、

「松井ッ、松井氏」

呼べど、松井の應へはない。何處へ行つたか、はや行方も知れない。

「アツハムムム、弱い男ぢやな」

酒を澤山、呑んで居たので、呼吸絶れがひどいので、土堤下へ、ハッリ〜と、降りて来た。土堤に沿うて、帯の如く流るゝ、小川がある。まづ血に染むだ、刀を洗ひ、ビュツ〜と、水を切つて、左の手に、持ち替へて、腰を曲め、右の手に、水を掬うて、咽喉を濕した。

「うーい、酔醒の水の味ひ、下戸知らずぢや、ハツハムムムム」

何時の間にか、此處へ來合した、年若い武士があつて、最前から、山田の油斷を、覗うて居たが、一口飲むだ、水の味ひに曳かれて、山田が、またもや流へ、身を落すやうに、曲めた刹那、抜く手も見せず、斬つてかゝる。

「ヤッ」

肩先ふかく脊中へかけて割付けた。

「うーむ」

不意の重傷に倒れん、としたが、ヒョロツク、足をふみしめて、僅かに振返つた。

「な、な、何奴なれば、聲もかけず、ひ、ひ、卑怯なッ」

「誰でもない。汝のために、打果たされた、平井の兄、池田寅之進は、拙者だ。逆縁ながら弟の仇、覺悟をしろッ」

「なんと、い、い、池田と、さア來い」

痛手は負へど、山田も、流石に、一流の達人だけあつて、元氣を振うて、斬り結ぶ。池田も、相當の力はある。山田は最初の深疵に、血は混々として、流れ出る。眼は眩み、足元の運びも、思ふ様ならず、斬り込む。池田の太刀先するどく、受損じて、またも一刀、よろめく途端に、石へつまづき、バツタリ倒れた。池田は透さず、上

に乗りかゝつて、トウ／＼仕留て了つた。またもや、一しきり吹き起るは、風と雨、堤上の櫻花は、ヒラ／＼と散つて居る。

松井繁春の報知によつて、山田の味方、さては弟の治郎八、おツ取り刀で、馳けつけたが、来て見れば、果合は、既に終つて、空しき廣衛の死骸ばかりだ。一同が、四邊を探せど、人影もない。さては、一足後れたか、と、無念の拳は握れども、今更返らぬことゆゑ、早速、死骸は引取つて、ソレ／＼報知をしたから、人も追々、集つて来る。どう考へても、不思議なのは、尋常の立會ひで、平井如きに、打負くる理由はないのに、かくの仔細、これには、何か様子があらうと、人から人を頼んで、探ぐつて見たら、事情は大略分つた。さては、池田のために、暗撃になつたのか、之れを打捨て置く時は、士格一同の恥辱である。又將來のこともあれば、池田寅之進を、討つて取らん。このこと、平井方へ申込むべし、萬一、彼是れ、故障を申さば、輕輩の奴原、片端より斬つて捨てるも、苦しくない、と、此に評議が、一決して、二人の使者は、平井方へ、向ふことになつた。

四

士格と輕輩の争ひは、日々のことであるから、各自に、組をつくり、その組のうちに、又幾つかの組を立てる。集合をする場所も、出來て居るのだ。今日の政黨の争ひと、毫も違はない。

輕輩組の方では、平井の横死を聞き、同時に、池田が復讐をして、さしも名高き、山田廣衛を、討ち果した、この事が、知れ渡ると、事こそ起りたれ、とばかりで、池田方へ、集まつて來た。大石彌太郎、望月龜彌太、門田爲之助、池田龍太を初め、坂本龍馬も、後れ馳せに、やつて來た。山田には、次郎八と云ふ弟もあり、同志も少なからざることゝ、斯うなれば、一人々々の争ひでなく、士格輕

輩の一統に、かゝることだ、とあつて、無論、山田側より、多數のものが、押して來るに違ひない。然らば、此時こそ、我々の手腕の見せ場なり、とて、ソレ／＼兇器の、準備に及んで、對戦の支度を整へて、待受けた。

かゝる所へ、山田方の使者二人、池田に、面會を致したい、といふ。是についての、評議は區々、何としたものであらうか、キツパリ使者を斷つたものか、ソレとも、池田を逢はせやうか、と、容易に話は纏まらぬ。それを見て、席を進み出たのは龍馬である。

「マア、おまちなされ。折角、參つた使者を、理由もなく、追ひ返すは、武士の道にあらず、と云うて、池田氏を、逢はせるは不利なり。かく申す拙者が、その使者に、應對いたさう。如何で御座る。御異見が御座るか」

斯う言はれて見れば、まさか意見がある、とも言はれない。

「それは、何よりのこと、どうか、左様願ひたい。」

「よろしい、それでは」

龍馬は立上つた、他のものは、次の室で、控へて居る。やがて龍馬は、使者に對面した。

「坂本龍馬と申します。お使ひ柄、御苦勞千萬、御用の趣きは、何事で御座るか」

「御挨拶申す。拙者は池上左馬太、これなるは村島俊藏、用事を申すは、池田寅之進殿一條に、就てと御座る」

「ハムア、池田氏の事……何事で御座るか」

「餘事でもないが、昨夜、井の口村の堤上に於て、自分仲間、山田廣衛と申すもの、池田氏のため、暗撃されたので御座る」

「成程」

「それについて、我等一同の評議は名乗り合つて、尋常の勝負なれば、討つも討たるゝも、武士の習慣、何の異存も御座らぬが、暗撃とは卑怯千萬、幸ひ、山田にも、治郎八と申す弟も御座れば、池田氏を申受けて、治郎八と、勝

負いたさせたく、其處で、我等兩人、おかけ合ひのため、罷り越したる次第ゆゑ、御即答を願ひたい』
龍馬は聞き終つて、

「イヤ……折角の御申越ぢやが、それは残念なことを致した」

「ナント言はるゝ、残念なことを……さては、此期に及んで、池田は、逃げ隠れでも、致して御座るか」

龍馬は稍氣色を變へた。
「我等同志に、他を打果して、逃げ隠れ致す様のもの、一人も御座らぬ」

「然らば、如何めさりしか」

「切腹して、相果て申した」

「ヤツ……切腹致されしとな」

「如何にも」

流石、兩人の使者も驚いた。事の案外なるに詞もなく、龍馬の顔を、見詰めるばかりであつたが、それよりも驚いたのは、次の室に居た連中だ。池田が、腹を切つたとは、挨拶にも程度があつたもの、この場の一時は、通れるに仕ても、後で何と始末をつけるつもりか、飛んでもないものに、掛合をやらせた、と、今更ながらの後悔、使者は膝を進めて、

「實に意外千萬の儀を承はつて、池田氏のお覺悟のほど、感じ入りました。然る上は、せめて其死骸なりと申受け

たいが、如何で御座る」

「それはお断り申す」

「ナニ……断るとな」

「武士たるものが、切腹いたしたる上は、跡に宿意のあるべき筈がない。殊に、深き最後を遂げたものを、引渡す

杯とは、生命にかけても、出来申さぬ」

道理ある一言に、使者は、流石にゆきつまつた。死骸を見る事さへ断られて、空しく歸つて了つた。

跡の騒ぎが豪い。池田は、ピン／＼して居る。切腹した杯とは、飛んだ話だ。さア此始末は、何とつけるか、同志

は龍馬の失言を責めて、左右から、つめよるといふ騒ぎだ。

猛り立つ、一同を制して、龍馬は頗る落つたものだ。

「マア、お待ちなされ、騒いだとて、事のわかるものでは御座らぬ。池田氏が、切腹せしやうに申したるは、武士と

して、爾申す他は、御座らぬからぢや。池田氏の名を思ひ、我等同志の面目も、思ふ以上は、かく答へるの外は御

座るまい」

この答には、又案外の思ひを爲して、

「とは、如何なる次第……」

「さればで御座る。池田氏は、兄として弟の讐を討たれし人、乍去、名乗合うて、尋常の勝負とは違ひ、言はゞ暗撃に均しきもの、力量の及ばぬ爲め、とは申せ、實は誇るに足らざる次第、殊に、池田氏も、一廠の武士、切腹は無論のこと、その上にも、彼等が、無法を申張るに於ては、對手となつて、一戦するも善し。今は、義に於て、池田氏のお覺悟こそ、拙者の望む處で御座る」

と、快辯、恰も水の流るゝ如だ。怒つて詰寄つたものは、勿論、聞き居る人々、いづれも酔へるが如く、顔と顔を見合せて、暫時、言語もなき折柄、隣室に聴ゆる、怪しき呻吟の聲、襖を開けば、こは如何に、池田寅之進は、双肌くつろぎ、美事の切腹に、四邊は時ならぬ、血潮の花。

「ヤツ……池田、切腹しをつたか」

池田は、苦しき呼吸を、吐き乍ら、

「さ、さ、坂本氏、こ、こ、これで、武士道が……………」

龍馬は近寄つて、

「お立派、武士の龜鑑ぢや」

この一言に、ニツコリ笑つて、刀を、グーツと引廻す、後背へ廻つて龍馬は、

「おいッ」

と、掛聲もろ共、池田の介錯を仕た。一同は、流石に涙にくれる。龍馬は、やがて下緒を取つて、血汐にひたした

「山田氏、この下緒は御身の筐ぢや。武士の龜鑑として、世に傳へ申すぞ」

検視の手續も終つて、葬式も、立派に営まれた。山田の潔き最期は、人から人に傳へられて、山田の味方も、今

更ら如何とも爲し難く、この事は、是れにて沙汰済みとなつた。龍馬の計らひ、誠に宣しきを得たり、とて、これ

よりは、龍馬を、輕んずるものは無くなつた。

かくて、龍馬は江戸表へ、出て來た。勿論、文武の修業が、目的ではあつたが、傍ら天下の形勢を視察したい、爲めであつた。劍法の師を、千葉貞吉と決め、入門の手續も終つて、毎日のやうに、通うて居た。貞吉の兄が、周作である。周作の長子、重太郎と、龍馬に、親しく交はるやうになつた。

そのうちに、米艦浦賀に來つて、江戸の騒ぎは一方ならず、幕府の狼狽、浪士の憤慨、今にも開戦するやうな噂さであつただ、それも、ホンの一時で、米艦は去つて、人心は落つた。乍併、二百年もつづいた、太平の惰眠は、全く之れが爲めに破られて、鬱勃たる不平の氣は、到る處に、勤王攘夷、佐幕開港と、さまざまに、姿を變へて、現はれて來た。

龍馬は、靜かに形勢を觀望して、區々たる修業に、日を送るの時でない、と、此に決心して、終に江戸を立つて、

京都に向つた。此時分の京都は、天下の人材が集まつて、有らゆる計畫の暗闘が、始まつて居たのだ。龍馬が、此間に奔走して得たる。智識は一通りでなかつた。

形勢は、時々刻々に迫つて來る。今は、江戸と京都の争ひ、となつた。勤王か、佐幕か、それが則ち、結局の分れ途である。龍馬は、土佐から、やつて來て、勤王論を唱へ、浪士の糾合を、はかつた。日を経るに従つて、味方も出來る。同志の間に、漸く重きを爲すやうになつた。

六

坂本が、江戸に居つた頃、勝安房を、斬りに行つた、といふ面白い話がある。

その前から、勝は、大坂の安治川筋に、居た。西郷が、薩摩の海軍に就て、教へを受けたのは、その頃の事であるが、坂本と勝の關係も、また同じ頃であつた。

勝に對する、世間の評判は、餘り良くなかつた。士人の間では、奸物として、ひどく排斥するものもあつて、攘夷派の人達は、殊に嫌つて居たのだ。

勝は、幕府を説きつけて、兵庫へ、海軍操練局を設けた。これは、幕臣に、海軍の事を、教へるための場所である操練局に關する用事で、勝が、江戸に出た時であつた。坂本は、勝を、國賊の如く視て居たので、斬つてしまはうと考へたのだ。

重太郎に話して見ると、同じ意見であるから、幸ひ重太郎が、勝と面識があるので、二人は揃つて、勝を、訪ねる事になつた。

「頼まう……頼む」

この事があつてから、坂本は、勝を師として、その教へを受ける事になつた。勝も、坂本の爲人を信じて、腹藏な

く何事も、打開けるやうになつた。

後日、坂本が、西郷吉之助に面會するのは、勝の紹介によつてである。幕臣、勝の紹介で、西郷に逢つた、坂本が薩長の聯合を策して、薩長の聯合が、幕府を倒して了つた。此間の消息は、實に奇妙と、いふの外はない。

七

神戸操練局は、無論、幕府が建てたもので、勝は、其局長たるに、過ぎないのである。従つて、幕府に反對のものは、決して足踏の出来る所ではない。然るに、勝は、ソナナ事には、無頓着で、何でも構はず、引つ張り込むので、幕臣の不平は一と通りでない。初めは蔭口を、叩いて居たが、終には勝に、ぶつつかつて言ふものさへあつた。しかし、此時代の勝は、大きく言へば、世界的人間になつて居たのだ。洋行して、外國の風物に、接して來たので、佐幕杯といふやうな、小さな事は、何うでもよい。爾來の争ひは、外に向つてするので、内訌で、日を送るのは、愚の至りだ、と、既に自分の意は、決して居たのである。

されば、人材を造る、といふのが、唯一の目的であつて、直參だとか、陪臣だとか、勤王だとか、佐幕だとか、それ等の事には、介意して居ないのであつた。部下のものや、門生が、彼れ是れ言へば、その意見でヤツつける。

幕臣には、勝の心が、よく解らなかつた。従つて、其關係が疎くなる、疎くなるほど、疑惑は深くなつて。終に勝は、幕府を、咒ふ奴ではないか、幕府の祿を食んで、幕府の恩を思はざる、不忠の臣である。と解釋して了つた。

水府浪士の甲宗助を、中心として集まつた、二團の浪人組がある。縁故を求めて、いづれも、操練局に出入して、その教授を、受けて居た。この連中は、極端な佐幕派であるから、殊に、勝の言行に對して、不満を抱くこと甚だし

く、終には、勝を以て、獅子身中の蟲であとなし、幕府の利益に、ならぬものであるから、寧ろ暗殺して、仕舞はうといふ事に決した。

その實行掛も極まつて、勝を窺ふ事になる、と、勝に、油断がないから、打つて掛る隙がない。氣の故か、覺られなやうにも、思はれる。怖氣がついては、手が出せない。どうも、不思議だ。こんな筈はないが、これは誰れか、味方のうちに、機密を洩す奴があるのではないか。かうなると、俱吟味だ。彼奴の眼付が可笑いとか、此奴の眼玉がイヤにギョロついて居るとか、つまらない評議に、日を送る、其うちに、衆疑は、一人の男に、集まつて來た。それは、乾十郎と、いふものである。どうも、彼奴が怪しい、といふ事になつた。

操練局の塾長は、佐藤與之助と言ふ人で、乾は佐藤と深交がある。他目から見ても、兄弟のやうであつた。佐藤は勝の目鏡で、塾長になつて居る男だ。乾が、佐藤に洩らして、勝は、佐藤から、秘密を聞いて、それで警戒して居るのだらう、と斯う考へたのであらう。勿論證據はなく、獨斷であるが、乾を血祭りに、斬ツつけることに決した。

伊達小二郎は、坂本の紹介で、勝に面會して、操練局に、はいつた。けれども、別に爲す事もなく、その日を、送つて居た。自然、甲の連中とも、懇意になり、乾とは、更に深く交際して居た。

乾は大和の浪人で、溫和なりちに、健全した所があり、立流な人物であつた。乾は伊達に服して居るから、心腹を打明けて、何事も相談するやうに、なつて居た。

小二郎の爛眼は、乾と甲宗助の一派と、相容れなくなつたのを、視て取つた。けれども妄りに口外す可きことでないから、黙と容子を、見て居ると、益す危険を、感じるやうになつた。それが果して、何で左様いふ事になつたか、と言ふ事は、小二郎にも解らないが、唯兩者の間に、何となく疑惑の叢雲が、掩ひかゝつて居る、といふ丈けの事は覺り得たのである。

何とかして、之れを救ふ道はないかと、考へた末、本人に話せば事が面倒にならうから、塾長の佐藤に、相談の

外はないと思つた。折から佐藤は、大阪に行つて居る。坂本も、佐藤と共に、大阪に居たのだ。是に於て、小二郎は、大阪へ急行した。

八

勝の住居は、大阪にもある。神戸にあるのは、學校で、大阪が、眞の住居であつた。従て坂本は、多く大阪に居たので、恰度、佐藤の遣つて來た時、坂本は、旅館に居た。

「エー、鳥渡甲上げます」

「何か」

「旦那様を尋ねて、おいでの方が御座います」

「何と云ふ人か」

「伊達様、とか仰しやいました」

「うむ、さうか、こちらへ、案内して呉れ」

宿の番頭は、バタ／＼いつて了つた。

「佐藤……何ぢやらう、伊達が來た、といふが」

「左様さ、何であらうか」

所へ、はいつて來たのは、例の小二郎だ。

「イヤ、佐藤も居るな」

まづ座について、一二杯は獻酬する。

「何か用事か」

坂本が、切り出すと、佐藤は、

「もし、秘密の事なら、拙者は、遠慮仕やうか」

「それには及ばぬ。實は、佐藤の方へも、廻つて來たが、此方に居つたのは、僥倖の事ぢや」

と、これから、小二郎は、乾十郎のことを話し出した。

「さ、斯う云ふ次第ぢやから、はやく救はんと、意外の災禍に、なるぢやらう、と思つてな」

佐藤は、手を拍つて、

「ヤア、それで、悉皆解つた。實は乾からも、同志との折合ひが、悪い事は、聞いて居つた。それに、不思議な事があるのは、今、邸を出る時に、乾から書面であつたが、どうも、其意味が解らぬから、兎に角、此方へ參るやうに申し遣はしたが、これヤア、變ぢやぞ」

「その手紙と、云ふのは」

「こゝに、ある」

佐藤の取り出した、乾の手紙を、三人が、讀んで見る、と漸く出て來た。「用事があるなら其方へゆかうか。それとも、待合せやうか、返事を待つ。旅宿は、例の難波新地である」と書いてある。いかさま、何か、仔細があるらしい。

い。これでは、佐藤が、呼んだやうに思はれる。併し、佐藤は呼びもせず、打合せた事もない、といふ。返事には、

兎に角、此方へ參れ、と書いてやつた、とのこと、坂本は、始終を聞いて、

「これチア、乾の危難は、迫つて居るぞ。はやく行かぬと救へんぞ。さッ行かう」

平生は、非常に沈着して居る、坂本も、今日ばかりは、氣早く立上つた。小二郎も、佐藤も、同じく立つた。三人は打揃うて、難波新地の、乾の旅宿へ、やつて來た。

「乾どのは、御座るか」

「ハイ……只今、お出まして御座います」

「いづれへ」

「お舟で御座いまして、多分、安治川筋で御座いませう」

「一人か」

「イエ……五六人様で」

「何と云ふ人が居つたか、氏名は解らんか」

「さア……その所は」

「どんな様子であつたか」

「何んでも、お座敷では、豪いこと、議論を遊ばして、居られました」

大略は、推し得た。甲の連中が、無理に、連れ出したのだらう。急いで旅宿を、立出た三人は、船宿へ、遣つて来て

一隻の小舟を、準備させた。早船仕立の二挺櫓、矢を射る如く、安治川筋へ、乗り出した。堤に沿うて、上流へ、え

ツさ、えツさ、櫓拍子揃へて、急ぎゆく。

却説、乾十郎は、佐藤與之助の使に依つて、難波新地へ、やつて来て見ると、肝腎の佐藤は居らぬ。

さても變な事だ、と思つたが、取敢へず、佐藤へは、手紙を持たせてやつた。その返事を、待つて居る、所へドカ

ドカと、はいつて来たのは、甲の連中、さてはと、氣がついたけれど、もう遅い。乾は、度胸を据ゑて、僞手紙や、

僞使は、武士にあるまじき、卑怯の振舞である、と責詰つて見たが、何の甲斐もなく、そのうちに、何でも一途に來

い、と言ふ。拒んだ所で、承知も爲まい。潔よく乾は、之れも承知した。

これから、舟に乗せられて、安治川筋へ出た。かねて準備の場所、と見えて、舟は横付になつた。一同は、ドヤド

ヤと上る。乾も、その中へ交つて岸へ上つた。

「ヤッ」

と、聲をかけて、乾の背後から組付くものがあつた。

「これは」

ツ、と振り解うとする。前から、かゝるものは、大小を、抜き取つて、駈け出した。手取り足取り、看る／＼うちに

縛して、了つた。乾は、血眼になつて、

「ひ、ひ、卑怯なッ」

「黙れッ……仔細は、今解る」

哀れ、乾は、傍らの立木へ、括りつけられた。

九

一言に、繩目の耻辱と申して、武士たる可きものは、寧ろ斬られる事は、忍び得るが、生ながらの繩目は、無上の耻辱だ。乾は、一廉の武士である。耻辱も知れば、面目も重んずる。その武士を、事もあらうに、大小奪うて、堤上の立木へ縛する、とは、恰で畜生の扱ひである。

十郎は、初めこそ、拒んでも見たが、斯うなつてからは、もう覺悟を、仕て了つた。今更爭ふ心もない。齒噛み、

眼を閉ぢて、彼等の爲すに、任せて置く。

「乾……これッ、十郎」

甲宗助が、腰の一刀引抜いて、乾の前へ、突付けた。

「我等の機密を、洩らしたのは、獅子身中の蟲にも均しい業、貴様の如き奴は、武士の風上にも置けぬ。眞に卑しむ

可き、犬士とは、貴様のことぢや。さア、眞直に白狀して、刃の錆に、なつて了へッ」
十郎は、猶黙して居る。

「これッ……何とか言はぬか」
長い刀を、十郎の願の下へ、グツと差付けて、顔を引起すやうにする。

「これッ……貴様には、耳がないのか。返辭をせぬと、此儘に、打ち斬るぞッ」
甲は、刀を振り上げた。十郎は、徐に眼を開いて、

「少し待たッしやい。斬るも斬らるゝも、武門の習慣で、止むを得んが、罪状も明白にせず、理不盡に取つて押へ、繩をかけて斬る、といふのは、それが果して、武士の道で御座るか。疑ひを受けるは、身の不徳誰れを恨む所もないが、餘りと申せば、無法の致方だ。お手前も、人に知られた、甲宗助ではないか。拙者如きもの唯一人を、多數で打圍み、立木に縛して斬らうとは、それでも、武士の端で御座るか。言ふ可き事も、未だ御座れど、この上は申さぬ。さッ、聞るとも、突くとも、御隨意に、さつしやれ」
言ひ放つて、眼を閉ぢた、覺悟の體を見て、一同は、刀の柄に手をかける、甲は、流石に、十郎の一言を聞いて、默然として、稍々思案に耽つた。

折柄、えいさ、えいさ、安治川を、二挺櫓の勇ましく、此方を指して、漕つけるものがある。

「ヤッ……誰れか來をッたぞ」
「何か叫んで居るぞ」

舟は、矢を射る如く、ヤッて來る、誰れか知らぬが、白扇を、高く翹して、

「オーイ……しばらく待てッ……その制敗、待つた」
聲を限りに、奴鳴る。甲の連中も、不審に思つたが、刀を收めて、舟の着くのを待つた。

ここへ遣つて來たのは、言ふ迄もなく、坂本、伊達、佐藤の三人である。舟は、漸く岸についた。ドヤ／＼上つて來た三人を、見るより、甲の連中は、ギョツとした。殊に當の敵手の、佐藤も居る。殊に、坂本、伊達の來たのも、不思議だ。坂本と佐藤は、先づ乾を、掩ふやうにして控へた。伊達は進んで、

「ヤア……御一同、突然の推參で、意外に思はれたで御座らう」
伊達の態度が、如何にも冷然として、一同を、睥睨するが如き、容子に堪らず、甲は、

「イヤ……御挨拶は後のこと、何で、此場へ來られたか、まづ其次第から、承はらう」
「その用件と申すは、乾氏のことと御座る」

「なソと」

「何ういふ事の、行き違ひか存せぬが、一應の掛合でも、解るべき些細の事に、此騒ぎは、餘りに大人氣ない。殊に乾氏も、一廉の武士、因果を含めて、詰腹といふ事も御座る。立木に縛して、斬るにも及ぶまい。」

これでは、足下等の致方が、普通の狼籍ぢや、マア、兎に角、此の場は、拙者共に、お預け下さい」
理の當然に、返へす辭はなく、多少は、耻辱も知るから、今更らに、無謀を悔ゆる、態度も見えた。坂本は、ズツと進み出で、

「伊達からの申出は、どうぞ、御開濟を願ひたい。乾氏は、拙者共に於て、お預り申す。事の落着迄は、儘に、お預り申す。お疑ひの一條も、必らず拙者共に於て、明白に致すべし。どうぞ、お任せを願ひたい」

と、應對は穩かだが、一つ間違つたら、無事には済すまじき、様子も見える。敢て恐るゝにはあらねども、好んで此連中と、衝突するにも及ばぬ。トウ／＼坂本へ、預ける事に決した。

宗助等はさきの上陸すると、舟を歸したので、今、十郎を、坂本に預けて、引上る事になつたが、船がないので、堤上を、ブラ／＼歸りゆく、跡に残つた三人は、乾の繩を解いてやつた。

「意外だ、災難で、御座つた喃」
乾は、眼を瞬たき、

「拙者は生れて……これほどの恥辱を、覺へませぬ」
坂本は、

「御尤に存する、しかし、彼等は、血に渴したる、野犬に均しき輩、足下のお名前には、何の影響も御座らぬ。この後のことも、拙者等に、御一任を願ひたい」

佐藤も進んで、
「坂本氏の仰せらるゝ通り、貴殿の面目は、我々が、必らずお立て申す」

「イヤ、何共、御厚志の段、謝するに辭も御座らぬ」
伊達も、頻りに慰める。これから、四人は揃うて、船に乗つた。坂本の意見で、宿を變へる事にして、兎に角、事の

落着までは、居所を知らせぬのが可からう、と、いふ事に決した。
坂本に、乾を、預け歸つた、甲の連中は、二三日待つたが、何とも沙汰がない。是に於て、使者を以て、催促に及ぶ、と、坂本の答へが、面白い。

「段々、本人に談じたる所、更に覺えのなき事である、といふ。拙者も、左様思ふ。ついでには、友を賣つた、と云ふ確かな證據を、示されたい、兎角は、其上にて決めやう。水掛け論では、處置の致しやうもない」

と、言ふのであつた。この報告を聞いて、一同は激した。怪しからぬは、坂本である。と、怒つては見たが、何とも仕やうがないので。乾を取戻さうと、いふ事になつた。宗助等は、坂本の旅宿へ、やつて来て、乾取戻しの談判に及んだ。坂本は、一も二もなく、刎ね付けた。

「安治川堤の約束が、事件の落着迄、預る、といふのであつた。今更、引渡す事は出来ぬ。それよりは、貴殿等の秘密を、乾が、佐藤に洩した、といふ、證據を、早く示されたい。それさへ判れば、如何様とも、處置の致しやうはある。只だ怪しい、と丈で困る。苟も武士を、面縛するほどの事に、證據のない事もあるまいから、それを示されたい。乾を、渡す渡さぬは、其上の事である」

と言ふので、これには、一同も弱つた。さては一杯、はめられた、と思つたが、今に及んでは、致方がなく、空しく引上げて来て、相談は、むづかしくなつた。

坂本は、私に思ふやう。乾を、普通の所へ、置くのは、頗る危険だ。安全の所へ、移して置いて、それからの事だ

とへたので、これから陰置場を、さがす事になつた。時に、西の町奉行で、松平大隅守といふ人が、自分も、よく實際うて、知つて居るし、事理の解る人でもあるから、これが宜からうと、思つて、早速大隅を訪れた。

事の顛末を話して、乾を、預かつて呉れ、と頼み込む。大隅は驚いた。役目の上からいうても、捨て置けない。況して、坂本の頼みである。快よく請合つて呉れた。そこで、乾を、大隅の役宅へ移した。坂本も、随分、面白い事をやる。今でいへば、警視總監の家へ、此男が危ないから、預つて呉れと、持込むやうな理由で、また、宗助等を制するに、こんな巧い法はない。斯うして、坂本は、澄し込んで居た。

乾を引渡す事が出来なければ、せめて、其居所丈でも、明示して呉れ、このことであるから、坂本は、其使者に對して、

「居所丈を明示せ、といふなら、それは明示さう。松平大隅守役宅に居る」

と聞いて、使者も驚いた。二の句が、吐けずに歸つて、此報告を爲る。血氣の者が、是れ迄に、愚弄されて、怒らずに居られない。坂本といふ奴、容易な事では不可ぬ。寧ろ、果敢をつけて、誘き出し、打つ放して仕舞へ、といふ事

になつた、果狀を認め、使者も極つて、使者は、直ぐに坂本方へ、やつて來た。さア面白い、この使者に對して、坂本が、果して何うするか。

斯ういふ事は、局外者から見ると、實に詰らぬ事だが、本人に、なつて見ると、容易ならぬ事だ。枝から枝を生じ、争ひの本物は無くなつて、飛んだ所へ、火が移り、その方の喧嘩が、大きくなる事は、世間にも往々ある。殊更ら、幕府時代の武士、といふ奴、妙な所へ、節をつけて、肩胛を張るのが、一般に、武士の見榮のやうに、なつて居たので、芝居にも、能く演る、武士の鞆當、挨拶させえ杯も、考へて見れば野暮な話だ。龍馬は、宗助等の使者に、面會すると、手渡しにされた、一通の書面、それが左封だから、

「はゝア」

と、悟りながらも、開いて見たら、案の如く、決闘状である。

「乾十郎の件に關して、再度の食言のみならず、豫め謀つて、我等を、愚弄するが如き、仕向は、決して此儘には捨て置き兼ねる。武士道の意氣地、止むを得ず此に果合を申込む。時刻と場所とを定めて、返事をせよ」

と、いふのであつた。龍馬は、微笑を含んで。

「お使い柄、御苦勞に存する。かうなつては逃げもされまい。委細承知仕つた。時と場所とは、然るべく御指定を願ひたい」

「それについての取極は、貴殿より、御指圖を願ひたい、と、一同の申出に御座る」

「しかし、拙者は、果合など、致したく御座らぬ。お任せなさると、あれば、場所も、容易に決まるまい。それよりは、貴殿方にて、お取極下ささい」

「然らば、一應立歸つて、申通じませう。御返書を願ひたい」

「書面迄で、及ぶまい」

「イヤ、式で御座れば、頂戴いたしたい」

「よろしい、それでは、認め申さう」

龍馬は、筆を執り、紙を展べて、スラ／＼と、書き終つた。

「申越されし果合は、承知仕つた、時と場所については、可然、御指定を待つ。當方は、好む事にあらねど、挑まれて見れば、致方もなし、諸事、御指圖に従ひて、お對手仕るべし」

と、いふのであつた。

使者が、立歸つた所へ、漫然とはいつて來たのは、勝の門人で、澤村惣之丞である。役者のやうな、名の男だが、坂本に服すること、勝よりも一倍、何事も只だ、坂本次第と、いふ人物であつた。

「先生………御客來のやうでしたな」

「うむ、妙な客さ」

「何ですか、アレは」

「見られたかな」

「門を出る時に、チラリと見たのですが、むづかしい顔を、仕てゆきました」

「あれは、甲宗助等の、仲間御座る」

「ははア、例の猪連………何の用事で、參つたのですか」

「これを、御覽なさい」

と、いつて、渡された書面を、讀むで驚いた。これは、決闘状である。

「ヤツ、これは果合の……先生、何と御返事を、されました」

「承知して、やつた」

「えッ……承知して……それでは、果合を爲さるつもりですか」

「どうも、仕掛けられて見れば、仕方がない」

澤村は、暫時黙然として、手を組んで、考へて居たが、

「何時といふことに、なつたのですか」

「それは、向ふの申出次第」

「場所は」

「それも、先方次第」

「なる程」

澤村は、頻りに其不可を説いて、對手になるなといふのだ。龍馬は、獨りニコ／＼、笑ひながら黙流して居る。澤村は、手持無沙汰に、立歸つた。

勝の宅は、大阪にあるので、これにも、塾生は、少なからず居る。澤村も、其一人であつた。

「先生、只今戻りました」

「澤村か、坂本は、何うしたか」

「はい、困つた事が出来ました」

「なんだな」

澤村は、有りし次第を物語る。勝も、これには驚いた。

「そりやア、えらい事だね」

「先生、何とか救ふ道は、無いものでせうか」
「さうさ、若しやつた所で、坂本なら、大丈夫だが、併し、やらん方が、いゝね」
「何とか、御工夫は……」
「どうか、なるだらう。よし／＼」
勝は、ひとりで合點いて居た。

一一一

却説、龍馬は、再び甲宗助の、書面に接した。決闘の場所は、天王寺境内と決つて、愈上其當日となつた。流石に龍馬は沈着して居る。約束の時刻前に、ぶらりと出かけた。何の準備もない、普通の儘である。

之れに反して、甲の方は、人数も多いし、騒ぎもえらい。恰で戦争にでも、行くやうな支度で、そろ／＼揃つて、天王寺境内へ、やつて来る。未だ龍馬が、やつて来ないから、足場をはかり、手筈を定め、頻りに準備を、仕て居ると、何だか變な奴が、ウロ／＼して居るから、それを咎める、と、黙つて行つて了うたが、また、やつて来る。けれども、一同は、逆上して居るから、ふかくも注意しない。そのうちに、時刻が、近づいて来た。龍馬は、未だ見えぬ。若い連中だから、少し焦つて来る。

折柄、遙かに聞ゆる、馬の足音、何となく四邊が、騒がしくなつて来た。これは妙だな、と甲も、少し氣がついたやがて、馬上の武士一人、見れば、龍馬ではない。見馴れぬ人である。ズカ／＼進んで、甲の前へ来た。

「お手前は、甲宗助と云はるゝか」

「如何にも、甲で御座る」

「拙者は、小笠原圖書頭の申付けを、受けて参りしもの、お手前方、御一同を城内まで御案内申す。お出で下され」

「ナニ………城内迄」
 「左様」
 「何の用事で」
 「圖書頭の命で御座る」
 見る、奉行手附の役人か、または、大阪城代の下役か、それは判明らぬが、彼處に十人、此處に二十人いざと言はゞ、躍りかゝらん容子である。

勝は、門人の澤村から、坂本が、決闘を申込み、之に應じた事を聞くと、直ぐに大阪城内へ、やつて来たのは小笠原圖書頭に、面會の爲めで、圖書頭は、例の御迎論以來、大阪城内に、留つたのである。その御迎論とは、將軍の家茂が、朝命に依つて、上洛した後、將軍を、長く京都に、置くのは不可だ。奸智に富んだ長州藩が、如何なる企てをするか分らぬ。何でも早く、御歸府を、御勧めするが可からう、といふ事になつた。所へ、斯ういふ風説が、傳はつて来た。今度の將軍上洛は、大原重徳卿が、勅使として、關東へ下向せられた結果で、それは、長州派の計ひである。桂小五郎が、朝廷を一杯に、かき廻して居て、同腹の公卿と謀つて、勅命を名にして、將軍を呼びつけ、否應なしに、攘夷の御請をさせ、幕府を、外夷と朝廷の、板挟みに仕て、自滅させる計畫である、と、いふのであつた。これは所謂、風説のみでなく、事實も、全く左様であつた。此に於て、圖書頭は、旗下の士、三四百を引率して、江戸を發し、大阪を経て、まづ伏見に陣取つた。朝廷からは、勅使を遣はして、之れを追拂ひにかゝる。その時に、宗光の兄五郎が、非常に働いた。圖書頭を説破して、終に事無きに至らしめたが、この時の騒ぎを指して、例の御迎論と述べた次第だ。それから、圖書頭は、大阪城へ退く。將軍も、歸府を許される、といふやうな譯で、御迎論は鎮靜つたが、圖書頭

は、幕命を受けて、猶ほ大阪城に、留まる事になつた。この人は、後に壹岐守となつて、老中にまで進み、幕府衰倒の時に當つては、容易ならぬ働きを致し、藩臣からも、名君として仰がれた。勝は、此人に據つて、坂本問題を解決しやうとしたのである。

「よくお訪ね下された。何か珍らしい事でも御座るかな」
 圖書頭は、更に隔意なく、打解けて居る。勝は、例の氣象とて、聊か遠慮もない。
 「左様、珍らしい事が御座つて、御伺ひ致しました」
 「ナニ………珍らしいこと、それは、何事で御座るか」
 「されば、天王寺境内に、果合が御座る」
 「果合………はア、それは珍説、何ういふ次第で」
 「此頃、市中を荒らし歩く、水府浪人、甲宗助一味のもの共、私の宿意を以て、土州藩士、坂本龍馬と申すものに、果合の申込みを致した。然るに龍馬も、聞ゆる剛の者、同志もあれば、部下も御座る。之れを捨て置く時は、由々しき大事にも相成らう、と存する。従つて、御城代の御威光にも、係るかのやうに存じ申す。しかし、暗撃や辻斬の流行る。折柄には、出来過ぎた、武士道沙汰、近頃、片腹痛き次第で御座る。ハッ、ハッ、」
 圖書頭は、眉を寄せて、
 「これは、意外の事で御座つた。よろしい、何とか、處分を致さう」
 勝は
 「しめた」
 と、思ひながら、猶ほ喋々と、事の始末を話した。言ふ丈言へば、それでよいので、勝は、暇乞を仕て歸る。その跡

で、圖書頭は、腹心の家來に命じて、天王寺へ、かけつけさせ、双方を宥めて、城内へ、連れ來れ、と命ずる。そこで、圖書頭の家來が、やつて來たのである。

甲も、初めのうちは、彼れ是れ、拒んでも見たが、城代と喧嘩しちや、割に合はぬ。坂本は、これしきの事で、生命の遣取り、固より望む所でない。双方つれられて、城内へ來ると、圖書頭は、幼少の時から、家庭の内情で、苦勞を仕抜いた人である。こんな事を、扱はせては、うまいものであつた。甲を説きつけて、すつかり感情の、解けるやうにした。乾も、やつて來て、此に何事もなく、事は治つた。

一二三

幕府直轄の操練局の外に、勝の私塾もあつた。坂本は、千葉重太郎の紹介で、松平春嶽に逢ふて、勝の爲に、三千兩の寄附を得た。それが、私塾の費用になつた。

その當時、勝の教養を受けたもので、明治の世に、名を成したるものは、随分多くあるが、就中、最も人に知られたものを、擧げて見れば、陸奥宗光、外山正一、伊東祐亭、富田鐵之助等の連中である。之を取締つて居たのは、坂本龍馬である。

この時代の勝は、頭腦が、世界的になつて居たので、佐幕とか、勤王とか、開國鎖港と言ふやうな、掛引きのあつた、人氣取りをやつて、兄弟牆に闖くのは、大和武士の本領でない。國力を一致して、外國に對して、當らなければならぬ、と言ふのが、自論であつたから、従つて、收容する生徒にも、さまで至難しい、制限を置かず、誰れでも御座れの主義で、ドシ／＼入門を許した。

その上に、取締りが坂本だから、倒幕論者でも何んでも構はぬ。中には、幕府のお探ね者も居る。況して、諸藩の脱走者などは、平氣で入門させた。漸く日の經つに従ひ、諸藩から、苦情が起り、自然、幕府の耳にもいつて、勝に嚴命を下すけれど、勝は、一向に頓着せぬ。坂本の如きは、尙吏のこと、今や海軍所は、恰も浪人の隠家に、なつて了つた。

坂本は、京阪の間を往來して、兵庫には、居らぬことが多い。誰れか相當のものを、代理に置かねば、取締りがつかぬ。其處へ、伊達小二郎が、やつて來たので、小二郎に、自分の代理を、爲せる事にした。

海軍所はさかんに、なつて來たが、幕府の方から見ると、一敵國の感がある。どうも、他日の害を、爲すやうに思はれる。去ればとて理由もなく、取潰すやうな事をすれば、却つて面倒を惹起さう。何かの機會があつたらばと、覗つて居るうちに、一棒事が持上つた。

その頃、異人から、軍用品を、買込む人がある、と言ふ風説が起つたので、密偵を放つて、調べて見ると、軍用品ではなかつたが、海軍所の高松太郎が、多數の毛布を、異人から買込んだ事が、明白になつた。許可を得ないで、妄りに異人と、取引をする。殊には、海軍所の生徒が、かゝる事を爲すとは、將來の爲にならぬから、嚴重に處分を仕た方がよい、といふ事になつた。此に於て、高松を捕へる、手筈にかゝつた。今日から考へると、實に馬鹿／＼しい話で、毛布を買つて縛られる、とは、假し、他に事情があつての事にしても、あまりに滑稽ではないか。

或る程度迄の秘密は保たれるが、極端まで秘密といふものは、保たれるものでない。注意して居れば、自分の身にふりかゝる事の洩らぬ、と云ふ筈はない。幕府の方で、秘密に仕て居ても、それは自然に洩れて來る。頼まれもせぬのは、他の秘密を洩らして、それを樂しみに仕て居る、一種の人間もある。有志の方にもあれば、幕府の方にもある。毛布の事の如き、そんな下らぬ事でも、直ぐに誇大に、吹聴する奴がある、と、神經の過敏になつて居る、幕府は、忽ち大騒ぎをする。お話しにもならぬ譯だ。

『オイ、高松』

小二郎は、歸つて来て、坐らぬうちに、斯う言つた。高松は驚いて、

「何かな」

「貴様……はやく何とかせんと。捕へられるぞ」

「なにッ……捕へらるゝと」

「うむ……毛布を買入れたのが、善くないさうぢや」

「馬鹿なことをッ」

「いゝや、さうでないぞ。幕府では、容易ならぬ事として、詮議して居るぞ」

「なんで、毛布を買入れたのが、悪い」

「無因で、異人と、取引した事になるのぢや」

「イヤ、それは、理窟が違ふ……」

「貴様と拙者と、争うても致方がない。捕へられても善いなら、落着いて居るぞ」

高松も、最初は、半信半疑であつたが、どうも、小二郎の様子に、偽りが無い。眞正である。とすれば、高松も、考へねばならぬ。然ればとて、卑怯な振舞も出来ぬ。というて、ムザ／＼幕府の手にかゝりたくもない。流石の高松も、自分の思案には、盡されなくなつた。

「伊達氏、何と仕たものであらうか、好い御分別もあらば、御教へを願ひたい」

「左様……拙者にも、之れと申して、好い分別もないが、これは一應、勝先生に相談したら、如何であらう、坂本は、不在でもあり、旁々、左様いたしましたら宜しからう」

「成程……それでは、是れより直ぐ大阪へ……」

「はやいが善い。跡は御引受いたす」

「然らば、何分御願ひ申す」

高松は、之れから大急ぎで、大阪へ、やつて来た。安治川筋の、勝の塾へ、乗り込んで、この事を話すと、勝は、一向平氣なものだ。

「ははア……その事か、大分やかましいよ。昨夜、城代へ呼ばれて、酷く叱責られたよ。けれども、買ったものは、買ったのに違ひないからな。己が、申付けた、と答へたよ。明日頃は、何とか言つて来るだらう。何も、さう騒ぐには及ばぬさ」

「しかし、先生の御意見では、拙者の身は、何うしたら、可からうか。御指圖を、願ひたう御座る」

「どうとも、勝手に爲るさ。逃げることも、捕まることも、それやア、自分の分別ぢや」

「先生は、如何なさるお考か、それを、承りたう御座る」

「アツハ、お前も、随分、心配性ぢやね。己れは、動かぬ迄のことさ」

「それでは、幕府の處置を、待たるゝので御座るか」

「幕臣ぢやもの、その外に、方法もあるまい」

「一言一言、實に潔い、感が起るばかりだ。勝の心事は明かであるが、乍併、高松は、左様もゆかぬ。」

「先生……拙者は、一時身を潜めやう、と思ひますが」

「それは、お前の自由ぢや」

「甚だ卑怯のやうでは御座るが、左様いたします」

「よろしいが、何處へゆくつもりか」

「差當り、目的も御座らぬ」

「薩邸が、いゝよ。お前は、薩藩士に、懇意が多いから、それが可からう、と思ふ」

どうしても、随意にせよ、と言ふ中にも、實意の籠る注意、高松も、感謝の詞なく、塾を出ると直ぐに、薩邸へ、身を忍ばせて了つた。

その跡で、幕吏が、兵庫へ行くと、高松は、既に居らぬ。草を分るほどの詮索も、その甲斐が無かつた。此に於て勝に對する嫌疑は、益々ふかく、遂に海軍所は、解散を命ぜられ、勝は、江戸へ召返された。

坂本は、此に至つて、退くにも退かれず、伊達小二郎を始め、残の生徒を率ゐて、長崎へ渡る。これが世に名高き海援隊の始である。

一四

山内容堂は、幕末の諸侯中で、名君の噂が、最も高かつた人だ。明治になつてから、諸侯の單行きは、全く此人が、その手本を、示したのである。お供も伴れないで、船宿や料理屋へ、出かける。藝者を従れて、芝居へゆく、或時は、半纏着の江戸ッ子を連て、豪遊を試むる杯、儀式張た遺方を、一切ぶち破つて、今でいふ、平民的の行動を、執つたのだ。

其うちに、是れを見習ふものが、出て来て、船宿に、流連するものもあれば、料理屋に、藝妓の總揚げを爲すものもある。諸侯の風俗、漸く亂れて来て、浪費の結果、家名を落すものさへ、出でて来さうになつた。心の底が、縮つて居て、遣ふことは、咎むる要もないが、永い間の習慣から、窮窶な生活を、仕て居たそれが、一思ひに自由になる。これは、儲けが生ずると、政府の方からは、見たに違ひない。其所で、宮内省から、嚴達を仕た。

かういふ意味の内達である。これから諸侯にして、外遊するものは一々届出るとの事であつた。是に於て、諸侯は一縮みになつて、誰れ一人、外遊するものがない。然るに、一日、容堂から、届け書が出た。掛りの役人が、開いて見ると、驚いた。「明晩新大橋の萬千樓に藝者遊びを致すから、篤念お届申す」といふのであつた。役人も、其處置

に窮した、といふことである。豪宕不羈、眼中、既に政府なきの概があつた。

兎に角、容堂は諸侯のうちでも、一番、卓出して居た所が、あつたに違ひない。維新の際にも、討幕の勅が下る時、慶喜公の處分法について、極刑といふ事に決したのを、憤然として、抗議を提出して、飽迄も、慶喜の罪を赦すべく、最終まで論争したのは、この人ばかりであつた。この一事は、維新を究むるものゝ、必ず逸すべからざる事である。これだけの人であるから、良き家來も、澤山に持つて居た。坂本龍馬の如きも、まさに其の一人であつた。元治元年、京都の變に就て、龍馬以下のものが、脱藩したのさへ、深く逐はず、その儘に仕て置た。そのうちに、越前の松平春嶽が、頻りに龍馬の爲めに、取做しを爲すので、容堂は、直に罪を許して、歸藩せしめた。

其頃、容堂は、貿易と海運の事に着目して、有爲の人材を、長崎に遣はした。後藤象二郎は、全權を與へられて、長崎へ出張した。

その時分の長崎は、恰も諸士の、梁山泊の如き觀があつて、各藩の浪士は、多く此地へ、集つて来て、ワイ／＼やつて居た。大隈八太郎、副島次郎、林宇一、皆な出入して居つた。

八太郎は、後の重信、次郎は、種臣の前名、宇一とは、伊藤博文の事である。後藤は、すでに先輩の名を、成して居つた。

坂本龍馬の一派は、龜山なる陶器製所へ、塾を説いて、人材を集めた。菅野覺兵衛、山本弘堂、高松太郎、澤村惣之丞、新宮二郎、池内藤太等の輩である。中島作太郎、後の信行も、この中にあつた。伊達小二郎は、言ふまでもなく、來て居る。越後の白峯駿馬、越前の大山宗太郎、三上榮太郎、水戸の左柳三二、橋本久太夫等も、やつて来て、塾の賑ひ、と言ひたら、えらいものであつた。

その時分には、名稱がなかつた、後日に之れが、海援隊となるのである。

坂本が、京阪で養うた、勢力と、小二郎等の盡力とで、集まり来るものも多く、終に規則を設け、隊制を整へ、塾とは言ふやうなもの、その實は、有志の通來たるもの、隠匿所としたのである。其傍ら、海軍思想の養成に努めて、之れを海援隊と稱した。隊長は、無限の權力を有して、隊士に對する、生殺の權利を、握つて居る。其の盟約の一節に、斯う云ふ事がある。

凡て隊中の事一切隊長の處分に任ず、敢て或は違反すること勿れ。

若し亂暴、事を破り謬妄、害を引くに至つては、隊長其死活を制す。

隊中、艱難相救ひ、困厄相護り、義氣相責め、修理相糺し、若くは獨斷過激、儕輩の妨げを爲し、若くは儕輩相擠し勢に乗じて他人の妨げを爲す等、これ尤も慎む可き所、敢て或は犯す勿れ。

實に嚴格なものであつた。隊士たる可きものは、本藩及他藩を脱するもの、又は海外に志あるもの、と言ふ事になつて居る。どうしても、梁山泊である。公然、脱藩の武士を收容すると、聲言したものは、恐らく此外にあるまい。

隊の目的とする所は、運輸、財利、開拓、投機に在り、としてある。利に疎く、財に心なきものを、武士の上乗とせる、この時代の武士が、かくも立派に、金儲を看板にする。こんな飛び放た事が、普通の武士に、出来る譯がない。坂本なればこそである。

一五

當時、長崎は、中國から九州へかけて、浪士や有士の、落込む場所になつて居た。長い刀を、落しにぶち込み、往來狭しと、肩で風斬る荒くれ武士が、幅を利かす事は、實に凄まじいもので、従つて、町人共の懼れさは、動もすれば、無禮打と稱して、かけ替へない、首を飛ばされる。無錢飲食や、買物代を、拂はぬ位の事は、何でもない。坂本は、常に之れを戒めて、苟くも侵掠むるを許さず、況して、刀を抜く事などは、殊に、やかましかつた。然れ

ども、多數の隊士の中では、かくれ忍んで、之を犯すものもあつた。その威張方が、町人に向つてのみ行はれるのではない。他の浪士に對しても、頗る力のあつたものだ。海援隊の名は、自ら一種の勢力に、なつて居た。

水夫頭を、勤めて居た、三吉といふ奴は、文字の少しもない、出身の卑いものではあつたが、海の事には頗る、通じて居る。船を扱はせたら、立派な人間だ。隊士も、之には一步を、譲つて居る。性質も、馬鹿の方ではないが、唯

惜むべきことには、亂酒亂行、時に隊の名を、汚すやうな事もある。何うせ、聖賢の道を教ふる、學校ではない。謂は溢れ者の集合であるから、多少の事は、宏量してもゐた。處が、坂本が、大阪へ往つた後は、頭の抑へ人がないのを、好機會に仕て、益々、亂暴を態めるので、隊へも自然、その事が聞えて来る。注意を與へるものもあつたが、更に改悛の狀がない。

小二郎は、一日のこと友人を訪うての歸途、と、ある街へかゝつた。道一ばいの群集で、ワイ／＼騒いで居るのは珍らしくもない、例の喧嘩と思つて、その儘ま行過ぎやうとした。不圖、耳にはいつたのは、海援隊の名である。

頻りに海援隊の事を言ふのがあるから、これは聞き流しにはならぬ。跡戻りを仕て、群集の背後から見ると、一軒の小料理屋の、入口の障子も毀れて、床几杯も、軒下へ抛出され、四五人のものが、頻りに詫びて居る。その前に立ちただかつて居るのは、例の三吉であつた。小二郎は、ハツと思つて、猶ほ舉動を、覗うて居た。かくとも知らぬ、三吉は、熟柿の如き、呼呼吸を吐きながら、

『さア、此奴等、片ツ端から、隊へ、しよびいてゆくから、左様思へッ』

『まことに恐れ入ります。隊のお方と存じませんで、つい失禮な事を申し上げまして、何共恐れ入ります。どうぞ御勘辨を願ひますので』

『イ、ヤ、勘辨ならねえ。海援隊の三吉を、知らねえ奴は、人間のもやいだ。今になつて、言譯なんぞは駄目だ。さア、隊へ來い。片ツ端から、ぶち斬る丈けの事』

詫びてるものも、持餘しては居るが、三吉の様子、口でいふやうに、必ずしも連れて行かう、と言ふでもないやうだ。しかし、口では、連れて行く、というて、頻りに怒鳴つて居る。小二郎は、之を眼のあたり見て、
『さては、この策で、強請るのぢやな、不埒極る奴だ。打捨て、置ては、隊の名も汚さう。取つて押へて、將來の爲めに』
と、胸に思つて、

『どけッ……どけッ』
と、群集を押し分けて、ずつと進んだ。

『これッ……三吉』

突然に、背後から聲をかけられて、三吉は、振返つた。

『な、なんだ』

見れば、思ひも寄らぬ、伊達小二郎だ。『これはッ』と、思つたが、弱身を見せじと、不要我慢から、三吉はヒョロ／＼、小二郎の方へ、よろけて来た。

『いやア……伊達さんですな、お前さんが、出る幕ぢやア無え。引ッ込んで居て、お呉んなせえ』

飽迄も、無禮を極めた、言語態度は、流石小二郎も堪り兼ねた。

『何を不埒なことを……貴様は、此處で何を、致して居つたか』

『何を仕て居やうと、己の勝手だッ』

『貴様は、酔うて居るやうぢやから、マア、拙者と、一途に歸れ』

『厭だ／＼、誰れが歸るものか』

『そんなに、剛情を張らずと、同道したら可からう』

『やかましいやい、だまつてろ』

如何に、醉漢とは言へ、餘りの事に、小二郎も激して、満面朱を灑いだ。

『これッ……貴様の利益を思へばこそ、拙者も、事を、穩和に計らう積りぢやつた。が、もはや、勘辨相成らで、この上、無禮を働かば、その分には差置かぬぞ』

『アツハ、……此奴ア面白い。さア、何うとも仕ろ』

腕を扼して、小二郎に迫るので、思はず知らず、刀の柄に、手をかけた。

『これやア、面白い。さア斬れ、斬つて見ろ』

腕力自慢の三吉、酒氣を借りての狂態、小二郎も、之れを斬つた所で、何の益もないが、さりとして、今退くに退かれぬ、もう是れ迄と、覺悟を仕た。

『好し、望の通り、ぶツ放して遣はさう。しかし、當家へ、迷惑をかけては、氣の毒ぢや。表へ出る』

『出なくツて、さア出るぞ、逃げるな』

三吉の見暮が、えらいのを見て、外の見物は、驚いた。これやア妙だぞ、彼の細い武士が勝てるだらうか、どうも醉漢の方が強さうだが、さて何うなる事だらう、と、其心配は一方ならぬものがあつた。三吉は大氣焔で、外へ飛出した。

『さア、出て来い』

兩肌を脱いで、大手をひろげた刹那、

『これッ』

思ひもつかぬ背後から、聲をかけられたので、三吉は振返ると、意外にも聲をかけたのは、菅野覺兵衛である。
『ヤッ……旦那は』

「うぬッ」

菅野は鐵扇で、三吉の横ッ面を、力にまかせて打つた。

「あッ痛い……オヤ、打つたな」

飛びかゝらうとするのを、引ッ外した、菅野は、鐵扇を揮うて、三吉の利腕を折れるほど打つた。

「あッ」

と叫ぶを續いて、又一つ、三吉は、クル／＼クルと、三つばかり廻つた。菅野は、一步踏込み、三吉の襟首を、ひッ掴んで、足下に引倒し、手ばやく下緒を取つて、高手小手に縛めた。群集は、ワイ／＼嘯し立てる。三吉は、猶ほ呶號いて居る。小二郎は、三吉の跡から、出て来る途端に、菅野が飛出して、此始末に、思はず微笑を含んで、

「やア……菅野か」

「うむ、伊達、通りかゝつて、三吉の狼籍を認め、堪忍相成りかねて、制縛つた所で御座る」

「それは意外の事で、飛んだ御迷惑」

「さア、歸隊いたさうか」

「左様いたさう」

「三吉……立てッ」

細尻を取つて、グイとひく、三吉は、痛さに堪へ兼ね、ヒヨロ／＼と、立上つた。

これから、塾へ歸つて来た。重立たるものを集めて、この始末を語る。處分法については多少の議論も生じた。三吉の所爲は、不都合には違ひない。けれども、多寡が知れた、水夫頭だ。叩放し位で、宥したら可からう、と、言ふものもあつた。小二郎は極端論で、斬つて了はう、といふのである。塾の規則に、貴賤上下の區別はない。かゝる事から、一隊の風紀も、亂れて来る。斷然たる處分を、仕て了はねば

將來のために宜しくない。隊長の不在中でも、部下の制裁は、我部の力にある。萬一、隊長が歸られてから、悪いと言はれるなら、拙者が、引受申す、といつて、小二郎は、初論を曲げぬので、終に一同も、其處分を、小二郎に一任する事に仕た。

三吉は、遂々、斬に處せられて、事は落着した。少しく慘酷のやうではあつたが、隊の風紀は、之れから革まり、市中の人氣も、漸々、なほつて来る。海援隊の名は、人から、尊敬されるやうになつて来た。

一六

海援隊の目的は、極めて簡單なものであつたが、その組織は、頗る複雑でつた。従つて、雑種の人物が、集まつて来るのを、坂本が、清濁併せ服むの度量を以て、之れを統一して居たのであるから、坂本の居る間は、治まりも宜いが、もし、不在にでもなる時は、所謂、團栗の脊蕨で、容易、治まりが悪い。併し、小二郎は、坂本が、深く信じて居たので、坂本の不在中は、目附役を勤めたのである。公然の取締は、近藤昶、通稱を、長次郎と言ふ人が、遣つて居る。

曾て坂本が、小二郎を評して、「大小を取上げて、世間に通用するものは、隊中唯だ伊達一人あるのみか」と言ふたことがある。それほどに、信じて居るが、未だ門閥の弊の甚だしい、慶應の當時としては、酒宴の席順さへ、至難しい位で、自分の氣に、叶つて居るから、とて、小二郎を、取締りにすることも出来ぬ。事實は取締りでも、名義を附ける、となれば、敵の多い、小二郎としては、殊に至難しいのであつた。

尤も、近藤と云ふ男は、文武の心得も淺からず、氣品も高く、議論もあるが、其短所を言へば、才幹に任せて、遣り過ぎる弊があつた。小二郎も時に衝突した事はあつたが、跡に感情の残るやうな事は、更になかつた。

近藤は、元來、武家の出身ではなく、高知城下の、餅屋の倅であつた。人呼んで、餅屋長次郎といふたのは、それ

が爲である。

却説、坂本は、大阪へ行つて、しばらく隊へ、歸らずに居た。近藤と小二郎の二人が居るから、留守に心配はないゆつくり、用事を達して居たのだ。そのうちに、京阪の形勢も、面白くなつて来て、是非、近藤に打合せ、必要が起つた。書面を以て、馬關まで来るやうに、申送つた。近藤は、書面を見て、早速に、支度を整へた。

「さて、伊達氏」

「なんぞ、御用かな」

「イヤ、他でも御座らぬが、先生から、書面が参つたのぢや」

「それは……如何なる用事で」

「何事か知らぬが、拙者に、下關まで出張せよ、とのことぢや。拙者は直に出立いたす。後々の儀は、然る可く、委細の事は、下の關より、申上ぐるで御座らう」

「承知いたした、後の事は、御心配なく」

これから、近藤は、急ぎ馬關へ向ふ。實に人間の運命は、一時の先を、知ることが出来ぬ。隣れとも果敢なしとも言ひやうのない次第で、近藤の壽命は、全く此行に依つて決せられ、神ならぬ近藤は、死出の旅路を、急ぎゆくのであつた。

松陰門下の傑物、高杉晋作は、三十歳には、未だ間もあり、壯年の身を以て、既に有志の間に、重きをなして居る一個の勢力家だ。慶應三年の暮、平生の大酒が病因をなして、下關の陳中に、吐血して、終に此世を去つた。坂本は長崎へ、往來の途次、いつも馬關に立寄るので、悪意を結んだ。意氣の投合は、この二傑を、自然に結びつけた。

徳川幕府を、一瞬の間に、片付けて了つたのは、薩長聯合の結果だが、これを計畫したのは、坂本龍馬で、西郷木戸を説きつけ、更に高杉に同意せしめて、こゝに全く、聯合の實は擧つた。その顛末は、別項に、説いてある。兎に

角、木戸が承知しても、高杉が不服なら、矢張り出来なかつたので、それらを説きつけたのが、坂本の力である。元來、馬關は、地勢の上から、有志の足溜であつた。其上に、毛利侯が、愛嬌を振撒いて、頻りに浪士を厚遇する従つて、馬關は、第二の長崎と、いふやうな、關係になつて居たのだ。近藤は、坂本の命に依つて、此處へ、乗込んで来たのである。

一七

下の關に待合せた、近藤は、待てど暮せど、肝腎の坂本が来ない。いづれとも、音信の無いうちは、自分で進退を、決する事が出来ぬ。彼れ是れするうちに、一ヶ月餘も経つた。その代り、長州の有志と、往來を仕て、交際も廣くなつた。後日の伏線も、多少は出来る。海援隊の近藤と言へば、坂本の股肱であると、迄は、誰れも知るやうになつた。そのうちに、坂本から音信があつたが、それは又、案外な事で、京阪の事情が、一變した爲めに、下の關行きは、中止した。お前も、長崎へ歸れ、拙者は、跡から歸る、と言ふのであつた。是に於て、近藤も、無據く立歸る事になつて、長崎へ歸つて来た。

所が、此に奇怪な、風説が起つた。何事かと言ふに、長州の高杉が、毛利侯の内命で、汽船を異人から買取つた。その周旋方が、海援隊の近藤であつて、之れが爲めに、近藤は、少なからぬ利得があつた、と言ふのである。

總て風説と言ふものは、いつも出所の分明らかで、誰れが言ひ出したともなく、それから、それへと傳はり、末になるほど、大きくなつて聞える、都合のよい方へ、大きくなるならば善いが、まづ大概は、悪るい方へ、大きくなるものだ。

然れば、此風説も、例の如く、近藤が、一大罪惡を犯したかのやうに、漸々傳へられて来た。今は、隊士の耳にもはいり、表面へこそ、現はれては来ないが、同志の間の評判は、益々、さかんなつて来た。いつとはなしに、小二

郎の耳にも、はいつた。初のうちは、小二郎も、打消して居たが、市に三虎の警の通り、終には、小二郎も、之れを信ずるやうになつて、内密、さぐつて見ると、どうやら、眞正らしく聞えるのだ。もはや抛遣つて置けぬ。他の事と違つて、これは、隊の方でも、一番に、むづかしく仕てある事だ。殊に、自分は目附役でもあり、實際は取締りの一人でもある。近藤は、更に位地が、その上であるのみならず、場合によつては、隊士の生殺に關する、處分すら出來得る、特權を有つて居る。それほどのものが、假へ嘘にもせよ、斯様に風説を立てられるのは、其身の不徳からである。若し又、之れが風説の通りならば、到底、其儘には捨て置けぬ。

斯うなると、他のものが、騒ぎ出さぬうちに、いづれとも、決して了はねばならぬ。然もなきときは、隊の内部が自然割れることにもならう。と、これ迄には、小二郎も考へたが、少し困る事は、豫ねて、近藤と自分は、位置も、稍や同じであるに、平生から、議論の會はぬ事が多く、屢ば衝突を爲る。それは、隊士も能く知つて居る。然るに、此問題を以て、近藤に迫ることになると、他の思惑が何うあらうか、多少の懸念もせねばならぬ。と言うて、捨置けば、患害が、却つて内部から起らう、小二郎は、之れが爲めに、幾日かを、思案のうちに過したが、終に決心を仕て他の思惑位は、どうでもよい。決すべき事を決せずば、恐る可き、隊の内訌も、起るに違ひない。自分の事は顧みる場合でない、と、覺悟が決いた。是に於て、小二郎は、自ら近藤を責める事になつた。

近藤は、斯る事が、起つて居るとは、夢にも知らず、金のあるにまかせて、酒色に耽り、遊宴に、日を送つて居た今日も今日とて、海邊の一樓に、美人を集め、大盃を擧げて、愉快の限りを、盡して居ると、バタ／＼足音はげしく、やつて來たのは、仲居のサトであつた。

『近藤さま』

『何ぢや』

『伊達さまが、おいでました、逢ひたい、と言うてな』

『うーむ………どうして、此樓に居るのが知れたか』

『よし、通して呉れ』

『はい』

仲居は、走つてゆく。

一八

『やア、盛大ぢやネ』

『これは………さア、これへ』

小二郎は、設けの席へ着く、藝妓は、固より知り合である。膳部の世話やら、お世辭やら、小二郎の邊へ、集まつて來る。盃の獻酬から始つて、馬鹿話に、時刻を移した。

『時に、近藤』

『何んぢや』

『少し話したい事がある』

『どういふ事か承はらう』

『それが内密の事だな』

近藤は女共に向つて、

『さア、少しの間、遠慮して呉れ』

藝妓や仲居は、早速に、去つて了つた。小二郎は、膝を正して、

「話と言ふは、餘の儀でも御座らぬ。實は足下が下の關出張中、毛利侯の御依頼に依り、異國船の買入れを、周旋せられたる趣き、告ぐる者あつて、既に隊中の評判高く、世間の取沙汰も、亦一通りで御座らぬ。足下に限り、左様の事は御座るまい、とは思ふて居たが、抑へ難きは人の口、兎に角、足下に承る外に、眞偽は確め難く、態々お訪ね致した次第で御座るが、御互の間ぢや、包み藏さず、御明し下さるまいか、好し、眞説に致してからが、別に救ふ道も御座らう。さア、お話し下され」

近藤は、手を拱み、黙と、考へ込んで、口を緘んだ限り、何の答へもなく、時々大きな眼を、光らして居るばかりだ小二郎も、近藤の顔を見詰めて、しばらくは双方、無言の體、やがて、小二郎は、

「近藤ッ、覺えが御座るか、それとも……………」

「覺えあらば何で御座る」

「エッ、御座るか」

「如何にも……………」

近藤の眼は、異様に光つた。小二郎の膝は、デリムと進む。

「然らば、覺えが御座るのぢやな。何故に、左様な不義の行爲に與せられしか」

「なにッ、不義とは……………」

「不義では御座らぬか、隊の申合せには、かゝる拔駆けに、均しき事は、禁じてある筈ぢや。殊更、異國との取引に關して居る。足下が、町人風性なら、格別の事なれど、苟くも武士たるものが、斯様の事に關係するは、憚かる所が無ければならぬ筈、猶ほ聞き及ぶ所にては、その船の買入金に就ては、耳にするさへ汚はしき、手数料とかの受渡しもあつたと、聞き及ぶ。若し、相當の道理が立つて、周旋すべきものならば、隊の仕事として、足下より、隊へ引渡す可きが、理の當然。足下獨りが、之れを處置するは、利得の件ふ事だけに、心の底が、見え透いて、足下

の人格も、疑はるゝのぢや。左なきだに、今、海援隊は、天下の注目する所、一舉手一投足、苟くは出來ぬ。坂本先生の不在中は、殊に、一段の注意を要する、勿論、言ふ迄もない。かくても、足下は、之れを不義に非らず、と言はるゝか、御返事に依つては、拙者にも、覺悟が御座る。近藤氏、御返事は、如何で御座る」

近藤の顔は、次第に色を、變へて來た。小二郎は、驚の如き眼で、じつと見詰める。流石の近藤も、終に屈して、只だ一言、汽船買入の周旋を、致したに相違ない。金も取つたに違ひない。しかし關係の人や、前後の事情は話せない、と、自白に及んだ。此に於て、小二郎は、近藤を伴うて、隊へ、歸つて來た。

近藤は、謹慎の身の上となり、小二郎は、大阪へ、飛脚を立てた。それは、坂本に、此處分の照會であつた。その飛脚と行違ひになつて、坂本が、歸つて來た。小二郎から、仔細を語り、嚴重な處分を、仕て貰はねば、跡の取締りに差聞へるが、しかし、生命だけは助けたい、との事であつた。が、坂本は、終に肯かなかつた。近藤は、切腹を宣告されて、潔く死んで了つた。

所へ、高杉晋作から、使者が來て、近藤に頼んだのは、拙者である。どうか、其罪は許して呉れ、との事であつたけれども、跡の祭りであつた。近藤の最期の立派であつたのが、隊士の同情を得て、碑を立てる事になつた。今も尙ほ、長崎に、この碑は残つて居る。小二郎は、自然の結果、隊の取締りとなつた。

一九

女の女らしからざるを、女豪傑と言ふが、男の男らしからざるを腰抜け、と言ふ。この區別位、面白いことは無い。女も豪傑になると、男を、幾人有つても、更に咎めるものもない。そればかりでなく、却て偉さうに思はれるのも、實に妙な話だ。しかし、女のズバヌケて居るものは、よく話の材料を、遺すものである。

横濱に、富貴樓のお倉と言ふのがあり、東京に、喜樂の女將が居た。何ちらも、花柳の巷に、名ある女豪傑だ。待

合の女房でこそあれ、大臣も、富豪も小さな掌裡に、丸め込んで、自由自在に、操る所は、一種の魔術師である。それが、賣春婦の世話をしたり、酒の對手を仕たり、するばかりでなく、全く心の儘に、戯弄して仕舞ふのだから、面白。格別の取扱は、言迄もない事だが、然ればとて、他に見られて、氣恥かしいやうな、度外れのお世辭を、振り撒くのもなく、通一邊のお客を取扱ふのと、大した違ひはない。只、お茶代並に、行丈の事だ。其で居て、何時か、掌裡に丸めて仕舞ふのである。貴顯紳縮も、時めく政治家も、又は成金の俄紳士に至るまで、一笑一顰の間に、生捕る手際の鋭いと言つたら、到底、人間業とは思へない。自由になるなら、その手腕を、外交の上に應用して見た程だ。

けれども、天下泰平の時代、此種の婦人の勢力範圍は、矢張り、花柳の巷より、園外へは、一步も履み出すことが出来ない。これを、維新前の女豪傑に比較すると、音に天地の差があるばかりでなく、偉いと言つた所で、つまらないものだ。

尤も、これとは種類を、異にして居る、女豪傑も明治時代には、多少あつた。奥村五百子だとか、福田英子だとか言ふやうな變物は、儘に其一人であつたが、どうも、規模が小さい。奥村は、福田より、無論、大きかつたに違ひないがそれにしても、たかゞ愛國婦人會を、遺した丈けの事である。足まめに臆面もなく、薄のろな男を抑へつけて、それから、妻君に取込んで、何うか斯う、虚榮心の結晶物を、つくつたまでの事だ。有爲の男子を扶けて、天下の大事を爲さしめた、と言ふのではない。時代の關係もあらうが、維新以後の女豪傑は大概こんなものだ。

顧みれば、六十年昔の、夢の跡、徳川の威權、漸く衰へて、王政復古の芽が、やつと吹出しかけた、當時の事、九州に、二人の女豪傑があつた。一人は、筑前福岡の城下、平尾山莊に立籠つて、高杉を始め、幾多の浪士に、蔭なが

らの助力を仕た、例の野村望東尼である。

他の一人は、肥前長崎の一隅、大浦と云ふ處に、女ながらも、貿易を營んで、堂々と、門戸を張り、五尺の男子を、頭先に使廻して、異人を對手に、算盤の戦ひ、有つて生れた、俠氣は、何時しか、有志浪人の間に知られて、大浦のお慶さん、と言へば、誰れ知らぬものもない、といふ、偉物である。この二人が、世話を仕て、明治の世に、時めて居た、政治家や將軍も、少なくなかつた。

望東尼は、其最後まで、有志の間に、立交つて居た。殊更に、死んだ處が、下の關で、世話になつた長州連が、いづれも出世して、政府に立つて居たので、望東尼の名は、一層に知れ渡つて、贈位の御沙汰まで、蒙る事になつた。之れに引換へ、お慶の方は、廣く知れて居らぬ。つまり、椽の下の力持に、過ぎなかつた。武士と町人と、その出身の異つただけ、自然からいふ結果にも、なつたのであらう。

この、お慶については、その爲人を述べて、海援隊との關係に及ばう、と思ふ。

110

お慶は、元來、家附の娘で、両親の愛が、並外れて深く、それが、我儘増長の因に、妙齡になつてから、浮氣な沙汰も、度々起るので、流石、両親も心配して、婿取りの相談がはじまる、と、お慶さん、頗る不服であつたが、終に両親の命に、従ふ事になつた。

婿入りも、首尾よく済んで、自分は、帳場へ坐り、婿は取引先を駈廻つて、外眼も觸れず、業に勵んだから、店は追々、榮えて來たが、をさまりのつかないのが夫婦仲、お慶は、女に不似合な、度胸を有つて居る。容貌こそ、左迄

ではないが、何事につけても男優りだ。所が、婿さんは、少々、お目出度い方で、只だ汗水流して、稼ぐ丈けのこと
お慶に、叱り飛ばされても、一言半句、返すことの出来ない、といふ人物だ。

日の経つに従つて、漸々、お慶の尻の下へ、敷かれるばかりだ。それでも、不平が無い、と見えて、必死に稼いで
居る。けれども、お慶には、何となく物足らぬ所がある、と見えて、心ひそかに、

「こんな男でも、亭主とすれば、それ丈けに、奉つらなければならぬ。同じ有つなら、男らしい男を、亭主として、
稀には叱言も、いはれて見たい。嫌アの尻の下に、隠れて居る、こんな亭主は、亭主らしくない。寧ろそのこと、離
縁して仕舞はう、お、それが可い。左様仕やう」

と、自分一人で、決定て了つた。兩親に相談もせず、婿の歸るを待つて、膝組の直談判を開いた。

「お前さんは、どうも、妾の氣に容れないから、別れやうぢやないか」

といふのだ。婿さんは、之れを聞いて、事の、餘りに急なると、談判の手巖しいのに驚いて、何とも答へやうがない
只だ呆れて、お慶の顔を見て居ると、お慶は、冷笑を帯びて、

「私も、覺悟して言出したのだから、お前さんも、斯うなつては、強て居た處で、面白くなからう。お金欲しけれ
や、分けて上げやうから、支度を仕たら、可いでしやう」

此に至つて、流石に、婿も、腹に据る兼ねて怒る。お慶は、婿を罵る。トウ／＼喧嘩に、なつて了つた。

兩親が、出て来て、その事情を聞くと、之れも驚いた。一度は、お慶を叱りつけて、抑へては見たものゝ、兩親に
も、少し喰ひ足らぬ婿、殊には、お慶の愛が深いので、話は、存外に疾く、運んだ。終に婿は、相當の金を貰つて、
離別といふ事に決定つた。

さア、これからは、お慶の獨り天下、一兩年は、寡婦で暮したが、そのうちに、兩親も亡くなる。お慶は、少しも
怯まずに、商賣を勵んで居た。家道は、却つて振うたが、精氣のさかんな女として、獨り寝の寂しさに耐へかねて、男
妾の二三人も抱へて、一晩隔に呼びつけては、御用を申付けて、楽しんで居る。

負け嫌ひの男魂があるので、人の難儀も救へば、金も恵んでやる。女侠の氣が、日々に、現はれて来る。いくら
稼ぐに仕ても、これでは足りる譯がない。女は女丈けで、自然と、財産も減る。お慶は、熟々考へて、これは、何と
かしなければならぬ。よし冒険い橋は渡るとも、濡手で粟の一と儲けがありさうなものと、頻りに思案するうちに、
不圖心づいたのは、印度貿易である。

數多からぬ印度人の、一二と取引を、仕て見たが、存外に、好都合やうだ。これは何とかして、彼地に渡り、事
情を取調べて、之れで遣つて退けやうと、漸く決心の隣緒をかためたが、此時代の事だから、容易に、渡航は出来
ぬ。公儀へ願つた所で、許す筈はない。此に於て、船長に少くならず、賄賂を使つて、大きな荷箱を作り、その中
へはいつて、役人の眼を盗み、大膽にも、印度へ渡つて、辛苦幾年、大金も儲ければ、注文も受けて、久々で長崎へ、
歸つて来た。

これから、お慶の商賣大發展で、他のものも、印度相手に、取引をはじめめる。どうしても、お慶の智慧を借りる事
になる。陰然、その連中の首領となつた。金のある所から、交際も廣くなる。履歴が履歴だけに、浪人や有志が、面
白い女だ、と思つて、近付いて来る。交際して見れば、とても普通の女でない。終には、其手足の如くなつて、働く
のも出来る。

坂本は、疾くから、お慶を見込んで、事業の聯絡を、つけて居たのである。

坂本は、お慶と知己になつたが、それは、海軍隊の事業が事業丈けに、或る動機から悪意になつたので、漸々、交際して見ると、何うして、容易な代物でない。男としても、あまり多くは無いほどの、噂よりは優れた女豪傑であつた。

曾て隊で、金の入用の事があつた。試みに融通を、言うて遣る、と、只だ一本の手紙で、五百兩と云ふ、大金を持たせてよこした。幾何えらいやうでも、女は胸の小さなもの、金の事になると、心の底までも、遠慮なくさらけ出すものだ。然るに、この女は、左様でなかつた。

尤も、誰れに向つても、此通りと言ふ次第では無からうが、坂本に對しては、お慶の方でも、確かな人物と、認めて居たに、違ひない。勿論、艶っぽい話からでは、なかつたらう。その人物を、見込んでからの事だらう。

茲に、意外の事が起つた。それは、近藤の一條からで、『あれは、伊達が、平生から議論か合はず、衝突ばかり仕て居て、不和の間柄、近藤が、抜駈けを仕て、汽船買入の周旋をやつたのは、固より宜くないが、しかし、それは、伊達が、何とか分別を以て、うまく治めて、治められぬ事もない。然るに、却つて自ら、これを許いて、近藤に、如彼、最期を遂げさせた、といふのは、實に怪しからぬ事である。畢竟ずるに、伊達が勢力の争ひから、彼アした事にしたのだつた。伊達といふ奴は、武士らしくない男だ。安心して交際の出来ぬ。陰險な人物である』と、評判が、甚だ宜しくない。

中には、不埒な奴だ、斬つて了へ杯と、穩和ならぬ事を、言ふものもある。これが何時しか、坂本の耳にもはいる。何とかして、その感情は、解く必要がある、と心には思つて居るが、未だ表面に、現れて來たのでも無いから、餘り

先んじて、却つて事を、面倒にするのも愚の至りと、容子を見て居た。

然るに、本人の小二郎は、そうした事には頓着なく、平氣な容子で、利口に任せて、切つて廻はす。仲間の評判は、益々悪なるばかりである。

一日、小二郎は、坂本の前へ來て、

『さて先生』

『何ぢや』

『少し、お願ひが御座る』

『何ぢや』

『他の事でも御座らぬが、異人の言語を習ひたい、と思ふが、如何で御座らう』

『それは結構な事ぢや。よろしい、何か傳手があるか』

『實は、それで困つて居るので御座る』

『うむ、それには善い事がある。大浦のお慶ぢや。あれは、普通の女とは異つて、達引の強い、男らしい度胸のある女ぢや。さういふことを頼むには、此上もない好都合ぢや、明日にも、拙者から、依頼を致して見やう』

『何卒、然る可く願ひたい』

坂本も、之れは善い機會だ、と思つた。双方に傷もなく、斯ういふ事で、小二郎が、一時、隊を放れるのは、安全の策である、と、早速に、翌日は、大浦に赴いて、お慶に、頼み込んだ。お慶も、外らなぬ坂本の頼みであり、小二郎のことは、傳聞にもせよ、爲人も、解つて居るから、快よく承知を仕た。

小二郎は、お慶の家へ、移る事になつた。間もなく、英國の宣教師のボーイに、住み込む事になる。當分は、お慶の家から、通つて居た。多少は、日本語の出来る、英人の事として、小二郎も、教へを受けるに好都合であつた。かくて過すともなく、二三箇月を経た。

一歳月は、流水の如く、いつしか、慶應三年の春となつた。海援隊は、愈上隆盛になる。京大阪に迄、その隊名は、知られるやうになつた。坂本の威勢は、恰も長崎を壓するほどで、えらいものになつて仕舞つた。此時に、一人の傑物が、現はれて來た。後年の伯爵、後藤家二郎が、それである。

一一一

後藤が、長崎へ來たのは、土佐商會の爲であつた。藩の計畫になる、貿易の監督として出張して來たのだ。此時には、後藤も、參政の職に就いて居た。

然るに、坂本の同志、松井周助といふ人が、後藤を、能く知つて居る。坂本は勿論、同志の事でもあり、雙方の爲人を、熟知して居るだけに、何うかして、此二人を、接近せしめやうとして、松井は、苦心をして居る。

そのうちに、海援隊の方では、漸々、金に窮乏つて、今は、維持さへも、困難になつて來た。堅忍不拔の氣象に、富んで居る、坂本の事であるから、容易に、弱い音は吐かぬが、苦心の痕は、歴々として見える。周助は心のうちに先づ好しと、さらに機會の來るを、待つて居た。

一夜、坂本に誘はれて、飲みにゆく事になつた。豫て馴染の樓で、藝妓をあげて、愉快を極めながら、面白さうに語る。周助は、盃をすゝめながら、後藤の人物を語りはじめた。

『どうで御座るか、一度逢うては』

『さうさ、かねて聞くばかりで、未だ逢うた事はない。しかし、随分と、策士ぢやさうだからな』

『寧ろ、此所へ呼んでは』

『イヤ、それは、人を待つての禮でない』

『禮儀は、左様も御座らう。なれど、後藤も、足下の事は、よく存じて居る。拙者からも話してあれば、その御懸念には及ぶまい』

坂本は、漸く考へて、

『うむ、それも善からう』

『それでは』

周助は、直に筆を執つて、サラ／＼と認めた。後藤を迎への一書、使にもたせて待受けた。やがて、階下の方に、騒がしい人聲……世辭や愛嬌を、雨と浴せかけられて、婦共に戯れながら、上つて來る、骨格逞しき偉丈夫、それが後藤であつた。

『やア、よくお出下された、さア、何卒これへ』

松井は、調子よく取持つ。松井の紹介で、初対面の挨拶も終つた。これから献酬も、さかんになり、快談も、湧くやうに起る。恰も一見舊知の如き、この有様を見たので、周助も、心を安んじて、その晩は、之れで別れた。

その後は、後藤と坂本の間柄も、追々親密になつて、雙方ともに、深く其の人物に服するやうになつた。殊に、後藤が、例の大掴みで、要領を得た遺方が、酷く坂本の氣に容つて、頻りに後藤を頼むやうになる。後藤は又、坂本が

意外に、思慮の深い、組織的の才幹あるに服した。藩主、山内家の事業を監督して、金の融通も、利く所から、屢ば海援隊を、援くる事になつた。

此に於て、坂本は、後藤を説きつけ、公然、山内家の扶助を、受くるやうに交渉した。後藤も、多くは語らず、その相談に應じた。これで、海援隊に、資金の心配は、ない事になる。坂本は、隊へ歸つて、重立ちたるものを集めてこの事を打明けた。それに、異議があるか無いかを、確むる爲めであつた。隊士は進んで、同意の旨を答へた。

坂本は、座中を見廻す、と、伊達小二郎が、只だ一人、黙して、手を拱んで居る。

「オイ、伊達……」

「ハッ」

「お手前の、御意見は」

「別に、意見としては御座らぬが、御尋ねに任せて、伺ひ置きたい事が御座る」

「は、ア、それは何か」

坂本は心のうちに、さては、例の拗者が、何か苦情をつける、と思つた。一座のものは、耳を傾け、目を光らす。伊達は、無頓着に進んで、

「今日迄の海援隊は、先生、御指揮の下に、天下の海援隊で御座つたが、山内家の援助を受くる事になると、土佐の海援隊に、なるので御座るな」

一語、よく土佐派を、喝破し去る。流石の坂本ですら、ギウの音も出なかつた、一座のものも、伊達の顔を、見詰めるばかりであつた。天下の海援隊は、土佐の海援隊、實に腹のドシ底迄、決るやうな痛罵、伊達なればこそ、斯くは

言ひ得る。乍去、坂本なればこそ、この骨を刺す痛罵も、一笑の下に、聞流したのである。一
 兩者の面目、恰も眼前に見るが如き心地がする。

海援隊の回顧

著者曰く、關義臣男は、海援隊の一八であつた。従つて、その懷舊談には、權威があると共に、感興の深きものがある。参考の資料としても、好箇のものであるから、茲に掲げる事にした。此一章は、即ち關男の懷舊談である。

尙、章中に(註)とあるは、著者の挿入したものである。

一

海援隊は、維新の風雲に、至大の關係ある、有力の一團體であつた。其本據は長崎であるが、當時の長崎は、西南諸藩の人物が輻輳する、一大俱樂部とも、稱す可き觀があつて、薩長兩藩の士は、言ふも更なり、佐賀の副島二郎、大隈八太郎等も來遊して、内外の形勢を探つたが、坂本龍馬は、感ずる所あつて、海援隊なる、獨立の一團體を組織し、櫻丸、伊呂波丸外二三の汽船を、海上に浮べて、勤王開國を標榜し、盛んに活動を始めた。

隊長の坂本を始め、隊員は、後藤象二郎、近藤和、中島作太郎、陸奥陽之助、岩崎彌太郎、安保春康、吉井源八、松井周助、關雄之助、白峰駿馬、山本弘堂、菅野覺兵衛、高松太郎、安岡金馬、新宮次郎、橋本麒之助、長岡謙吉、

小谷耕藏、佐柳高次、腰越次郎、三上三郎、野村維章の面々三十餘人、別に佐々木三四郎が、土州より、大監察として出張し、同隊の監督をしたが、私も、舊名關龍二で、之に投じた。孰れも皆、脱藩の士で、或は長防内亂、又は馬關の戦争を、經た者が多く、慷慨悲憤の猛者共であるから、宛然、海上の梁山泊たる觀があり、其威勢は、關西一帶に振つて、却々、面白い話もあつたが、今では大抵物故して、私一人、なつてしまつた。

尤も、中には、生存して居る者もあらうが、杳として消息を聞かぬ。隊員等が、花月で、豪遊したことなど、想起すと、感慨の念、今昔の感が、身に沁み渡る。

(註) 隊員中へ、後藤、岩崎を加へたのは、如何なる次第にや。また佐々木は、海援隊を、監督する爲に、長崎へ來たのでない、と聞いて居る。

作太郎は信行、陽之助は宗光、雄之助は澤村惣之丞、次郎は寺内馬之助、後に信左衛門となる。謙吉は今井純一、三四郎は高行の事である。

元來、私は、越前府中(今の武生)の士で、福井に、山本匡輔といふ、分家があるので、九歳の時、其處へ行き、武藝は、十三から田宮流の槍術、神道流の劍法、十四から日置流の弓、自由齋流の鐵砲、大坪流の馬術を練習し、漢籍は、藩儒に就き、武士一通りの教育を受けた。後、橋本左内が、藩校、明道館の幹事の時、今の堤男爵と共に、館務に従事したが、後、江戸に出て昌平黨に入り、舎長となつた。時恰も、攘夷の説が沸騰した。

所が、私は、攘夷の話を、聞く度に、奇怪で堪らぬ。何も外國が、我國を蠶食し、侵略しやうと云ふ譯ではない。通商貿易を求むるのである。誠に結構なことだ。世界の大大勢を通觀するに、到底我國のみ、鎖國の状態で居るわけには往かぬ。攘夷々々と云ふのは、畢竟、世界の大大勢に、通ぜぬ論で、井底の蛙たるを免れない。そりやア、元の忽必烈は、我國を併呑しやうとしたから撃攘したので、外國貿易のことは、元寇とは趣きが違ふ。攘ふ可き時は攘ひ、交

はる可き時は交はる。緯々として、餘裕を存せねばならぬ。漫りに外國人を、斬つたて始まらぬ。されど、開國の國是を定むるには、主權者が、幕府では可かぬ。宜しく政權を、朝廷へ返上して、舉國一致、國力の増進を計り、海上の權力を、我が手に收めねばならぬと云ふ考へで、藩へ歸つて、種々奔走したが、遂に藩論と一致せぬ。とうとう藩を去り、京都へ往つた。

其後、京攝の間を往來して、飽迄も、素志を貫かうとしたが、熟々思ふに、今、天下に我々と、志の合する者は坂本龍馬の外にあるまい。幸ひ、龍馬とは、兵庫の勝の塾で、一面の識があるから、先づ坂本を訪ねやうと、熱誠を籠めた、長文の意見書を起稿し、之を懐ころにして、長崎へ赴いた。

二

私は、意見書を懐中にして、長崎に赴き、坂本の旅宿を、訪問した。海援隊士の集窟は、有名な長崎の陶器製造場龜山で、本部は、可なり立派な家屋で、小使二人を置き、隊士兩三輩、交るゝ宿直をし、坂本始め、主な隊士等は皆それ〴〵別に、下宿をして居つた。私は、坂本の旅宿を尋ね、久々に面會し、懐中から、意見書を、出して示した。

此意見書は、長い文だから、茲には略すが、随分と、私の精神を籠めたもので、其の主意は、前にも述べた如く、徒らに攘夷々々と、叫ぶは宜しくない。攘ふべき時は攘ひ、交はるべき時に交はる。又た、公武合體論も、姑息な策で、一天萬乘の君と、臣家たる將軍家と、互ひに權威を、譲り合ふて、合體するとは、一種不思議な話である。如かず、將軍は、斷然、政權を、朝廷に奉還し、泰西の文明を、日本に採用し、彼の長を採り、短を補ひ、日本をして世界の日本たらしめ、盛んに海運の業を興して、日本の海國たる、眞面目を發揮せしめねばならぬ、と云ふにある。尚ほ、意見書以外に、私が武田耕雲齋に同情して、耕雲齋救護の、意見を申して、藩公に上り、此事に關し、晝夜

兼行、江戸より越前に歸つたことや、其後、私が、脱藩の事情など、細かに話すと、龍馬は、破顔一笑して「北國の奇男子、徹頭徹尾、我と同意見なり、爾後、我に一臂の力を添へよ」と言つた。

私は、是れから海援隊の一員となり、龍馬の部下に屬したが、之れは慶應二年の冬である。翌三年の春、後藤象二郎も、汽船買入の爲め、長崎に來つて、坂本に對面し、肝膽相照して、是れより後藤は、海援隊の爲めに盡力し、士藩附屬のものとなつた。

初めは唯、社中々々と稱つたのを、土州藩に附屬して後、海援隊と名づけたのである。龍馬は、後藤を評して「彼は才物である。彼は、我と時勢を談ずるに、一言も既往の歴史に渉らず、恩讐共に、忘るゝ如く、杯酒の席に於ても、談柄を、常に己れに屬せしむ。眞に才物である。我れは、彼れの才を利用して、吾黨の志望を達せん」と言つて居つた。

私も、是れ以來、後藤と懇親にして、其教へを受けた。私は、今年七十五ちやが、龍馬は、私に二つ上、象二郎は一つ上だから、私は、常に兄仕し、其人物には、非常に推服して居つた。

大政返上の動機は、坂本と後藤との發意で、長崎で、議を決し、後藤が、其議を齎して歸國し、容堂公へお勧めしたので、全く此の龍と象とが、維新の風雲に、一轉機を與へたのである。

序でだから言ふが、坂本龍馬を、りうまと訓む物があるが、これは、れうまで無くてはならぬ。りうは、關東の訛りで、關西では、總てれうと云ふ。りうの彫物、富士越のりうと云つては、關西では、何のことやら解らぬ。矢張り、の彫物、富士越のれうである。

坂本自身も、れうまゝと、稱つて居た。薩州の文書の中には、坂本良馬と書いたのが、あるのを見ても、れうと訓むべきが、當然ぢや。

海援隊と共に、陸援隊も組織されて、佛の中岡慎太郎が、隊長ぢやつたが、これも随分活動したもので、今の田中光顯伯は、同隊中の錚々たるものであつた。

海援隊と言ひ、陸援隊と言ひ、蓬頭短褐の壯士が、長い刀を、二本打込んで、四方に奔走する、意氣組は素晴らし

いもので、國家を思ふ熱血は、沸返つて居る。私も、聖恩に浴して、餘命を養ふて居るが、是れでも四十年前の大健兒ぢや。命を的に懸けて奔走し、屢々、危地に陥つた。老來、意氣益々豪なり、今でも國家の爲とあれば、命は惜まんよ。

三

海援隊は、其の端緒を、兵庫の海軍所から、發して居る。龍馬は、文久の初年から、勝海舟の門に入つて、航海術を學び、大に海軍を興すの必要を感じ、兵庫に海軍所と、

勝の塾と、設けられた時の如き、生徒募集に、非常の力を盡したので、薩長士の青年、三四十名が、此處に來つて、學ぶやうになつた。

すると、幕府の捕手が、遣つて來て、塾生の高松等を、捕へやうとし、高松は、危ふく薩藩邸に遁れたが、是れより波瀾は、更に波瀾を生んで、勝も亦、浪士をかまくまふとの嫌疑を受け、遂に職を罷めて、海軍所を引拂ふた。

是に於て塾中の有志等相謀り、「時勢、日に切迫す、寧ろ亡命者に甘んじ、四方に遊説せん」と、京都に潜んだ者もあり、長崎に奔つた者もある。又薩州に行き、長州に逸がれた者もある。で、其の長崎に奔つた者は龍馬の下に集つて、一社を結び、一層航海の術を研究して、國家有用の材たらんとした。

坂本は、單に志士論客を以て、見るべき人物ではない。又、頗る經濟的、手腕に富み、百方、金策に従事し、資本を募集して、汽船、帆船を買求め、航海術を、實地に演習の傍ら、他の商人の荷物を運搬し、其の賃金に依つて、略

同志の生活費を、産出すことが出来た。全く龍馬は、才物である。前にも述べた如く、初めは唯、社中々々と稱つたのを、土佐に附屬して、後、海援隊と命名し、左の規約書を、制定した。

本藩(土佐)を脱せる者、及び他藩を脱する者、海外に志ある者、此隊に入る。隊長一人凡そ、隊中の事、一切、隊長の處分に任す。敢て或は違背するなかれ。若し、亂暴、事を破り、妄謬、害を引くに至りては、隊長、其死活を制するも亦許す。

凡そ、隊中、患難相救ひ、困厄相護り、義氣相責め、修理相糺し、若くは獨斷、過激、儕輩の妨げを成し、若くは儕輩相擠し、勢ひに乗じて、他人の妨げをなす。是れ尤も慎むべき所、敢て或は犯す勿れ。凡そ、隊中、修業、分課、政法、火技、航海、汽機、語學等の如き、其志に隨つて、之れを執る。互に相勉勵、敢て或は懈る勿れ。

凡そ、隊中、所費の錢糧、其の自營の功に取る。亦互ひに相分酬し、私する勿れ。若し、事を擧げ、用度不足、或は學料、缺乏を致す時は、隊長に建議し、出納官の給辨を竣つ。誠に用意周到である。然も文明的である。右のうち、海外に志ある者、と云ふが如きは、以て其の抱負を、見る可きである。海外開拓に志し、運輸應援を目的とし、五州の輿論を察し、一面は策士、一面は戰士、一面は航海業者貿易商で、外人にも信用厚く、盛んに砲銃、彈藥の輸入をした。

海援隊所屬の櫻丸は、薩長二藩、又は英商等より、資を仰いで、購入し、いろは丸は、土佐で買つて呉れた。櫻丸は千噸許り、いろは丸は千三百噸程の汽船で、それ〴〵隊士が、乗組み、水火夫も、長崎で募集して、乗組ました。土佐藩に、屬して居るとは云ふものゝ、純然たる、土佐の家來と云ふ譯ではないから、天下憚る者なく、横行瀟

歩し、暇さへあれば酒樓に上り、妓を聘し、酒を被り、悲歌慷慨して、時事を談じた。實に面白かつたよ。

四

龍馬の風采は、軀幹、五尺八寸に達し、デツブリ肥つて、筋肉逞ましく、顔色、鐵の如く、額廣く、始終衣服の襟を、ダラリと開けて、胸を露して居た。一説に、母親が、懷妊中、黒猫を愛した居た所から、其れに肖似したのであらう。脊中に、うじや〜、毛が生へて居たので、何様な暑い日でも、肌を脱いだことが無い。人と共に、入浴もしない。一切、人には脊を見せなかつた、と云ふが、私も、其處迄は知らぬ。

何しろ顔に、黒子が多く、眼光炯々として、人を射、隨分、恐い顔付ぢやつた。平生は、極めて無口ぢやが、國事に關した議論となると、滔々たる雄辯を揮ひ、眞に卓風發の概があつた。

其の部下を御すること、頗る嚴正で、同志中に、人の妻を犯したものがあれば、必ず割腹させる。水夫頭の三吉なるものが、暴行を働いた時など、彼れは直ちに斬つて捨てた。其威信は、恰も大諸侯の如き觀があつた。

さうかと思ふと、隊士等を率ゐて、玉川、花月(何れも料理店)などへ登樓し、平生の無口に似合はず、盛んに流行唄など唄ふ。有名な龍さんは、才色双絶の佳人で、龍馬が、二世を契つた愛人であるが、長崎にも一人、狎妓があつた。名は忘れたが、何でも廿二三の丸顔の美人で、阪本は、何時も此の妓を招いて、酒の相手をさせた。

龍馬は、顔に似合はぬ、朗々、玉を轉ばすやうな、可愛い聲で「障子開ければ、紅葉の座敷……」

と、例のヨイショ節を、能く唄つた。よさこい節は、其の本場だけに、却々、旨いもんぢやつた。狎妓が「貴郎、今夜は、まだお得意が出来ますね、さア一つ願ひます」

と言ふと「ウム、好しく〜」

と、盃を膳の上へ置き、左の膝を立て、手を拍つて拍子を取り、三味線に合せて、

花のお江戸の兩國橋へ

按摩さんが眼鏡を買ひに来た

お醫者の頭へ雀が止るまる

止るまる管だよ醫者だ

此の二つは、文久年間、江戸で流行つたものだが、其の本は、龍馬が、江戸に居る際『土佐の高知のはりまや橋』の換歌に作つて、唄つたのが始めださうで、これは、俺の作つたものぢやと、何時も、自慢に唄ふ。私が、此時の詞

男兒欲誓倒三王。 殊警中途漏遠籌。

花柳沈迷學輕薄。 一身無賴在揚州。

と云ふを見せると、面白い〜と、愛吟して呉れた。

龍馬は、小事に醜態せず、一切、邊幅を飾らず、人との交際は、頗る濃厚、厭味と云ふもの一點もなく、婦人も馴れ、童子も親しむ。相手の話を、黙つて聴き、否とも應とも、何とも言はず、散々、人に饒舌らして置いて、後に、さて拙者の説はと諄々と説き出し、縷々數百千言、時々、滑稽を交へ、自ら呵々として大笑する。誠に天眞の愛嬌家であつた。

國を出づる時に、父母より訓戒の辭を、書して與へられたのを、叮嚀に、紙に包み、上に『守』の一字を書加へ、袋に入れて、常に懐中したなどは、豪宕にして、而も赤子の如く、愛すべき所があつた。

陸奥要之助(宗光)は、龍馬に、最もよく愛せられた一人だが、龍馬の黨陶によつて、陸奥も、彼だけの人物になつた、と稱つても可い位で、平生、龍馬は、陸奥を評して『彼は、非常な才物である。外の物は、大小を取上げれば、殆んど食ふにも、困る者許りだが、陸奥だけは上手に世渡りをして往ける』と言つて居た。

岩崎彌太郎は隊の會計を司つて居たが、後、三菱會社を興したのも、矢張、此の海援隊が、基になつたのである。それから菅野覺兵衛、近藤和なども、同隊中では斬然頭角を露はして居た。

五

其の内に、幕府の長州征伐が起つたが、高杉晋作の請に依り菅野覺兵衛を船將として、櫻島丸を、長州へ遣り、幕軍を打破つて、凱旋した。

之には、私は關係せぬから、詳しく話すことは出来ぬが、私には、別に計畫することがあつた。其れは、海外渡航である。百聞は一見に如かずで、是非一度海外を視察したいとは、豫ての宿志であつたが、幸ひ、在長崎の英國ジャアーデン商會支配人、グアラバー氏及びローナ商船會社の甲比丹ゼームス氏の世話を以て龍馬の承諾を得、日本を脱して英國へ渡航すべく密に英の一商船に乗組んだ。

我輩の考へでは、當時の國論は、二つに分れて居る。固陋の人は、攘夷を主張し、洋學者は、開國を主張する、けれども、何れも皆、歐米諸國の實際を知らず、徒らに机上の空論を、爲して居るに過ぎない。吾輩は、一日たりとも歐米へ渡り、表面、大體の事情だけでも、視察したいと云ふ念が動いてならなかつたが、幸ひ、逸す可らざる好機會ゆゑ、歸來、大いに海援隊の爲めに盡す、と云ふ條件で、龍馬の承諾を得たが、然し其頃、外國へ渡航するには、本

人自ら、江戸へ出て、關老の許可を受けねばならぬ、規定がある。されど、其暇が無いから、遂に無闘で、乗船した同行者は、長州藩の宍戸祥之助で、當時は、川越と變名して居た。

甲比丹ゼームス氏は、非常な日本員で、後海軍省のお雇となつた。日本海軍の大恩人である。佛敎を好み、日蓮宗に歸依して、戒律を守り、妻を娶らず、子もない。死んで後、遺言に依つて、甲州身延山に葬つたが、頗るの奇人で、海援隊には、陰に陽に、力を添へて呉れた。

さて、慶應二年七月十日、長崎を出帆し、先づ上海から、香港に渡り、上陸して所々見物した。八月十日、香港出發、新嘉坡に向つて航したが、途中で大颶風に出會し、船將、水夫必死となつて盡したが、幾んど防禦の効なく、船は怒濤の爲めに掀翻され、煙筒は吹飛され、機關は力を失ひ、半ば水船となつて、浪のまにまに漂ふたが、幸ひにして、沈没だけは免れた。時は八月十日のことである。

翌日、風は益々烈しく、浪は愈々荒れて、船は九天に上り、又た奈落に墜ち、一同總かに勇を鼓して、残れる一臺のポンプで、水を吐き出して居る。水は一滴も飲まず、食事は一切せず、空腹と疲勞とで、流石、私と宍戸の兩人も日本男兒ぢやと、威張つて居た、勇氣も何處へやら、大に閉口して了つた。

然し、斯様な事で弱つては、後來、海國男兒を以て、任ずることは出来ぬと、強ひて氣を引立て、水夫の仕事を手傳つて居た。翌十二日も、風止まず、殆ど精も根も歇果てたが、幸ひ十三日の朝、逆風と變じ、次第々々に、穩かになつた。やがて、遙か彼方なる、水天鬚髯の間に、島が見えたので、一同、忽ち愁眉を開き、蘇生の思ひを爲すうち、嬉しくも船は、次第々々に、島へ吹寄せられたので、乗員一同、手早く端艇三艘に、乗移つた。すると、忽ち本船は、波間に沈没して、橋の影さへ、見えなかつた。

實に危いことで、今十分間遅かつたら、我等一同、端なく魚腹に葬らるゝ所であつた。何しろ三日三夜一睡せせず風浪と戦つて、疲れて居るが、一生懸命、餘勇を鼓して、端艇を漕寄せた。島と見しは島でなく、清國海豐縣連浪海

と云ふ、大陸の一角であつた。で、此處にて闘らずも、一大活劇を演ずることになつた。

六

我々は、三艘の端艇に分乘して、上陸しやうとすると、忽ち陸上にバラ／＼と、人影が見ゆるよと、思ふ間も無く、前面二三丁程の海上に、十數の小舟を集め、鐵の如く、眞黒な土人が、裸體で、禪一つ、各自に、竹槍又は竹の先きへ、利刀を付けた物を持つて、我々の着岸を、待ち居る。

噂に聞いた、支那沿岸に、巢窟を構ふる、海賊らしい。波は漸く静まつたが、まだ夜は、充分に明けず、月光は、どんよりと、海面を照して、物凄。

我等一同は、少しも油断なく、いざと云はば、片端より打攘はんと準備し、陸地間際へ、漕寄せた。

すると、賊等は、怪しき聲を揚げ、左右より、我等の端艇へ向つて、突撃して来る。洋人等は、五六挺の短銃を放つて、賊七八名を打殺した。尙ほ續いて、賊群中に發砲して、數人を斃したが、賊は六七十人ばかりも居たので、少しも怯まず、突進して来る。

私は元來、航海術修業の爲に乗組んだのであるから、暴風中は、水兵の服装で、働いて居た。荷物など、盡く流失して了つたが、大小だけは、肌身を離さず、持つて居た。

此時、私も宍戸祥之助も、年少氣鋭、海賊の奴等、何程のことやあらん、日本刀の切味を見よと、スラリ長刀を引抜いて、横合より竹槍にて、突つ込み来るを、身をかはして打拂ひ、賊勢、少しく怯むに乗じ、忽ち岸へ飛上り、當るに任せて、縦横に奮闘したので、彼等は、大分辟易した。

所へ村長らしい、老人が現はれ、請ふて曰ふには

「願くば、土人を殺す勿れ、土人の罪は、拙老がお詫をする。且つ貴方等を、拙老が、保護致さうから、拙宅へ、お

出でを願ひたい』

と申入れた。そこで、一同、其の老人の家に抵れば、凡そ二三千人の土人に、竹槍を持たせ、太鼓を鳴らして、家の前後左右を、警固して呉れた。老人の家は、海岸近くの小高き、松林の傍にある。我等は、銃に丸込めして、交代に晝夜警戒した。

十四日は快晴、船長ゼームスは、二艘の端艇に、士官を乗り込ませ、英の國旗を樹て、海上四五里の所へ出て、通行艦を待受けた。十五日の朝、汽船一艘、南方より、来るのを見て、士官より、救助の信號をしたので、其船は、陸に近寄り、我等一同を乗せて、其夜、香港に安着、シーヤデー商館に泊つたが、香港に在ること十日、佛國の便船に乗つて、上海に到着すると、埠頭に、日本人が二名、出迎へて居た。

これは、五代才助、朝倉静吾の二人で、先きに薩藩士、野村宗七外一人が、佛國に航し、近日、歸國の報に接したので、此の船に、日本人が乗組み居ると聞き、若しや野村では無いかと、出迎へたのであるとのこと、之れより五代才助に伴はれて、旅館に入り、更に便船を求めて、長崎へ着いたのは、九月十七日であつたが、海上、暴風雨の爲めに、遂に途中から引返したのは、實に遺憾千萬であつた。

前にも述べた如く、海援隊は、陸奥陽之介、林健藏（後安保清康）吉井源馬（後工部少輔）關幸太郎を始め、有名な石田英吉、大山郷八、鈴木雷次等、皆勤王義烈の士である。

予は、越前の府中に生れ、山本を名乗つて居つたが、次男であつたので、後、福井藩士に召出された。脱藩後は、關龍二と假名して海援隊に投じたのである。龍馬は、隊長の名は無かつたが、實際、隊長の手腕あり權力あり、後藤象二郎は、總裁とも謂ふ可き位置にあつた。時に、隊士中の或者は長崎にあり、或者は京都へ出張し、時勢の成行を窺つて、機會の到るを、待つて居た。

七

慶應三年四月、龍馬は、伊呂波丸に、銃砲彈藥を夥しく積んで、長崎を出發し、大阪に回航せんとする、途中、備後鞆ノ津沖にて、岡らも紀州の明光丸と、衝突した。

此際、水夫楫取等の周章狼狽、一方で無かつたが、龍馬は、平然自若として慌てず、忽ち身を跳らして、明光丸に飛乗つた。

是れより紀州藩に對し、嚴談に及んだけれど、談判の容易に決せざるを見て、海援隊士等は、大に憤慨し、紀藩にして、若し償金を出すを肯んぜずんば、金の代りに、一國を取れと、揚言するに至つた程だが、談判に談判を重ね、遂に償金五萬圓を辨償して、事、漸く決着した。

そして、伊呂波丸は、其儘沈没して了つた。其後、龍馬は、大政返上といふ、未曾有の畫策に參し、首尾能く、王政復古となつたので、龍馬は、大悦の餘り、詠んだ歌がある。

心から長閑くもあるか野邊はなほ
ゆきはながらの春風ぞ吹く

又題知らずとて

世の中は我を何とも云はよいへ

己がすることわれのみぞしる

慶應三年、時勢が、追々と、切迫するので、龍馬は上京した。海援隊は、別に隊長も總裁も無くなつたが、自然、佐々木三四郎が、世話をしてくれて居た。そして、私は矢張、長崎に、滞留して居つた。

然るに、十一月廿二日のことである。此日は、何の悪因縁日なるか、寒雨肅條として、窓を打ち、長崎のやうな温

暖地でさへ、大分寒さを覚える。予は、風邪頭痛の爲め、朝來、衾に纏はり、臥床つて居たが、暮方に至つて、渡邊剛八、海援隊士、來り、遽しく予に告げて曰ふ

「阪本が、幕府の刺客の爲に僱られた一

と、予は驚いて跳起き、尙仔細を問はしとした。渡邊は

「何れ又後刻と……」

言放つて去らんとする。予は、強て引留め尋ねると、渡邊の言ふに、今夕、汽船便にて、齋す所に據れば、去十五日の夜、龍馬の寓居、即ち京都河原町醬油屋の樓上で、中岡慎太郎と、爐を圍み、談笑に餘念なき折柄、門に客あり、才谷（坂本は其頃才谷と變名して居た）先生御在宅なれば、お目に掛りたいと、名刺を出したので、龍馬の僕藤吉が之れを受取り、龍馬に通せんと、階を上つた。

スルと、客三人も、直に藤吉を、追ふて上り、先づ藤吉を背後より斬り放ち、二階へ上りざま、龍馬の、慎太郎と對坐せる所を、不意打に斬付けたので、龍馬は、防禦の違なきは勿論、傍にありし小刀を、漸く手に取つたが、既に數刀を受け、傷瘻の劇しき爲め、支ふる能はず、暫らくして息絶えた、と云ふ。

慎太郎は、僅に短刀を以て、相支へたけれど、是亦返に十餘創を蒙り、遂に亦闘ふ能はずして仆れた。藤吉は、翌日死し、慎太郎は、十六日絶命した。尙他へ報知するからと、言終つて、渡邊は、急ぎ去つた。

予は、之を聞いて、無念痛恨、遣る方なく、落涙を禁じ得なかつた。嗚呼、天道は是乎非乎、龍馬の如き、絶代の英傑を、其の志業、半ばに亡すとは、如何にも無情ではないか。

唯聊か慰むべきは、大權既に王室に、復りたる後であるから、龍馬も、定めし地下に、瞑目が出来やう。

後又、便に聞くと、龍馬は、七八尺を隔て、床上の短刀を、漸く手にしたが、鞘を脱するの違なく、慎太郎は、小刀を取り、兩人、必死と支へたけれど、身に數創を負ひたる後のこととて、遂に力及ばずして斃れた、さうである

が刺客は、紀藩、三浦久太郎の使喚に出でたもので、新徴組、近藤勇、土方歳三、近藤門生、沖田總二郎だ、と云ふことである。

八

坂本が暗殺されたので、海援隊の人々は、大に憤慨し、陸奥の如きは、急に壯士二三人を率ゐて、三浦久太郎を、途中に要撃した。暗中ながら、確かに手應があつたから、口元へ、手を當て、見たが、呼吸がないので、引上げた。

所が、三浦は、顔を斬られただけで、生命には別條がなかつた。後で陸奥に聴くと、止めを刺さなかつたのが手落であつた、と云つた。若し彼の時に、一刀止めを刺されたら、もう生命は無かつたが、幸ひに助かつたのだと、三浦も、私に話したことがある。坂本の遺骸は、海援隊の手で、京都へ葬つた。

龍馬は、久しく薩の西郷、大久保、長の高杉、木戸等と、常に往來し、其他、勤王黨一般より、大に推重せられた。隨つて幕黨の、彼を憎むこと甚しく、殊に、伊呂波丸と明光丸との衝突事件に就て、五月中、長崎に於て、紀州藩より、償金を、受取るの約あるに拘はらず、言を左右に托して、返答せぬ爲め、龍馬は、中島作太郎をして、嚴重に督促せしめたが、此の督促が、紀州藩の三浦久太郎等をして、大に憤慨せしめ、遂に暗殺を、企てるに至つたのである。

扱て、龍馬は、既に亡くなる。何時しか世は、王政維新となり、海援隊士中の林健蔵は、朝廷の船に乗つて、三條公を、大宰府へ、お迎ひに往く。後藤も、朝廷へ召される。私も、京都へ召されて、十二月廿九日に、長崎を出發した。隊士は、それ／＼朝廷に、徴されることになつたので、自然と、隊も解散の姿となつたのである。

當時の長崎は、實に新思想の發源地で、甞に西南諸藩の人物が、集つて居た許りでなく、有らゆる天下の志士が、雲の如く集つた。佐賀からは副島次郎、大隈八太郎、長野健明、中島永元等も見へた。長州の松方助左衛門、伊藤俊

助、五代才助なども居つた。然し海援隊に、關係は無い。

(註) 松方は、正義の事で、長州人ではなく、薩人である。

海援隊は、當時、名あり力ある、俊傑の士許りで、我輩なども、坂本、後藤とに、固より友人のことではあり、互に親しく、國事に關する、意見を交換して、共に輔け合つて居た。

尤も、隊士の中で、大山郷八、石田英吉、鈴木雷次、獲伸吾(本姓内山)の如きは、錚々たるものであつた。橋本、磯之助と云ふは、實は基之助で、是は隊士ではない。世上に刊行されてある、龍馬傳の中に、海援隊士は、大和一揆及び九門の變に、關係したやうに書いてあるが、斷じて一人も、關係したものではない。

私は武田耕雲齋擁護の爲め、書を春嶽公に上り公の召に依つて、江戸より越後まで、百三十九里を、早々歸郷し更に藩を去つて、龍馬と、盟約を結んだ。敢て其部下といふ譯ではない。

後藤も、其頃、長崎へ、土佐商會擴張の爲に來た。隊長は、初めから海援隊と名乗つたので、士士が、大政返上の議を齎して歸國したのは、五月、長途を發し、龍馬と同行し、容堂公、歸國された後ゆゑ、後藤は、西郷等と、親しく往來して、契約を結び、七月三日、土佐に向つて出發し、容堂公へ勸説したので、大政返上は、海援隊當時の、坂本と後藤の、發意に因つて、其の端緒が開かれたのである。

海援隊は、後藤の發起にて、松井周助、岩崎彌太郎、及び有志輩を勧誘して組織したので、之を集成隊と名付け、人員を、時々、京都へ送つた。

(註) 中岡の陸援隊は、忠勇隊の變化したもので、此談話とは、非常に異ふ所がある。従つて、後藤、松井、岩崎等の氏名は、隊の名簿には、載つて居らぬ。

陸援隊の組織されたのは、慶應三年の七月だ。余が、海外渡航は、後藤、坂本、兩人の賛成を得て、多少、金も出て、土官の取扱ひにて、乗船したので。乗船の

時に、北風に變じて、陸へ近づき、バッテリー七艘に、凡六十人程の者が分乗し、内一艘、水夫の乗りたる分は轉覆して、行方不明となり、賊は、四十艘計りの、小舟で取巻いたが、其時、私は、随分働いた。賊も、日本人が居たので、恐れたらしい。船將、甲比丹ゼームスは、明治六年、海軍省のお雇となつた。

海援隊の櫻丸は、長崎の高杉晋作、其他有志輩の請で、幕軍と戦つて、美事、海援隊の腕前を現はした。

以上の説話は、多少、重複した所もあるが、それは私が、房州出發の前夜、急遽の際話したので、聽違の點もあつたやうだから、重要な所だけ、繰返して述べた次第である。

薩長聯盟

一

「桂さん、どうしても厭といはれるか」

と、詞は静かであるが、その眼には、けはしい光りがある。

「折角の御骨折ぢやが、對手方に、その心の無い以上は、御免蒙る外は、あるまい」

「併し、それには……」

「ちよつと、待ちたまへ。すべて、斯ういふことは、理窟づめでは、至難しいものぢや。長い間の藩士の怨みは、他藩の人の知り得ぬほどで、それを抑へつけてゆくのが、第一の困難であるが、若し西郷が、下關へ、足をふみ入れたら、先づ兜を脱いだものとして、外の苦情は纏めよう、と御約束したのぢやが、その西郷は、終に約束通り來ないではないか。さうした、誠意のない致方をされては、どう考へても、手を引く外は、あるまい、と、覺悟してしまつたのぢやよ」

「その立腹は、無理もない、と思つてゐるが、併し、此一事は、天下の大局を、制する上に、最も重い關係のある丈けに、拙者は、輕々しく、君のいはれる通り、交渉を打ち切り得ないのぢや。西郷は、鹿兒島を出る迄、下關へ立寄

るつもりで居たのが、暴風雨に逢うて、船は一晝夜も、海上に漂うて居た位で、それが爲めに、日限りの藩用、差支へを生ずる、恐れがある、というて、萬事を、中岡へ託して、大阪へ直航したのぢやから、君のいふ通りに、全く誠意のない譯でもない、と思ふ。拙者と中岡が、二年越しの苦心も、これで、水泡に歸するか、と思へば、實に残念でならぬ。無理かも知れぬが、桂さん、もう一度、まかせて下さい」

一人は、桂小五郎であるが、他の一人は、坂本龍馬である。坂本の側には、中岡慎太郎が、ぢつと、考へ乍ら、兩人の容子を、視て居るのである。

坂本が、薩長の聯合を策して、長州へ入込んでから、もう二年越しになる。その間に、京阪の地へも往復して、忙がしい奔走であつた。

先づ西郷吉之助を説いて、その諒解を得たから、長州へ入込んで、しきりに、二藩の聯合を勧めたが、長州の人達は、容易に承知しなかつた。

長州には、薩賊會好といふ、流行詞があつて、薩人を、賊と稱し、會津人を、奸物と、罵つて居たのである。

文久三年の政變に、會津中將の爲め、うまく謀られたことが、どうしても、忘れ得ず、深く怨みを、有つて居る上に、薩藩が、會津藩を扶けて、元治元年の役には、長州人が、ひどい目に逢つて、九門の戦は、むざんの敗北を、遂げて居るのだ。

それから、といふものは、薩賊會好と罵つて、この二藩には、強い敵意を、有つて居たのである。

翻へつて、幕府の状態を視れば、その根幹は、既に朽ち果て、枝葉のみが徒らに生ひ茂つて居るので、未だ全く、望を絶つほどのことではない、と、思つて居るものもあるが、併し、それは、皮相の觀察であつて、實は、手當も肥料も、何の用をなさぬ、百年の枯木に、ひとしい物であつた。

いつか枯木でも、百年の大樹は、自分から容易に、倒れるものでない。これを倒すには、外部から、一と押し、押す必要がある。強い風でも、また豪い雨でも、誘ふ力があれば、ちぎりに倒れるが、自滅を待つ、とすれば、相應に、年月は懸かるものだ。

坂本と中岡が、二藩の聯合に努力したのは、左様した考へが、あつての事で、幕府の倒れる機運は、既に熟して居るのだから、二藩の聯合さへ出来れば、その力を以て、一と押し、押し倒し得るものと、視て、専ら此事に、力を盡したのであつた。

唯だ、此二人の立場が、頗る不利であつたのは、自分等の屬して居る、土州藩の立場が、曖昧な一事であつた。藩主の豊範は、しばらく措いて、隠居の容堂が、薩長の横車——容堂は、二藩の態度を以て、横車を押すものとして居た——に對する、一種の反感から、動もすれば、二藩の進む道を妨げよう、として、何時も二藩には、反對して居た事である。

藩の重臣には、公武合體論が多く、吉田東洋の、亡くなつた後も、その一派は、依然として、公武合體で、進まうとして居たから、坂本や中岡の意見は、全く藩の方針とは、相背くやうに、なつて居たのである。

極端な倒幕論者であつた、山内民部が、此世を逝り、先輩の武市半平太が、獄中に切腹してからは、いよいよ二人の據所は無くなり、坂本は、疾く脱藩し、中岡は、監察といふ役があつたので、それを幸ひに、表面は、藩用で、奔走するが如く見せかけ、その實は坂本を扶けて、聯合の運動を、仕て居たのである。

坂本の機智と雄辯、中岡の經綸と深謀、その對照は、聯合運動の双璧であつた。坂本は、千葉貞吉に學んで、北辰一刀流の極意を究め、中岡は、桃井春三の高弟として、明智流の使手であつた。

二人は、長州人の心を、取入れる爲めに、戦争の手傳まで、仕て居る。二度目の征長軍が、押寄せて来て、海陸ともに、戦ひが始まつた時、陸戦は、互角に戦つたが、海戦は、長州軍の敗北となつて、或は軍艦を撃沈され、或は大

島郡を占領されて、散々の態であつた。

此機會を捉へて、二人は、長州の軍艦に乗込み、幕府の海軍を相手に、大血戦を開いたのである。

曾て、勝安房から教へられた、海軍の戦術と、軍艦の操縦は、坂本が最も得意とする所であつた。また、中岡は、坂本の如く、専門的に、海軍の事は、修めて居なかつたが、天稟の智謀と膽勇は、よく坂本と相並んで、幕軍を撃破するに、充分の力があつた。

此時に於ける、長州人は、全く窮苦のどん底に陥入り、天下一人として、公然、之を援くるものは、なかつたのであるから、二人の恩恵を感じることも、一倍と深かつたのである。

斯くて、二人に對する、長州人の信頼は、いよいよ高まつて來たので、此に聯合の勸説にも、一道の光明が、やうやう見えそめたのである。

けれども、長州人の心底を割れば、矢張り薩藩が、憎くてならなかつた。表面は、柔かにいふて居ても、裏に廻ると、相變らず薩賊を、叫んで居た。

高杉ほどに、眼先きの見えるものでさへ、頑強に、聯合反對を、唱へて居たのは、全くこれが爲めであつた。高杉の心中、すでに聯合の有利なることは、よく知つて居ても、長州人の反薩心理を、どうしても、動かし得なかつたのである。

幕府との戦ひは、和陸しても、長州人は、公然、京都へ立入ることを、許されなかつた。朝敵の名は、相變らず、附いて廻つて居たのであるから、薩藩の力に依る外、長州人の浮ぶ瀬はないのだ。

時に、桂小五郎が、但馬の隠れ場所から、現はれて來た。文久の政變に失脚して、さらに元治の戦ひに敗れ、新撰組に逐はれて、出石へ遁れた、桂が、久振りで、國に歸つて來たので、毛利侯は、すぐに面會を許して、戦後の計を一任する事になつた。

氏名も、木戸準一郎と改めて、毛利藩の立場をつくり、長州人の更生を謀るのが、木戸の新らしい使命であった。坂本と中岡は、桂を押しつけて、聯合の道を開かうと考へた。それからは幾たびか、桂と會談したが、要するに、長州人の薩藩に對する、感情融和を、どうして爲るかの一事さへ、解決し得れば、これで問題は、スラ〜と運びがつく、といふ迄になつた。

木戸の意見としては
『西郷吉之助が、下關へ来て、自分と會うてくれたなら、それを、薩人の降伏と視て、同志のものを説きつけやう』
といふのであつた。

『西郷が、下關へ来る』といふことは、頗る簡単な事のやうで、實はむづかしい事なのである。併し、相談は此に進んで来たのであるから、二人は、それを引受けて、中岡が、鹿兒島へ行く事になつた。

『君等の御盡力に對して、斯うはいふやうなもの、西郷は、まさか下關へは、來ますまい』
と、桂は、中岡の出立を、送る時まで、左様いうて居た。

『大丈夫、お引受け申す』
中岡は、斯う答へて、坂本の顔を見た。

『中岡のいふ通り、わしも、大丈夫と思ふから、桂さんは、先づ高杉を、うまく説いて下さい』
『高杉の事は引受けるが、西郷の來ることが、怪しいぞ』

『なアに、そんなことは、ないさ』
三人の間には、斯うした應酬があつたほどであるから、中岡の入薩は、聯合の爲めには、極めて重要な關係を、有つて居たのである。

石川誠之助といふのが、中岡の變名であつた。坂本は、才谷梅太郎と、稱して居た。中岡が、鹿兒島へ、入つた時

は、その變名を用ゐて居た。

西郷との話は、すぐに極つた。唯だ島津久光の意向が、どうであらうか、といふ懸念はあつたが、それも、西郷の周旋で、中岡が、久光に逢つたから、無事に説きつけてしまつた。

それから、藩用の爲めに、西郷の上阪するのを幸ひ、下關へ立寄らせる事にしたのだが、好事魔多し、といふてある通り、暴風雨に逢うて、上阪の日取りに、狂ひを生じ、止むことを得ず、西郷は萬事を、中岡へ一任して、大阪へ直航してしまつた。

中岡は、佐賀の關から上陸して、只だ一人、下關へ歸つて來た。
其處で、桂は

『西郷に誠意がないから、聯合の相談は、之れで打切らう』
と、いひ出したのである。

『坂本のいふ通り。西郷は、拙者に、萬事を一任して、大阪へ急いだのであるが、それを君は信じない、といはれるのか』

『イヤ、さうではない』
『然らば、どういふのですか』

『君の詞は、どこ迄も信ずる』
『拙者の詞を、信じて下さるなら、西郷の心も、信じて下さい』

『わしは、それを信じて、長州人は、恐らく信用しますまい』
『君は、それを恐れるのですか』

『左様だ』

「久光公は、西郷へ、此事を打ち任かされ、西郷は、拙者へ、萬事一任する、というたのぢやが、それも信ぜられぬ、
 といはれるのか」
 此に於て、桂は、稍や窮したが
 「西郷が、下關へ来るか、來ぬかといふことが、初めからの疑ひであつた。西郷は、わしの考へた通り、矢張り來な
 かつたのぢやから、長州人の疑ひは、どこ迄も、解けぬ譯ぢや」
 「これほどの大事を、拙者へ一任する、といふ人があるのに、未だ疑はしい、といはれるのは、長州人の雅量がな
 い、といふことに、なりはしますまいか」
 「……」

中岡の一言は、桂の心臓へ、針を打込んだやうなものだ。
 機を視るに疾い、坂本は、すぐ突ツ込んだ。

「然らば、斯うして貰ひ度い。吾人は、これから、大阪へ行つて、もう一度、西郷へ談じて來るから、それ迄は桂さ
 んも堪へて居て下さい。この位のこと、御承知出来るであらう」
 「宜しい、承知いたしました」
 話は、それ迄にして、二人は、早船の用意を爲せ、その日のうちに、大阪へ向つた。

二

大阪へ着くと、西郷は、もう京都へ行つた、といふので、すぐ京都へ逐かけた。
 相國寺畔の薩邸に、悠々として、晝寝して居る、西郷、目まぐるしい世相や、混然たる、争鬭の外に立つて、別に
 心境の樂天地を、有する人、どこに風が吹くか、といった風で、まことに氣樂な、一日を送つて居た。

處へ、坂本と中岡が、不意に飛込んで來た。

「オー、坂本はん」

「やア」

「中岡はんも、一しよでしたか」

「弱つたよ、西郷さん……」

「どうしてか」

「あんたに逃げられて、桂さんに、酷く叱られてな」

「ハツハ、……」

坂本は、膝を進めた。

「西郷さん、笑ひ事ぢやないぞ。桂さんの立場は、あんたとは異つて、よほど苦しいのぢやから、少しは察してやつ
 て下さい」

「苦しいのは、薩摩も同じぢや」

「苦しさが違ふ」

「己どんは、一さいを、中岡どんに、まかせて來たのぢやから、悪い事は、あるまい」

「桂さんの方では、さう軽く視て居らないのだ」

「なアに、桂さんにも、よく解つて居る筈ぢや。解らないのは、元氣な壯士ばかりぢやよ」

「それには違ひないが、何とかしてやらねば、桂さんの立つ瀬があるまい、と思ふのぢや」

「宜しい、誰れか、遣ることに致さう」

「何の爲めに……」

「己どんの代りに、桂さんへ、詫言いふ爲めにぢや」
 「うむ、そりや可からう」
 「桂さんも、彼地に居るよりは、此地へ来た方が、萬事に都合ぢやらう」
 「その通りぢや」
 「己どんと、一しよには出かけられまいが、己どんを、責めに來るのなら、桂さんも、出るのに都合が可からうぢやないか、ハツハ、ハ、ハ、ハ、」
 何も、彼も、承知の上で、行つたことなのだ。桂を、京都へ引出して、その上の事にしよう、と考へて居たのらしい。中岡は、ニヤ／＼笑つて居たが
 「西郷さん、あまり智慧を廻すと、憎まれますぞ」と、いつて、哄笑した。

使ひには、黒田了助が、行く事になつた。中岡は、附添の格で、一しよに行くのであるが、此時に、もう一人、加はる事になつた。それが、田中顯介である。
 了助は、後ちの清隆、顯介は、前名を濱田辰彌というて、此時には、田中顯介と稱して居たが、今の田中光顯である。
 田中も、世間からは種々、いはれて居るが、決して悪い人ではない。殊に、維新前後には、ナカ／＼働いたもので、中岡の片腕になつて居たのだ。
 此結果は、桂の上京となり、西郷と會見する事に、なつたのであるが、坂本と中岡は、要するに、媒酌の役で、兩雄を會はせてしまへば、それから先きは、兩雄の差向ひが、よいのだ。媒酌人は、宵のうちに限る。お床入りになつ

たら、退くに限る。

桂は、薩邸へ泊り込んで居る。
 十三日ほど経つて、坂本が、乗込んで來た。
 「桂さん、どうなつたね」
 「何が……」
 「何がツて、例の一條ぢや」
 「聯合の事か」
 「うむ」
 「未だ何の話もない」
 「君から、話を始めないのか」
 「長州藩は、御承知の通りの、苦境に立つて居るのぢやから、わしの口からはいぬ。西郷さんが、黙まつて居るか、わしも、黙まつて居たのぢや」
 「それにしても、もう十三日になるぞ」
 「毎日の御馳走攻には、閉口して居る」
 坂本も、いさゝか呆れたが、よく考へて視れば、無理でもない、と思はれる。いくら苦くても、武士には意地があるから、桂の口からは、いひ出し難いかも知れぬが、西郷の方で、黙まつて居たのは、どいふ譯か解らない。
 坂本は、別室へ出て、西郷に會つた。
 「あんたは、何故、話をはじめて下さらないのか」

「己どの方からは、聯合してくれとは、申し難い」
「御尤ぢや」

どちらも、御尤では話にならぬ。そこで、坂本が立會つて、西郷と桂に、聯合の事を、いひ出した。熟した柿に觸るやうなもので、手を出せば、すぐ落ちて来る。話は、バタ／＼と進んで、薩長の聯合は、忽ちに成り立った。

その席上では、文書の交換など仕ないで、ほんの口約束のみであつたが、翌日になつて桂は、之れを文書にして、六ヶ條に書き上げた。

西郷も、桂も、それには、署名して居らぬ。只だ坂本が、裏書をして居るばかりものだ。

一、戦と相成時は、直様二千餘之兵を急速差遣し、只今在京之兵と會し、浪華へも千程は差置、京阪兩處を相圍め候事

一、戦、自然と我勝利と相成候氣鋒有之候とき、其節朝廷へ申上、訖度盡力之次第、有之候との事

一、萬一戦負色に有之候とも、一年や半年に決而潰滅致し候事は無之事に付、其間には、必盡力之次第、訖度有之候との事

一、是なりにて幕兵東歸せしときは、訖度朝廷へ申上、直様免罪に從朝廷御免に相成候都合に訖度盡力との事
一、兵士をも上國之上、橋、會、桑等も、如只今次第に而、勿體なくも、朝廷を擁し奉り、正義を拒み、周旋盡力之道を遮り候ときは、終及決戦外無之との事

一、冤罪も御免之上は、双方誠心を以相會し皇國之御爲に碎身盡力仕候事は不及申、いづれ之道にしても、今日より双方皇國之御爲皇威相輝き、御回復に立至り候を目途に、誠心を盡し、訖度盡力一ツ仕候との事
是れが、桂の認めて、坂本が裏書した、聯合の文面である。

聯合の精神は、毛利のうけた、朝敵の汚名を雪ぐことに、薩藩が盡力し、その代り、兵力の方は引受ける、といふことに、歸着するのだ。

聯合が成立したので、桂は、一たん歸國して、藩論を、まとめて来る必要がある。出立に先つて、再び西郷を訪うた。

西郷は、桂の爲めに宴を開いて、大に款待した。席上、一人の美少年が居て、琵琶を彈奏した。それが、不思議に巧いもので、人神の技ある、といつて、桂が激賞した。

即興の詩を、桂が、西郷に示した。

別離在近歎分袂 坐邊忽聞四絃彈
曲是悲想第一曲 人是少年第一人
追懷往時憾迫骨 不覺紅淚自潛々
知是明朝浣水夢 半在京城半故園

桂の詩としては、最も世間へ知られて居らぬものである。

寺田屋と坂本

一

三好慎三は、寺田屋の二階にたゞ一人、ぼんやりと、来る人を、待ちうけて居た。

「三好さま、お待ちかねでせうね」

と、いひ乍ら、しづかに這入つて来たのは、此家の養女、お龍であつた。

「オー、あまり遅いので、少し心配になつて来た」

「もう、ほどなく、お歸りでせうよ」

「坂本の事は、お前が、己れよりも、詳しく知つて居る筈ぢや。己れの待ちかねると、お前が待ちかねるとは同、じ待ちかねるにしても、その理由に、大分違ひがあるからのう、ハツハ……」

お龍は、少し顔を赤くして、

「三好さまが、御冗談ばかり！」

「イヤ、冗談ではないぞ。己れは、本統に云ふて居るのぢやよ」

「坂本さまが、そんなことを御聞きなされたら、さぞ御立腹なさることぞせう」

「莫迦なことを云ふな、坂本はお前に首つ丈けぢやから、お前の事さへ、云ふて居たら、ニコ／＼して居る。立腹するところではなく、大に喜ぶであらう」

「本統でせうか」

「オイ、乗り出して来て、どうしたのぢや。ちと慎しめ、ハハハ……」

「階下から、女將のお登勢が、

「お龍さん、先生がおかへりですよ」と、聲をかけた。

「あら、おかへりですつて……」

「それ見ろ、そのあて方は、何といふさまぢや」

「でも、あなたが、おまぢかねでせう、と思ひまして……」

「うまく云ふぞ、己れも待ちかねて居るが、それよりは、お前の方が、もつと待ちかねたらう」

「何でもよろござんす、只今おつれ申しますから……」

お龍は、いそがしそうにして階下へかけ下りた。

時に、慶應二年の正月廿三日であつた。

此日は、幕末史のうちでも、大に記念すべき日である。薩長の聯盟は、此日を以て、成立したのであるから、實は、幕府を倒壊すべき、根本策の確立された日と云ふても、敢て過言ではあるまい。

薩長聯盟の媒介者とも云ふべき人物は、坂本龍馬と中岡慎太郎の兩人であつた。坂本は、表面に立つて、此事に當り、中岡は、裏面の計畫者として、坂本を授けたのである。

薩藩には、西郷吉之助といふ傑物が居て、よく這般の消息を解し、長州藩には桂小五郎なる人が居て、西郷の心事を知り、茲に双方が歩み寄るべく、互に苦心はするが、どうしても接近し得なかつた。當時、長州藩士が、薩藩に對する、反感のひどかつたことは、一言に、薩賊と稱して居たのでも、想像し得る。薩藩士の方にも、長州藩に對しては、頗る憎惡の念を有つて居たのであるが、獨り西郷は、天空海淵の大度量を以て、今迄の行掛りは、一切、忘れて居たのである。

尤も、西郷の背後には、小松帶刀と大久保市藏が居て、それを手傳つて居た、と云ふこともあり、察々以て、西郷は、薩長の聯盟を、歡び迎へる心はあつたが、多くの藩士は、之れに反對であつたのが薩藩の内情であつて、それがために、西郷は、自ら進んで、之れに觸れることは、ちとむづかしかつたのである。

若し此の場合に、誰れかあつて、媒介の勞を取れば、すぐに融和して行かう、と、考へて居た所へ、坂本と中岡の斡旋があつたから、その運びは、スラ／＼と、ついてしまつたのだ。

桂は、木戸貫治と改めて、京都へ入込み、坂本の案内で、相國寺畔の薩邸へかくれて居た。木戸を、長州へ迎ひに行つたのは、黒田了助と、田中光顯の兩士であつた。

了介は、後ちの清隆であり、顯介の前名は、濱田辰彌と云ふて、今の田中光顯が則ちその人である。互ひに離れて居ればこそ、いろ／＼の議論もあるが、斯うして、顔を見せて見れば、そこに、何等の固執もなく、時間にしてみたら、五分か十分の間に、聯盟は成立したのであつた。

併し、西郷と木戸が、坂本を媒介として、聯盟の成立した時は、斯様な文書はなく、單に口約束のみであつたのを、翌日になつて、木戸が、之れを文字に、現はしたのであるが、此本書は、今の木戸家に、保有されてある。

此聯盟の成立した時、幕府は、どうしても、倒れる、運命に陥つたのであるから、幕末史の重要な事項の一つである。と、私は斷言するのである。

寺田屋の二階に居て、三好は坂本が、此の吉報を齎らして歸るのを、待つて居たのである。

伏見から、大阪へ下る、淀の川舟に乗るものは、多く寺田屋に寄つて、その支度をすました。

女將は、登勢と云ふて、一種の女傑であつた。お客さんとして來るものは、誰れであらうと、皆な同じであるが、登勢は、勤王の浪士に對して、よく理解を有つて居たから、特別に取扱つて居た。

従つて、幕府側に逐はれ、一身の危くなるものは、よく寺田屋へ來て、匿れるやうにして居た。

坂本や三好も、その危きを遁れて、寺田屋に居たのであるが、坂本は誰れよりも、寺田屋を好いてゐた。女將お登勢の依氣に、寄りかゝつて居たのも、事實であるが、その外に、お龍の居たことが、坂本と寺田屋の關係を、深くしたと視るのが、本統であらう。

三好は、坂本から、聯盟成立の經緯を聞いて、非常に喜んだ。

「此事は、足下の働きぢや。これで天下の大勢を、制すること必定、胸の悶が、一時に下つたやうな、心地がいたすよ」

「拙者も、可成り骨は折つたが、中岡は、よく援けてくれた」

「そりや、左様ぢやらう」

「君は、明日でも、下之關へ引返して、同志へ此事を報告して貰ひたい」

「その事は、慥に承知致した」

兩人は、聲をひそめて、頻りに話合つて居た。

お龍は、坂本を、二階へ送つて、すぐ風呂に入つた。思ふ男が來たので大に研きをかける、つもりであつたらう。

風呂場のすぐ外に、少しばかりの空地があつて、その先きは、一面の塀に、なつてゐた。塀の外に、忍びの足音がして何かヒソ／＼話して居るので、お龍は、少し不審に思ひ乍ら、湯槽から出て、窓の下に立つた儘、よく聞いてゐると「坂本」とか「遁すな」とか云ふ聲が、途切れ／＼に聞えた。さては此頃、はやりの斬込みだな、と氣が付いたのですぐに風呂場を飛び出した。

一刻も容易ならず、と思つたので、濡れた體も拭く間もなく、赤裸の儘で、二階へ駆け上つて來た。

「大變で御座います。はやく逃げて下さい」

妙齡の美人が、湯上りの赤裸、身には一糸も掩ふて居らぬ、さすがの坂本も、これには驚いた。三好も、眼を睜つて、この状を凝視した。

「どうしたのぢや」

「新撰組の斬込みがあります」

「何と、斬込みぢや」

「は、は、はやく逃げて下さい」

階下には、人の混み入る音がする。女將のお登勢、これを拒んで居るらしい。

驚破ッ、と立ち上つた三好は、手槍を取つて、階段の上り口に、身を構へた。坂本は、ピストルを手にして、赤裸

お龍を背後に庇つた。

ど、ど、どつと、階段を駆け上る。新撰組の猛者、最初の一人は、三好が、美事に突落した。つゞいて上る奴は坂

本が、ピストルの續け打ちに防いだ。

お龍は傍らの窓を開いた。

「三好ッ、遁れやう」

と、云つて、坂本は、その窓から屋根へ飛び出す。續いて三好も出た。お龍は、今更に赤裸の身の、いかんともすることが出来なかつた。

一夜を、川岸の材木小屋に明して薩郎へ遁れた。坂本は、指に負傷して居た。遁れる時、斬込んで來た刀を、ピストルを、持つ手で拂つた時の傷であらう。

お龍が、坂本の妻になつたのは、それから間もなくであつた。媒酌は、西郷と大山彌助であつた。彌助の巖であることは、いふまでもない。

二

著者曰く、殿井力女は、寺田屋の女將お登勢の娘で、坂本のお龍さんとは、一つ家に、寢起をして居たのであるから、此人の懷舊談も、なかく／＼に感興を惹く。

また、お登勢女將が、どういふ婦人であつたか、といふ事も、眞實の娘さんによつて、語られる所に、頗る興味がある。依つて、力女の談話を、左に掲げる。二、三、四、五の項が、それである。

母とせは近江國大津の郷宿山本重兵衛の二女で、十八の時、寺田屋の六代伊助の妻となりました。寺田屋の初代は

伏見の在寺田村から出て、伏見に船宿を開きました。代々伊助と云ひましたが、五代目の伊助は前名太田源右衛門と稱ひ、長州藩士だつたが、仔細あつて浪人し、大阪で道場を開いて居ましたのを、世話する人あつて、寺田屋の主人と、なりました。何しろ、浪人する位ですから、氣象が却々烈しい。

伏見に船宿も澤山あつたが、寺田屋は此の伊助の爲めに、一種の異彩が、あつたさうです。此人の子、六代目伊助は父と打つて變つた温順の性質で、俗に云ふお坊ちゃん育ちの、お人好であつたのです。所が一人の繼母がありまして、之れに娘がある。其娘に掣を取つて寺田屋の家を横領しやう、と掛つたので、家が非常に混雑する。親戚の者等も早く伊助に嫁を取れ、畢竟嫁がないから、家がグラ付くのだ、と申しますので、乃で母を迎へて六代目の妻としたのです。嫁には來たが母も大抵ではございませぬ。繼母さんは尋常ならぬ嚴酷家、小姑はある。夫は好人物、店には二十人も奉公人が居ます。其家の主婦として立つのですから迂濶しては居られませぬ。

されど幸ひ母の里は郷宿で却々盛んにやつて居ました。郷宿とは大津に代官所があつて其處へ各所から種々の事件を持て來る人々を宿泊させ、又は願書の立案所代筆紹介周旋等を業と致しますので、母は奉公人を使ふに、慣れて居ますから、先づ奉公人に評判が好い。それから繼母には一生懸命機嫌を取りました。俗に云ふおホンと言へば灰筒、お湯と云へば、お背中流しませう、と云つた工合に、根氣のあらん限り仕へましたので、左しもの繼母も、氣象がガラリと變り、我が生みの子の如くに、愛するやうになりました。後の繼母は、中風になつて、ドツと床に就いたが、其時も晝夜、帯を解かずに見病しましたので、繼母は涙を流して喜び

「ホンにお前の親切には、心から嬉しい。伊助さんに辛く當つたのは、全く、妾が悪かつた」と、後悔して息を引取りました

父は一切家事をとせに任かして、自分はブラ／＼遊んで居る。京都木屋町に、宅の寮があつて、平生其處へ、私等小供を連れては、時々養生に往く、すると、父は毎朝々々、顔を洗ふ時、伏見の本宅の方へ向つて、手を合せて拜むのが例でありました。

妾は、まだ八九才で、小供心に變に思つたから、

「お父さん、何で毎朝、お拜みなさるんです」

と聴きました。すると父の言ふには

「私は、お前達の母さんを拜むんだ。お前は小供で、能くは知るまいが、今の祖母様は、お父さんの、繼母、お父さんを他へやつて、寺田屋を乗取らうと、なさつたのを、母さんが、お嫁に來て、旨くお祖母様の御氣嫌を取り、到頭、家も無事に納まつた。母さんが來なかつたら、お父さんも、斯うして寮などで遊んで居られない。寺田屋も何うなつたか知れぬが、今ぢや、以前より繁昌して、八挺櫓の早船は、寺田屋に限る、と迄言はれるやうになつたのも、全く母さんのお蔭ぢやから、お前方も、一所に拜め」と言ふ程でありました。

三

母は、何しろ一人で、家業を切廻して居ましたから、却々忙し、物見遊山は愚か、芝居一つ往がず、我が子を教養すら、碌々出來ない程忙しかつたが、唯一つ道樂は、人の世話をすること、身分の貴賤に拘らず、おとせさん、何うか頼む、と言はれると、決して厭とは言へない氣質、男女とも食客は、絶えたことがない、捨兒も五人まで、拾上げて育て、それ／＼他へ呉れてやりました。此の氣象を世間で知つてゐるので、何時も宅の前へ、捨兒をするには、随分迷惑しました。其他、嫁婿の心配など數知れず、況して勤王の諸氏とは、女ながらも、意氣相合へば、及ばずながらお世話をしました。

一體伏見には、川の東西に數十軒の船宿がありまして、其中の主なのは、水六、小道具屋、綿屋等ですが、大抵は道頓堀の、船主との組合で、一船に船頭六人、唯、寺田屋だけは、八軒屋の堺屋との組合で、八人の船頭ですか

ら、船脚が大いに早い。夫故、急ぐ時は寺田屋の舟に限る、となつて居たので、随分、店も繁昌しました。舟は、朝未明に出る、一番船を、何ういふわけか、今井船と稱し、續いて朝三艘、晝三艘、夜四五艘の三十石が出る。大阪の方からもこれと同様の舟が上る。上には綱で曳くから遅いが、下る時は早い、夜は寝て居る中に、大阪に着き、月夜杯景色が却々佳い船は芝居の櫓のやうに、綱で一人前、二人前と仕切り、一人賃錢、天保一枚、然し一人前と云つても、至つて窮屈で、先づ三人前の場席を取らねば、寝ることなどは出来ませぬ。船宿の収入は、賃錢のうちより手数料を受け其他客の酒代飯、茶代等で、餘程懇意でなければ、一切宿泊は、お断りして居ました所で、母を頼つては、種々の方が來られる。

「私は阪本龍馬から、承つて來た何藩の浪人だが、旅用がないから、少し借用したい」

「私は陸奥陽之助の友人ぢやが、實は内内、江戸の様子を探りに行く、路銀に乏しいから、今夜は特別に、一百さして呉れ」

などと引切りなしに來られるのを、一度も謝絶したことなく、出來るだけのお世話を致しました。或日、某藩の勤王家で、母は、お顔を見知つて居る方が、徳川方に捕へられ、江戸へ護送される途次、宅へ休息されました。兩手は、後へ縛られ、數人の捕吏は、嚴重に、看護つて居る。其方が、頻りと水を飲みたいと、仰有る。捕吏は、聲を荒らげて

「囚人の癖に、我儘を申すな。水など飲んでも好い。今夜、宿に着いてから、飲め」と叱り飛ばす。けれど、餘程、咽喉が乾いたと、見え、某氏は、傍らにあつた手洗鉢へ、口を突込んで、汚い水を、飲まうとする。母は見兼ねて

「まア、お待ち遊ばせ」と大きな茶碗へ、清潔な水を汲んで、飲まして上げた。捕吏は

「餘計なことをするな」と叱る。母は平氣で飲ませる。家の者は皆ハラ／＼して居ました。御維新後某氏は、立派な身分になつて、宅へお出でになり

「彼時の水は、實に旨かつた。おとせさんの大膽にも驚いた。私は、其の後命を助かり、明治政府に仕へて、今では何不自由なき身、今日は、お禮に參つた」

と言はれました。其方の名は分つて居るが申さずに措く。

又或時、縞の汚ない衣類に繩の帯で、米搗きか下男と云ふ風で、宅の裏口へ、來られた方がありました。然し人品骨相は、身分ある侍としか見えぬが

「實は今、京都で、幕府方に追跡され、漸く縛に就く處を變裝して此處まで逃がれて參つた。一刻も早く大阪へ行きたいが、船賃がない。何うか助けて呉れ」と仰有る。母は、

「宜しうございます。丁度、夜船が出ます。さア早く……」と父の衣類と、羽織とを着せ、船へ乗せて上げた。此の方も後に、明治政府の顯要の位置に登られ、宅へ禮に來られたが、同じく名は申されませぬ。

四

龍馬先生とは、元から御懇意ではなかつたのです。薩摩の邸からの、御依頼で、何うも阪本を、邸内に置けない事情もあり、さうかと言つて、市中へ下宿さして置くのも危険だが、おとせに頼めば、大丈夫、何とか庇護つて呉れるだらうとの事で、宅へお出でになりました。

母は快よく引受けて宿客一切謝絶して、二階へ、隠匿つて置きましたが、阪本さんは、晝はグツスリ寝込んで、夜になると、何處かへ出掛けて往かれる。雨でも降ると、二階へ引籠つて、書見をしてゐなされる。偶に私や妹のお春（阪本先生の愛人）など、引立つて、側へ遊びに行くと

「能く来た、好い物を見せやう」

と手遊のやうに鐵砲を、行李の中から取出し

「是れは、ピストルと言ふのだ。今度初めて長崎へ来たんだが、もし江戸方の捕吏が来り来やア、是れで威嚇して遣る」

など云つて、ニコ／＼笑はれました。

先生は色黒く、眼は光つて、随分、恐い顔だったが愛嬌はあつた。怪談癖をお得意で、

「今日は雨が降るから、私が一つ、怪談談をやらう」

と、私達を、ズラリと前へ坐らし、咳一咳して、話し始めらる。

「さて、世の中は、化物幽霊と云ふものは無いとも限らぬ。死んだ女房のかたみとて行燈に渡せし針の穴……、嗚呼子供を残して、女房に死なれる程、困却るものはない。死ぬ者の身になつても、跡に念が残る。私の國で、矢張、小共を遺して死んだ女がある。スルと、丁度、今夜のやうに、雨の蕭々と降る晩、小供に乳を呑ませようと、母の亡霊が、行燈の傍へ、スツツと出た……」

と唯さへ怖い顔を、一層怖い顔をして、両手を前へ垂れて

「お化け！」

と中腰になると、實に凄い。私達はキャツ／＼と叫ぶ。階下から、母が上つて来て

「騒いでは不可ない。此のお客の居ることが、世間へ知れては困るから……」

といへば、阪本先生は「なアに構ふものか、知れたら知れた時だ」と、濟してゐられる。

維新前後の志士は、扮装にも振りにも構はず、ツンツルテンの衣服で、蓬頭垢面の人が多かつた。阪本先生も、書物などには敵衣をまとい、破袴を穿つ、など書いてあるが、大間違ひで、實は大の洒落者でありました。

袴は、何時も仙臺平、絹の衣類に、黒羽二重の羽織、偶には、玉虫色の袴など穿いて、恐ろしくニヤケた風をされる。中岡半太郎さんは、又些とも構はぬ方で、

「阪本は、何で彼様にめかすのか、武士には、珍らしい男ぢや」と、能く言ひ／＼されました。

例の阪本先生の愛人、龍女は、初めは、お春と言つたので、是れも長らく、母が世話をしました。此お春さんが、後に龍馬先生の妻女となつてから、龍と改名しましたが、末路こそ悪かつたが、却々の女丈夫でした。龍馬先生と、夫妻になつた譯は、話さぬ方が宜いでせう。

さて、茲に母の身に取つて、困つた事は、餘り勤王家を隠匿ふので、徳川家の方から、睨まれるのです。伏見には奉行所があつて、其組下に、與力同心があつて、是れが又た、非常にやかましい。船宿、宿屋などは、特別に巡回して検査する。寺田屋は、多く浪人が集る、と云ふので、最も目星を付けられたが、此の役人達を、旨く丸めなければなりませんでした。

五

慶應元年の暮から、二年の正月にかけて、一層取締りが嚴重になつて、新徴組の回番が、人別を改めるのだ、と稱つて、毎日、寺田屋へ来て、家探し同様に調べる。奉行所からは、棚橋と云ふ與力が、隔日位に来る。實に五月蠅

いことでした。

けれど、母は一向平気で、何時も辯舌で、役人を言くるめて追返へす。所へ、正月の廿日、阪本先生と三好慎蔵さんとが、大阪から

「女將、暫らくだつた」

と、ひよつくりお出でになつた。母は

「能くまア、斯様に、探索の嚴重な中を、無事にお着きになりました」

と云ふと、先生は

「イヤ、八軒屋を出てから、八幡、淀あたりで、随分調べられたが、幸ひ薩州の旗を、船に樹てさせたから、無事に着いた。今度は、長州の桂と、薩州の西郷に會ふて、大事な相談がある。一刻も早く、京へ往くから……」

と、一寸憩まれて、直ぐ出立になり、三好さんは、後へ残つて、寺田屋の二階に居られた。

所が、例の人別改めで、始終、江戸方の役人が來ると、其度に母は、三好さんを夜具の納つた押入や、裏の物置へ匿しました。

すると、廿三日の夜に、阪本さんが歸られて、何か二階で、三好さんと、密々話して居る。妹は、もう一室に寝て居る。お春さんと私は、湯に浴つて上ると、表を百人許りの、捕吏が取圍いて、母を呼出しました。母は、何心なく戶外へ出ると

「二階に、武士が二人居るだらう」

と言ふ。母は、今更仕様がなから

「ハイ居ます」

と答へた。役人達は

「阪本に違ひない、貴様、先きへ這入れ」

「貴公這入れ」

と逡巡つて居る。やがて、十數人ツカバチツと二階へ上り、籠燈を差付け、何か高聲に、罵り合ひ、先生の聲で

「静かに應對せう」

と云ふと、役人は

「應對罷りならん。神妙にしろ」

と答へるが否、バチバチノノと、ピストルの音がした。すると、捕吏の人々、二階から飛下りて逃るもあり、狭い梯子を、押合ひ踏合つて、バラ／＼バラバラ戶外へ、逃出す者もある。餘程ピストルが、恐かつたものと見えます。

妹は眼を覺まして

「姉さん、何です」

と云ふ。私は

「静にしておいで、阪本さんが、ピストルを放したんだよ」

と、話して居るうち、阪本さんは、二階から下りる所を、梯子の下に、匿れて居た、捕吏に、一太刀、手の甲を切られたが、大したことなく、裏の物置を切抜け、三好さんと、共に逃げられた。お春さんも、續いて男の浴衣に、男の帯を締めて、阪本さんと、共に逃げました。捕吏は、別段追ひもせず、表でガヤ／＼騒ぐ許り。

此所を、世に刊行されてある、龍馬先生の傳記には、大分間違つて書いてあるが、詳しく申して居ると、長くなるから略します。

母は、餘りに勤王家の世話をするので、或日、伏見の役所から、輿力の棚橋が、二三人の手先を、連れて來て、母を捕らへ、後手に縛して、役所へ拘引し、白洲で種々と調べました。其時、父の伊助は没して、母は後家で、切廻

して居たから、役人が
 『コレ寺田屋の後家、其方は何と心得る。公方様の舊恩は、難有くはないか』
 と言ふので、母は
 『イエ、もう御舊恩は、難有い所か、其爲に、私風情も、無事に家業が出来ますので……』
 と、例の辯舌で、無暗と江戸の御政治を譽ちぎつたので、流石の役人も
 『寺田屋の後家は、醋でも蕪蕪でも、往かん奴だ』
 と苦笑したさうです。其時は、言譯が立て、無事に歸宅しましたが、大膽のやうでも、女のこと故、彼是、心を痛
 めたものと見え、四十八歳で没しました。

六

著者曰く、奈良原繁男は、はじめ喜八郎と稱した。文久の昔、鳥津久光が、はじめて上洛した時、藩士有馬新七
 以下の人々が、不穩の計畫を企てた。その際には、長州人が居たが、久光は、それを漏れ聞いて、非常に立腹し
 た。鎮撫の名で送られたのが、喜八郎外敷名である。
 終は、斬合になつて、寺田屋の座敷に、血を流した。薩人同士の斬合だけに、有名な事件となつた。
 斯うした譯で、寺田屋には、一種の因縁ある奈良原男が、昔を追懐して語つた談話は、何となく、一讀してみた
 くなる。

そこで、左に、同男の談話筆記を掲げる事にする。勤王後家寺田屋おとせの、傳も、よく傳はれる。
 七、八の二項がそれである。

たゞ、之を讀んで、大いに疑ひのある點は、有馬新七等を、合武合體派の如く、いふて居る一事で、これは、ど

うしても、解釋ができない。久光公に、その疑ひがあるから、有馬等が、過激の運動を起さう、としたのである
 従つて、此點は、全く反對の事を、語つて居る。恐らく、筆記した人に、幕末史の豫備知識がなかつたので、話
 る人に間違ひはないが、書く方で、間違へたのではあるまいか、と思ふ。

私は、寺田屋後家の事は、餘り多く知らぬ。然し、却々感心な女で、良人伊助も、俠客肌の男であつて、家事な
 どは、一切頓着せず、おとせが、總て切廻し、男勝りの女丈夫であつた。

後家になつた後も、勤王家を匿まひ、寺田屋騒動の時なども、少しも動ずる氣色なく、三歳になる娘を、急に竈
 の中へ隠し、難を免れしめた、と云ふことぢや。

所謂、寺田屋騒動は、もう五十年にもなつて、當時を追懐すると、實に感慨に堪へぬ。茫として夢の如くである
 私は、餘り多く語るを好まぬ。

けれど、寺田屋といへば、必ず此騒動を聯想し、共に皆、憂國一片の志、熱火の如き結果にして、其間、毫末
 の私に亘る、心事がない。私は、自分で、自分の事を、語ることは爲得ぬが、兎に角、寺田屋騒動のことを、一
 通り話してから、おとせの性格の事に及ばうと思ふ。

私は、久光公にお供して、上京することになり、海路、播州室の津の港に着いて見ると、京攝の間は、天下の浪
 人が蝟集して、公の上京を幸ひ、擁立して義旗を翻がへさう、と云ふ、企がある、との注進が来た。それは危険だ
 といふので、萬一を慮つて、久光公を、山籠に乗せて、一足先にたゞせ、お小姓、城井伊三郎を、殿のお籠に乗
 せて、行列を整へ、苦心の上、漸く大阪に着いて見ると、世の騒擾が、意外に烈しい。志士浪人の面々は、九條關
 白、酒井若狭守を刺殺さう、と意氣込み、其勢ひが、却々凄まじいので、久光公も驚かれて、早々入京され、近衛
 公より、孝明天皇に、拜謁を賜はり、同時に、浪士鎮撫の勅が下つた。これは、慥か四月十五六日の事と思ふ。

勅なれば、いと畏し、直に何等かの手段を講ぜねばならぬ。浪士鎮撫と云ふことは、却々面倒で、何しろ過激猛烈の人々であるから、場合に依れば、血を見ねばならぬ。

そこで、殿には、大山格之助、鈴木壯七、同昌之助、江夏仲左衛門、道島五郎兵衛、森岡善助、山口鐵之助、及び自分と八人を、御前は召され

『我藩は、決して佐幕主義ではない。純然たる勤王主義である。唯、急激、事を損ずるのを憂ふるのである。故に浪士共へは、今暫らく、余が爲す所を、見て居て呉れ、と傳へよ。萬一、余が胸中を疑ひ、服せざるものあれば、臨機の處置を取れ』

との意味を、命令された。

所で、當時大阪に集つた、志士浪人の連中は、逸りにはやつて、是非共、公武合體の目的を、達せん爲め、久光公近日江戸へ下らるのを、伏見に喰ひ止めんと、寺田屋に集つた者が、百人もあつた。

是等、浪人連が、伏見寺田屋に居ることは、薩藩伏見下屋敷の留守居、本田(男爵)氏からの知らせで分つた。私共は、久光公の上意を體して、二十三日の夕方、竹田街道を、四人づつ二つに分れて、伏見に向つた。

寺田屋は二階建て、折柄、志士浪人は、二階に休息し、種々、協議を凝してゐる。そこで、有馬新七、橋口傳藏、同壯介、柴山愛次郎氏等、主立ちたる人を、階下に呼び、久光公の意のある所を、懇々と説き、決して輕舉妄動してはならぬ。今暫らく、時機を待つやうに、と、且つ説き日諭したけれど、却々納得しない。何處までも、久光公を喰ひ止め、公武合體の主旨を貫ぬきたい、と言ふ。

七

久光公より『若し、已むを得ざれば、臨機の處置を取れ』と云ふことが、耳底にあるので、いくら説き諭しても

納得しない志士浪人の面々、血氣の道島五郎兵衛『もう仕方がない。御上意』

と、有馬氏を切つた。有馬氏の如きは、自分の師と頼む程の人物、共に憂國一片の志、嗚呼思へば夢の如く、已むを得ぬ、場合とは云へ、今考へると、誠に感慨に堪へぬ。道島が抜刀たので、向ふも抜いた。眞劍の勝負で、今まで微かな蠟燭も、忽ち消えて、黑白も分かぬ、眞の暗、切り聲凄しく、劍光の閃めきは、稻妻の如く、此時、既に道島は、數ヶ所の重傷に、絶息した。

何しろ、室の中で斬合ふので、私は、檐下に飛び下りて、充分働く事が出来た。此時、有馬、田中、橋口(傳藏)柴山、弟子丸、橋口(壯介)西田、森山、山本諸氏が、壯烈な死を遂げられたのは、遺憾至極で、世に之れを殉難九烈士と稱する。

其内に、前にも言ふ如く、双方怨みのあつた譯ではないから、西郷從道、柴山龍五郎、眞木和泉守などの膽煎で久光公の眞意も分り、話も、無事に納まり、一同相携へて、京都錦小路の薩屋敷に這入つたのは、夜明け方であつた。途中まで來ると、大久保市藏や、私の兄などが、迎ひに來た。

私は當時、肩先きに切り込まれ、其他、數ヶ所に負傷したので、屋敷を下がつて療養しやうと、殿様に申上げた。此の小屋で養生せよ、との仰せ、一月程養生した。今は寺田屋騒動に殉じた、被我烈士も、聖恩に浴して、宿志の通り、王政復古となり、諸士も、地下に瞑することを得る次第である。

さて寺田屋おとせは、流石女丈夫だけに、斯様な大騒動の中に、少しも驚き慌てず、靜にハシリ元に至り、燈火をつけて見ると、却々の騒ぎ、急に三歳になる、女子をかまどの中に隠し、騒ぎの終るのを待つたといふ、實に剛膽の女であつた。

京都の醫者で、檜崎將作と云ふ人がある。非常の勤王家であつたが、幕府の忌む所となつて捕へられ、江戸に送

られて、斬罪になつたが、此の櫓崎に、三人の娘がある。土佐の坂本龍馬は、此の櫓崎と、大層懇意にして居たので、坂本が、三人の子を憐んで、何とか處置をしやう、と、心配するのを、おとせが聞いて、長女のお龍と云ふを引取つて、世話をし、非常に、面倒を見て呉れたが、この龍女が、後に坂本龍馬の妻となる、有名な才女だ。荷も當時、勤王家で、京都に往來したものは、おとせの名を、知らぬ者はない。幕府の捕吏が、龍馬捕縛の爲め、寺田屋へ亂入した時も、旨く龍馬の難を免かれしめたのも、おとせと、龍女との力であると云ふ。龍女も、天性伶俐ではあつたらうが、おとせに仕込まれて、一層の才女と、なつたのである。

八

寺田屋は、世間で酒樓の如くに、誤解して居る者もある様だが、實は船宿で、料理店ではない。伏見の船着場で、ホンの船の上下するものゝ休息する、家に過ぎぬ。されどおとせは、勤王の志士に、深く同情して、陰に陽に、志士の身を庇護したので、荷も當時、國事に奔走した者で、おとせの名を、知らぬ、者はない。おとせが、坂本龍馬を隠匿つて、捕吏に闖入された時の光景を、書狀に認め、某人へ送つたことがある。その書狀を、私は、或所で見たが、文詞頗る整然、却々感心に、好く書いてある。少し長いが、全文を御覽に入れよう。扱て鳥渡よそにて聞き候儘申上候、あの宿の内にはあるまじく後家にて御座候處、其夜どういふ事やらんか、夜は八ツ時に風呂に入り、あがりて火鉢のふちに居り候處へ、表の方より、一寸たのみますといふて、たゞき候故に事に内男あけ候へば、其後家に表まで、鳥渡おいで被下と申故、何事やらんといで見れば、うしろばちまき、拔身の槍にて、大よそ百人許りも並んで居り、誠に／＼びくり致し候へ共、なに事にて御座候と、尋ね候へば其方の二階に兩人のさむらひが居るよし、たしかに聞き候、すこしも隠すことなく有體に申すべしとのことに、もはやかくすも申成なりと、ハイおいでなされますと申せば、どうして居ると申され候故、まだ尋ずしに話など

れ候と申し、捕人の者直様飛込むかと思ひの外、武士らしくもなく、どうしやう、からしやう、だれいけ、かれいけと申し候、こんな人が幾萬人捕手に來るとも、二階の二人には所詮かなはずと思ひ大安心致し、度胸もピタと握り申候、其内捕手の人うちにはいりしと思ふと二階も落ちん計りの音し、又鐵砲の音も致し、やれ／＼恐いと思ひ表に居るうち捕人の者逃げ下りる者やら、二階から落ちるやうの混雜、はや二階の二人の姿が見えず、捕人も去り、二階に煙が見え候故、こわさも忘れて上りて見ると、ふとんが燃上りてあり云々(下略)

血の薬御存知より

龍 君 様 御元へ

誠に當時の光景が、よく分かる。すべて謎のように書いてあるのは、幕府方へ洩れても差支ないやうな、用意周到の所で、血の薬など、最も面白い。近頃之婦女子の氣象も、柔弱に流れて、少しも意氣と云ふものなくなつたのは、慟嘆に堪へぬ。おとせの如き、一船宿の女將で、普通なら俳優に戯むるゝとか、兎角、華奢に流れ易いものだが、左はなくして白双の閃めく下をも恐れず、幕吏の鋭き眼光を避けて、勤王志士に同情した、と云ふ一事は、實に見上げた、精神である。我輩は、何時も往時を追想する毎に、おとせの事など想起して、無量の感に堪へぬのである。まだ、私よりおとせの事に、詳しい人もあらうから、就いて聽いて、眞さに書いて置くが宜い。

九

著者曰く、大浦子は、維新の變に、關係を持たなかつたが明治三十七年の頃、寺田屋の荒廢せる状をみて、その再興を謀つた人で、その経緯を語つたものがあるから、左に掲げる事にする。九、一〇の二項がそれである。

私が、寺田屋に關係したのは、少し事歴がある。故品川子爵が「勤王事跡都日記」と題する、書類を所持され、頗る珍藏されて居られた。この日記は、流麗嫺雅の筆を以て、維新當時、王時に勤めた者が、東奔西走し、間關崎嶇、勞苦困難したことを、寫してあり、慷慨壯烈の氣が、紙上に溢れて居る。それ故、品川子爵は、愛誦措かず、常に座右を離さなかつたが、何人の著なるか、分らぬ。所が、後、此書を、古澤滋氏へ與へられたが、古澤氏は、子に示され、

「此書は、實に珍重すべき物ぢやが、遺憾ながら、著者が分らぬ。貴重な書を、ムザ／＼と湮滅させるのも惜しい。幸ひ貴下は、薩州の人ゆえ、調べたら分らぬ事もあるまい。貴下に差上げるから、著者を、詮索して欲しい」

と言つて、子に與へられた。

予は、悦んで、之を受け、だん／＼讀んでみると、成る程面白い。文中に、武鷹々々といふがあつて、これが著者の名だ。けれど、武鷹とは、何人なるや分からぬ。そこで、小牧昌業、海江田信義の兩氏に、鑑定を請うた所、この武鷹とは、有馬新七のことで、即ち寺田屋騒動の九烈士中の、巨頭、有馬新七の手記であることが分つた。乃で、予は、此書の年所を経て、散逸せんことを恐れ、之を印刷に附して、天覽に供し奉り、餘を同好者へ分つた。

然るに、明治卅六年五月、大阪に博覽會のあつた節、天皇陛下、京都に御駐蹕遊ばされ、豫て予の獻上した、都日記を、天覽になつて居つたので、特に勅使を、伏見鷹匠町大黒寺に遣はされ、九烈士の墳墓を弔せしめられ、且祭料を賜ひ、又、寺田屋の事なども、御下問になつた。

詰り、是も都日記が、本になつたので、烈士の志が天關に達したのぢや、と思ふと、實に予は難有く感ずる。

然るに、明治三十七年、予は遞信省にあり、阪鶴鐵道視察の爲め、大阪に赴き、歸途、大黒寺及び、寺田屋を訪ふべく、伏見へ往つた。九烈士の墓を掃ふて、後、寺田屋を尋ねると、斯る由緒ある家も空家になつて、唯、蜘蛛の巢に閉されてゐる。

頗る荒廢の光景であつた。

予は、非常に感慨の念に打たれた。然るに、明治卅七年二月、日露外交の破裂した夜である。皇后陛下は、葉山の御用邸にお在まして、日露の間、遂に干戈に訴ふるに至つたかと嘆きたまひ、御寢室に入り給ふも、よくお眠りに就き給はず、うつら／＼と、なしたまふ折柄、御庭の方より、坂本龍馬の姿現はれ、再拜して申すやう。「戦争の事、決して御心痛遊ばしませぬやう、微臣は、日本に於ける、海軍の創始者、恐れながら微臣、黄泉にあつて我が國を守護 仕りますれば、何卒御心を安じ奉るやう……」と申して、姿は消えた。

此事は、當時の新聞にも掲載されたから、世人は、記憶して居るだらうが、此事からして、皇后陛下は、坂本龍馬のことを、御下問になり、從て、寺田屋の事も、御下問あらせられて、其事を、香川皇后宮太夫が、言上され

たさうである。私は、疾うから寺田屋を、再興せねばならぬ、と感じた。私が、寺田屋を尋ねたる事が、大阪の朝日新聞に記したるを、寺田屋の親類等が見て、皆、喜び、寺田屋の親類、荒木英一氏が、態々上京して、當事の書類を盡持つて來たから、予は、之を取纏めて、香川大夫に相談し、皇后陛下の、乙夜の覽に入れた。

一〇

寺田屋の親戚、荒木英一氏が、取纏めて持參した一件書類を 皇后陛下は、長くお手許に御留置遊され、香川大夫より、最早返戻致しませうと、屢々言上するのを、今少し見たければ、今暫らく留置けよ、と仰せられたとの事

後に私も、此の書類を見ましたが、おとせが、當時、勤王の志士に、盡くしたことは非常なもので、仲には、國事に奔走して、頗る困窮し、運動の費用に差支るから、金を借りたとか、種々な書面がある。その中でも、坂本龍馬をば、最も好く世話をし、自分の養女龍を、坂本に嫁はしたりした。薩摩九烈士の巨頭、有馬新七なども、常に寺田屋へ足繁く往來して居た。何しろ、安政前後から、萬延、文久、元治と云へば、京都の騷擾は尋常でない。

幕府の捕吏が、勤王の士を物色して、ドシ／＼捕縛する。大抵の者は驚き恐れて、所謂、志士と稱する人々の側へも、寄らぬやうにして居る。

然るに、おとせは、幸ひ婦人の身で、人に目立たぬを利用して、陰に陽に志士を庇護した。前回に述べた、有馬新七の遺著、都日記に、安政當時、志士逮捕の模様が、詳しく記されてあるから、今其一節を示さう。

此時、都の所司代は、酒井若狹守にぞありける。此の月朔日に、三河國吉田の城主、本多美濃守が代として、都に参り上り。若狹守は、天保辰年より、所司代を勤め、九ヶ年程も、都に在し者にて略ぼ學才有りて、山崎垂加の學流を、崇信びし者にぞ有りける。然るに、此度井伊等が奸謀に與して、近衛殿下に、内覽宣下在しけるを、關東に仰下さるゝ事は、暫く御猶豫あらせられ度と、頻に奉拒りき。然るのみならず、都に有りける、忠義勤王の志ありける士を探探て、捕ふること嚴重なり、此時捕はれたる人人は、梅田源二郎、山本楨太郎、池内大學等の人々なり。捕はれたるもあり、或は竊に逃れたるものあり、我黨をも、彼の探索ること、甚と嚴重なり、若し我が黨をも捕へんとせば、いかでやみと／＼拱手て捕はれには就まじ。双向ふ奴原悉く討取り、切死をこそせめと、悠然として、酒など飲み、種々の議論に及びけるも勇ましかりき。實に此の當時、幕府の忌諱に觸れやうものなら、それこそ、身の破滅であるのに、おとせは、生來、義氣に富み、多くの志士を助け、又才智に長けて、旨く幕吏の難を免れて居た。其頃、おとせを、伏見界限第一の女傑と稱

したのも、強ち過稱でもあるまい。私は斯かる由緒ある、寺田屋の潰れかゝつたのを慨して、寺田屋再興論を唱へた所、忽ち世の同情を得て、今では以前の通りに再建され、又た私の印刷して、同好に頒つた『勤王事蹟都日記』を、先般、遙かに米國在留同胞から、書を寄せて求められたから、早速送つたが、民權自由の本尊たる、米國にあつても、尙且、斯種の書物を、愛讀する人があるか、と思ふと、私は實に嬉しく感ずる。

一一

著者曰く、昭和二年の二月、著者が坂本に關する放送をする前日、佐伯仲藏といふ未知の人から、左の如き手紙を寄せられた。大浦子の談話と、密接な關係がある事だから、茲に掲げる事にした。

啓上、愈、御清適、賀し奉り候。明夕坂本龍馬氏に就き、御講演ある由、別紙兩碑文は小生の代作せしものにして、此願末に就きては、種々詳しく申上げたも、今は其暇之無く残念に存じ候。取敢ず御參考迄に貴覽に供し候、別冊唱歌だけは、御閱了後御返却下され度候。

二月四日

牛込區若松町一三三

佐伯仲藏

贈正四位坂本龍馬忠魂碑

明治三十七年二月、我が邦の露國と交際を絶つや、皇后陛下時に葉山の御用邸に在らせられて不思議にも御夢に、白衣にして袴を穿ちたる三十七八歳の男子恭しく御前遙に跪き、微臣は坂本龍馬に候が、今回露國と戦端を開かせ

給ふとも、決して御心を煩はさせ給ふこと勿れ、微臣も及ばずながら我が海軍を護り候へば我が邦の勝利を得ること疑ふべくも候はず、冀くば御心安く思召し給へと言上すと見給ふや、其の姿失せたりしかば、陛下には深く龍馬の忠魂を嘉み給ひたりとぞ。其の後兼武公事を以て關西地方に赴き、五月六日山城國伏見町の大黒寺に詣り、文久二年四月寺田屋騒動の難に殉ぜし薩藩の士、有馬新七以下九烈士の墳墓を展し、又寺田屋の遺跡をも憑弔せしに、六月に至り寺田屋の親戚荒木英一其の義兄寺田伊助の保存せる、坂本氏が王事に奔走中、伊助の母寺田屋とせに與へたる數通の書翰を携へ、兼武を東京の官舎に訪へり。兼武一見輒ち、皇后陛下の御夢を思ひ合せ、益々事の不思議なるに感じたるまゝ、陛下に拜謁して右の次第を上聞し、其の書翰を御覽に供し奉りたりしに、八月二十五日に至り皇后宮大夫子爵香川敬三氏より陛下には御覽濟の上、深く御満足に思召され、殊に龍馬か國事に盡力し、遂に不慮の難に遭ひたるを御哀悼あらせられ、亡靈弔慰の爲め金若干を下賜せらるるとの御内旨を、兼武に傳へられたり。是に於て伊助英一感戴拜喜、遂に相謀りて一碑を京都靈山に在る坂本氏の墓側に建てんとし、兼武に文を乞へり。嗚呼、皇后陛下が常に國家に御心を煩はせ給ふことの深きと、王事に殉ぜし者を御痛悼あらせらるゝの切なることは今更申すも畏し、坂本氏が歿後殆んど四十年を経るも、其の英魂は今猶ほ國家を守護し、御夢にまで現はれ以て陛下の御心を安んじ奉らんとするに至りては、何ぞ其れ誠忠なるや。惟ふに開戦以來我が陸海軍の連戦連捷する所以は一に大元帥陛下の御稜威と將士の忠勇とに由ると雖も、亦安ぞ坂本氏の如き誠忠の士、常に我が邦を冥護するにあらざるを知らんや。感激の餘其の顛末を録し、永く坂本氏の忠魂を表す

明治三十七年十二月

遞信大臣從三位勳一等 大浦兼武撰

恩賜記念之碑

山城國伏見町の寺田屋は、昔より淀川船客の旅宿を業とせり、其の第六代の主人伊助の妻とせは元治元年九月三十

る際、此の家に宿り、とせの扶けを受けたる者も少なからざりき、今茲明治三十七年二月、我が國の露國と戦端を開かんとするや、其の月六日の夜、不思議にも、皇后陛下相模葉山の御用邸にて、御夢に坂本氏の忠魂を認めさせられたることありしが、其後余公事を以て關西地方に出張し、京都より奈良に赴く途次、五月六日伏見町の大黒寺に詣り、九烈士の墳墓を展し、又寺田屋の遺跡をも憑弔せしに、其の事を傳聞せりとて、六月に至り、とせの三女きぬの夫なる大坂の荒木英一とせの嗣が保存せる有馬氏の遺墨を携へて上京し、余を訪ひて其の際尙ほ斯るものありとて、坂本氏よりとせに贈りたる數通の書翰を示せり、余之を展觀するに及びて、皇后陛下の御夢を思合せ、益々事の不思議なるに感じたるまゝ、陛下に拜謁して右の次第を上聞し、坂本氏の書翰を御覽に供し奉りたるに深く御満足に思召され、又とせの義侠をも嘉みし給ひて、八月二十五日皇后宮大夫子爵香川敬三氏を以て、余に御内旨を傳へられ、且つ若干の御賜ありしかば、伊助之を拜戴せり、實に格外の光榮と云ふべし、伊助感泣の餘、英一と相謀り疊に其の舊宅の跡に建てられたる九烈士の碑の側に一碑を建て、恩賜の忝きを記受せんとて余に文を乞へり、余乃ち喜びて事の顛末を記し、淀川の清き流れと與に永く之を後の世に傳へしむ。

明治三十七年十二月

遞信大臣從三位勳一等 大浦兼武撰

檜崎お龍

一

京都の町醫者に、檜崎將作といふふ人があつた。妻のお貞と、子供が五人の暮しで、相當の資産もあり、稼業の方も、繁昌して、月の収入も、少なからずあつた。

普通に、醫者をして居たら、氣樂な生涯を、送れたのだらうが、人には、確かしら、道樂のあるもので、將作は、國事に奔走する、有志家との交際が好きであつた。

町醫者の事であるから、高貴の御前へは、出られなかつたが、出入の病家には、公卿が多かつた。讀書癖があつて、よく歴史に通じて居た。世間が、騒がしくなつて、諸藩の浪士が、追々に、入り込んで来る。病家先で、聞く噂は、朝廷と、幕府の關係についての、取沙汰ばかりであつた。

殊に、頼三樹三郎と親しくして、足繁く、往來して居たので、自然と、勤王の有志に、交りをつたふやうになつて、遂には、有志家の方から、將作の家へ、足を運ぶやうになつた。

はじめは、ひと通りの交りであつたが、やがて、其人達の集會の席へも、出るやうになつて、到頭、將作も、一應の有志家に、なつてしまつた。

すべて、天下國家を論じて、奔走する人は、一定の職業もなく、これというて、恒の収入もないのであるから、どうしても、人の懐裡へ、食ひ込んで来るのが、その例である。

將作が、有志家と交るやうになつてから、一家の生活費は、かさむばかりで、同志への貢ぎの金も、少なくなかつた。

坂本が、はじめ江戸へ、修業に出る時、京都に、暫く、足を停めて居た。或席上で、將作に會つてから、よく話合つてみると、俗にいふ、相縁奇縁で、坂本が、將作を好いた通りに、將作の方でも、坂本の將來に、望みを屬するやうになつて来た。

京都に居る間は、屢々、將作の家にも出入して、家人とも、懇意になり、互ひに、隔なく、交際ふやうになつて、子供等までが、坂本を、慕ふやうになつた。

將作の長女が、お春というて、まだ其頃には、肩揚のある、町家の生娘であつたから、戀の色の、といふ事はなく、まるで坂本を、兄の様に思つて、親しんで居たのである。後にお龍というたのは、此娘である。

そのうちに、坂本は、江戸へ出た。それから、坂本の修業時代である。家事の都合によつて、一度、國へ歸つた事がある。其時も京都へ立寄つて、將作の家に、幾日かを過した事があつた。

二度目に、江戸へ出る時も京都には、數日の滞在をして、將作の紹介で、多くの有志に交際を求むる事が出来た。されば、坂本のためには、洵に有益な斡旋者であつて、將作に對する、坂本の尊敬は、ひと通りでなかつた。

物語は、一足飛びに、安政の疑獄へ移る。

將作の家は、此疑獄のために、全く破壊されて、妻子が、路頭に迷ふやうな、悲惨な境遇に、落込んだのであるから、その事情は、述べて置く、必要があるのだ。

將作には、頼の外に、親しい友達が、もう一人あつた。それは、加藤省吾といふ人で、丹波の何鹿郡中筋村の高岡

といふ所に、富裕な暗しをして居たのであるが、將作と同じやうに、勤王の志士と交つて、天下國家を談ずる事に、一種の趣味を、持つて居た人だ。

京都へ出て来ると、將作の家に泊る事もあり、又、粟田青蓮院の末寺、知足院へ、泊る事もあつた。知足院の住職が、加藤の實弟であるから、自然、將作とも親しくなつて、三人が、食事を共にしながら、世事を談じ、天下を語る事もあつた。

(註) 千頭清臣氏の著書をはじめ、坂本に關する書物には、すべて知足院となつて居るが、それは知足院の誤りである。

此事については、今、中舞鶴小學校に職を奉じて居る、村上佑二氏から、教へをうけたのである。

一一

安政の疑獄は、井伊大老が、勤王の志士を、彈壓するために起した、未曾有の大獄であつて、幕末史中の、重なる出來事の一つであつた。

是先、井伊は、大老の職に就いて、將軍家定の、儲君を極める事に就て、一般の希望を斥け、紀州派の人と結託し、非常な專斷を行はう、とした。

水戸の齊昭、尾州の慶勝、越前の慶永、その外に、薩摩の齊彬も居たが、此人は、事件が、あまり進まぬ中に、病死した。宇和島の宗城、高知の容堂、老中では、阿部伊勢守等が、一橋慶喜を、將軍の繼嗣にしよう、として勢力を張つたのが因で、紀州派の反抗となり、井伊を、大老に押し上げて、紀州家の慶福を、繼嗣に定めたのであつた。

それ迄に、押付けるには、可成り、無理な事として居るから、一橋派の反抗も、相當に強く、遂に、井伊は、暴威を振つて、齊昭をはじめ、その派に屬する諸侯、並に、幕吏を、片端しから、處分してしまつた。

殊に、水戸家に對しては、極端な壓迫を加へて、手も足も、出ないやうにしてみました。それらの事情を、語つて居ると、可成り、長くなるから、それは一切略してしまふが、兎に角、井伊のやり方は、不穩當であつた。

(註) 此一項に就ては、南洲傳を参照せられたし。

齊昭は、一般に、烈公として、知られて居る。少し、癖のあつた人ではあるが、大名としては、すぐれた人物であつた。

早く、京都へ手を入れて、朝廷との關係は、なか／＼に深いものがつた。従つて、勤王の浪士には、非常に、人氣があつた。

徳川御三家の一たる、水戸家の隠居が、京都に聯絡をとつて、王事に盡す、といつたやうな事は、幕府のために、喜ばれぬ事であつたが、烈公は、それに頓着なく、朝廷の爲めには、よく盡して居た。

井伊の暴斷に對しては、朝廷の方でも、可成り、議論が起つて來た。急進派の意見では、井伊を、大老の職から斥けて、幕政の改革を命じ、攘夷の實行を期せしめる、いふのであつた。

當時、京都には、全國から、多くの有志が、集まつて來て、幕府の改革を、唱ふる者が、少なからずあつた。まだ其頃には、倒幕の意見は、あまり強くない、改革論の方に傾いて居たのだ。

土地の人としては、頼三樹三郎、宇喜多一蕙、同、松庵、池内大學、六物空滿、山口兵部、僧月照なぞが、主なものである。

江戸から來たものでは、藤森恭助、飯泉喜内、勝野豊作、山本貞一郎等が居た。

水戸の人では、鶴飼吉左衛門、同、幸吉、櫻任藏、鮎澤伊太夫。又、薩摩の人には、西郷吉兵衛、有馬新七が居た。長州からは、宍戸九郎兵衛、福原與曾兵衛、久阪玄瑞が來て居た。

肥後の轟武兵衛、信州の近藤茂左衛門、伊勢の世古格太郎、近江の西川善六、尾張の尾崎八右衛門、備前の藤本

津之助、其他、多くの有志が出て来て、採返して居たのだ。

それからの人の、聯絡をとつて居たのが、丸太町の梁川屋敷、柳馬場の梅田源次郎であつた。

公卿の家人にも、有志の士外く、その氏名を擧げれば、左の通りである。
小林民部権大輔、高橋兵部権大輔、三國大學、金田伊織(以上鷹司家)、老女村岡(近衛家)、入江雅樂頭、若松本權頭(以上一條家)、飯田左馬(有栖川家)、伊丹藏人、山田勘解由(以上草蓮院宮家)、丹羽豊前守、森寺因幡守、同若狭守、富田織部(以上三條家)、春日讃岐守(久我家)、藤井但馬守(西園寺家)、山科出雲守(御藏舍人)、

大勢の上から見、斯うした人々が聯絡をとつて、幕府に反對を、掲げて居たのだから、京都の輿論は、どうであつたか、といふ事は、想像がつく。

鷹司、近衛、一條、二條、三條の諸家は、大勢順應で、有志の説に、従つて行くのであるが、ひとり九條關白尙忠は、彦根家との因縁から、佐幕に傾いて居た。

此時に、水戸家の鶴飼吉右衛門が、攘夷の密勅を授けられ、之を烈公へ、届ける事になつた。伴の幸吉と、日下部伊三次が、之れを持って、關東へ急行する事になつた。

幸吉は、小瀬傳右衛門衛と稱し、日下部は、鶴澤信三と、變名して、夜を日に繼いで、江戸へ着いたのは、安政五年の八月十六日であつた。

此密勅が、原因になつて、安政の疑獄は、起つたのであるが、どうして、さういふ事になつたか、といへば、第一に、朝廷の御書を、大名が、直接に戴く、といふ事は、幕府の禁する處であつて、それだけでも、可成り大きい問題なのである。

然るに、密勅の内容は、攘夷の事に關して居るから、一層、事は面倒になつたのである。

將軍繼嗣の事から、駒込の邸に、押籠められて居る、齊昭の手に、其密勅が入つたのだから、幕府としては、猶更に、神經を尖らすのは、當然の事である。

それであるから、井伊大老は、水戸の手から、密勅を、取上げよう、として、可成り努めたが、齊昭は、どうしても、承知しなかつた。

常陸の長岡に、水戸の家來が、屯集して、大騒ぎをやつたのも、此時の事であつた。其處から、脱走した連中が、後に、櫻田見附で、井伊大老を、介すことになるのだ。

そのうちに、『京都の方で、幕府を介す陰謀が、企てられて居る』といふ事が、判つて来て、井伊大老は、ひと通りならず怒つた、間部下總守が、俄かに京都へ向つたのは、それが爲めである。

一一一

間部が、着く前から、京都では、密勅に關する、経路について、秘密に、探偵の手が、動いて居たのだ。

町奉行小笠原長門守が、配下の與力や、目明を使つて、殆んど、虱潰しに、有志家と、公卿の秘密を、攪まうとして、あらゆる手段を、つくして居たのである。

木屋町の近藤茂右衛門の家に、砂村六二といふ者が居て、別に、これといふ職業もなく、公卿の家に、出入して居る様子が、何となく、疑はしく思はれたので、だんく、探偵の手を盡してみると、砂村といふのは偽名で、實は、山本貞一郎と、いふものであつた。

それから、山本の素情を洗ひにかゝつて見ると、非常に、書が巧く、殊に、和歌が上手で、教養は、可成り深い男だ、といふ事も判つて来た。

而も、近藤は、自分の兄であつて、表面は、他人の如くして居るのであつた。斯うして置けば、何事か、秘密の事

でもやらうとするには、極めて好都合であつた譯だ。
其上に、江戸の住居が、向島の小梅村で、水戸の邸と、程近く、従つて、水戸の家來とは、交際もあつて、それらの關係から、ひそかに都へ入り込んで、何事か、畫策して居るのだ、といふ事が、判つて來た。
猶、踏込んで、その畫策の秘密を、探つて見ると、意外千萬にも、幕府に對しては、容易ならぬ企てのある事が、判つて來た。

公卿へ取込む爲めに、宇喜田一蕙父子の斡旋を得て、三人が、力を俱にし、曩に塾居を命ぜられた、尾、水、越の三侯の赦免に就て、勅命の降下を願ひ、さらに、越前中將慶永を以て、將軍の後見職に、押上げるべく、その運動に、掛かつて居たのであつた。

近衛、二條、三條、正親町の三卿へは、深く喰込んで居る事も、判つて來た。たゞ、物的證據が、擧がつて來ないだけで、探偵報告を、綜合してみると、さういふ事になるのだから、幕府としては、實に容易ならぬ事件で、若し、之を知らずに居たら、第一に、町奉行の落度になり、小笠原の家は、潰れるかも知れなかつたのだ。

近藤の家には、榎崎將作も、出入して居た。はじめは、醫者の事であるから、病家として、關係があるものとのみ、思つて居たら、榎崎の案内で、山本が、公卿の家にも、行つて居る形跡がある。
最近に、梁川星巖が、病氣になつたので、榎崎が、療治して居た。その關係からでもあらうが、山本を、案内して居る、證據も擧がつて來た。

そこで、いよいよ山本を引張つて、一しらべする、といふ事が定り、それ／＼に、手配りをして、近藤の家へ、踏込んで見たら、意外にも、山本は、一兩日前に、急病で世を逝り、其日は、一家の者が、寺へ行つて居る、いふ事であつた。
これは、明かに、探偵の手ぬかりであつた。さらに、山本の死に就て、しらべて見ると、どうも、毒死して居るや

うな形跡があるから、此上は、近藤を、引上げて、嚴重に調べて見る事に決して、見張りをつけて置くと、一人の飛脚が、近藤の家から、出て來たので、それを追跡したら、三條通りを、大津街道へ、東に向つて進む。これは確かに、江戸へ行く飛脚に相違ないから、すぐに引捕へて、奉行所へ、つれて來た。

飛脚は、それを商賣にして居る奴で、何の疑ひも起らなかつたが、近藤から、頼まれた手紙を、披いて見ると、山本の妻へ宛たもので、所々に、符牒のやうな文字があつて、全文の意味は、判らないが、山本の死に就て、何か、重大な事が、書いてあるやうに思はれた。

もう一通の書面は、安島様といふ宛名で、これには、符牒が、一層多いので、想像のつかぬ手紙であつた。
飛脚の語るところによれば、水戸の邸へ、持つて行くのだ、といふから、安島は、家老の帶刀にちがひない。
翌朝は、寢込みへ踏込んで、近藤を、引上げると同時に、嚴重な家宅搜索を行つた。

然るに、近藤の手ぬかりで、重要な手紙を、押收された結果、山本と公卿の關係が、はつきりと、判つて來た。
其上に、どうした譯か、梅田の書いたものが、二通までも、引上げられたので、これに依つて、事件の荒筋も、大凡の推測が、つくまでになつた。

一通は、酒井若狭守が、所司代になる時、梅田から、坪井孫兵衛といふ者へ、送つた書面である。それには、酒井侯が、此際に、所司代となる事は、やがて、朝廷に罪を得て、家名を傷け、不忠不義の名を、末代に残すやうになるから、是非、諫止して欲しい、といふ意味の事が、認めてあつた。

猶ほ一通には、それよりも、重大な事柄が、書いてあつた。やはり梅田の筆蹟であるから、此書面を證據として、梅田を、しらべあげたら、一切の事情は、明白になると見て、これから、梅田を捕へる、手續きにかゝつた。

その書面は、此疑獄の起る、因を爲したものであるから、茲に、掲げる事にした。
七日、主上、勅書を以て、列卿を召され候。九條左府公、鷹司右府公、近衛左府公、三條内府、中山公、其外、

議奏、傳奏御掛の諸侯、残らず御參内の處、主上出御にて、歡慮の趣、仰出され候處、何れも御敬伏にて、廟議一決仕り候。
九條公は、兼て彦根侯と御同意にて、關東へ、御内通の處、昨日、廟堂にて、一言も、御出し成され候事、出來申さず候。
殊に、御畏縮成され候由、依つて、勅命宣旨の御使は、江戸御老老方の手をはなれ、尾張公、水戸公へ、宣旨を下され候。

此度、何の仔細にて、尾張公、水老公、越前侯を押籠め候や、言上仕る可くとの事、勅命に違ひ、條約調印取とのへ、天下を誤り候、姦者の役人共を、尾張前中納言、當攝津守、水戸前中納言、當中納言、其外、同志の連枝、有志の諸侯へ、勅命を傳へ、速に右の者を、相除くべしとの事、尾水兩家より、天下有志の諸侯存寄りを、速に朝廷へ言上仕るべき旨、尾水御兩、の御父子より、申傳ふべしとの事、右三ヶ條に候。
實に古今獨歩の御英斷、恐悦奉つり候。右は相違なく候。今朝、栗田様より、伊丹藏人御使にて、源次郎へ急に知らせよ、との御沙汰にて、有がたく存じ奉つり候。
五六日の間に、江戸は勿論、天下不日に、大震動致すべく候。當月、四日に、尾張より二千餘人、二手にわかれ、出發候て、中納言様を、御國へ迎へ歸り候覺悟の由、御歸國候へば、直に御上京と申す沙汰に付、元より、當所へ、先日より、大導寺始め歴々三四人、二百人許りにて、參り居候。
御國太守公は、兼て彦根侯とは、無二の御合體に候へば、如何にも、甚だ御危き事と、恐察奉つり候。何卒、早々、深栖大夫君を始め、御一同に、御覺悟御定め成され候様、存じ奉り候云々

檜崎お龍 (其二)

梅田は、若州小濱の浪人で、一時は、酒井侯に仕へて居たが、藩政改革の意見を上つて、重役と衝突し、浪人となつてからは、勤王攘夷の運動を、起したのである。

元は、朱子學を修めて、それから、陽明學に、移つて來たやうに思はれる。大津の上原塾に居て、師の甚太郎先生から見込まれ、其娘を迎へて、妻にしたが、大獄事件の起る時は、二度目の妻であつた。

はじめの妻は、信子というて、梅田が、最も窮迫した時代に、非常な苦勞をしながら、よく夫に仕へ、貞節をつくしたもので、眞の女丈夫であつた。

一時、比叡山麓、一乘寺村の觀音堂に、堂守をして居た事がある。其當時は、どうかすると、一日の間、食事を得られぬ事もあつて、骨も細るほどの、窮狀に落ちて居た。

さうした、苦しい生活の中で、子供を二人抱いて居たのだ。同棲十一年、その間に、一日として、安らかな生活をした事がなかつた。

樵り置きし軒の積木も焚きはて、
拾ふ木の葉の積る間ぞなき

事たらぬ住居なれどもすまれけり

われを慰む君あればこそ

此二つの歌は、信子の詠み残したものだ、これを見ても、當時の境遇が、想像し得られる。

例の『妻臥病床云々』の詩は、信子が、病児を抱いて、自分も、病氣づいて居た時、露西亞の艦が、紀州沖に來て居る、といふので、十津川の同志が、梅田を迎へに來た。そこで梅田が、病床に在る妻子を棄て、紀州へ向つた。其時、壁間に題したものである。

後の妻は、大和の高田で、今も尙ほ名家として残る、村島家から、迎へたのであるが、此婦人も、立派な女で、その晩年まで、貞節を完うした。

猶、梅田に就て、述べたい事もあるが、茲には、略す事にする。

最初の檢舉は、伏見奉行の内藤豊後守の手で行はれた。酒井所司代は、公卿の内情を、よく知つて居たから、容易に、手を下さなかつた。

井伊の懐刀といはれた、長野主膳が、それを知つて居て、伏見奉行を、使つたのである。

同時に、池内大學、山本榎太郎も、捕はれた。風説は、それからそれへと傳はつて、有志家の恐慌は、ひと通りでなかつた。

頼三樹三郎、西郷吉兵衛、鶴飼吉左衛門等が、近衛家の老女、村岡と語つて、檢舉を喰止める、策動をはじめたが時遅れて、目的を果し得なかつた。

何時の時代にも、よくある事だが、同志のうちの一人、奥村俊平といふ奴が、檢舉の殿しいのを、見て、急に生命が借しくなり、奉行所へ自首して、一切の秘密を、打明けてしまつた。

是がために、檢舉の手はひろがつて、百名からの人が、一擧にして、捕縛されたのである。

梁川は、その少し前に、下痢病を病んで、俄かに死んでしまつた。それが爲めに、檢舉は免れたが、妻の紅蘭は、奉行所まで引かれた。

漢詩人としては、當時、日本一と稱された梁川が、急に死んで、檢舉を免れた、といふ事は、可成り、評判が高くなつて、或る洒落者は、

『梁川先生は、本當に、死に上手であつた』

といふのであつた。「詩に上手」は、「死に上手」に通ずる譯だ。世間には、さうした騒ぎの中に、洒落をいつて居る奴もあるのだから、考へて見れば、面白いものだ。

一一

そのうちに、間部が着京した。檢舉の手は、さらに厳しくなつて、捕縛されるものは、夜を日に繼いで、多くなつるばかりであつた。六角の獄屋は、それが爲めに、満員大入の盛況を極めた。

酒井所司代の態度は、頗る生暖いものであつた。檢舉の模様からいへば、事件は、何處まで擴がつて行くか、殆んど、その見込がつかない程であつた。

そこで、酒井は、三條内大臣に、ひそかに、家來を遣して、

「事件の範圍はひろく、公卿諸公にも、及ぶ見込であるが、若し、條約調印の勅許を、引受けてくれるなら、檢舉の方は、打引りにしてもよいが、どうであらうか」

といふ事を、申込んで、刎付けられた事實がある。

間部も、はじめは、景氣よくやつて見たが、これも、事件の奥底が判らないので、後日の難を思つて、其範圍を狭

遠島 同 大學院門跡家來
 松平伊豆守百姓
 久我家々來
 御倉舍人
 三條家々來
 同
 鷹司家々來
 三條家々來
 青蓮宮家來
 一條家々來
 信州松本町名主
 京都晝家
 同
 京都浪人
 一條家來
 有栖川宮家來
 鷹司家々來
 青蓮宮家來
 三條家々來

六物 空萬
 太宰 八郎
 春日讚岐守
 山科出雲守
 森寺因幡守
 丹羽豐前守
 三國 大學
 森寺若狹守
 伊丹 藏人
 入江雅樂頭
 近藤茂左衛門
 宇喜田一憲
 宇喜田松庵
 浦 市正
 若林木工權頭
 飯田 左馬
 高橋兵部權大輔
 山田勘解由
 富田 織部

同
 同
 叱り
 同
 同
 外に手錠四人、構なし一人あり。

(第三次)

死罪
 遠島
 同
 重追放
 永押込
 同
 中追放
 同
 紀州領構江戸構
 押込
 同
 毛利大膳太夫家來
 勝野豐作伴
 日下部伊三次伴
 伊達遠江守家來
 松平讚岐守家來
 同
 江戸儒者
 水戸領百姓
 紀州領用達町人
 水戸家々來
 井上左京太夫家來

吉田寅次郎
 勝野森之助
 日下部裕之進
 吉見長左衛門
 長谷川宗左衛門
 長谷川速水
 藤森 恭助
 黒澤 とき
 世古格太郎
 大竹儀兵衛
 藤田 忠藏

下田奉行手附出役
 飯泉喜内伴
 山本貞一郎妻
 山本貞一郎娘
 同
 大沼又三郎
 飯泉 春堂
 山本 とよ
 山木 さい
 山本 うめ

將作の取調べも、何時、落着がつくか判らず、まだ毎日のやうに、人が捕はれて行くのを見ると、事件は相當に、長びくに違ひない。さうなつて見ると、門戸を張つて、苦しい生活を、堪へる必要もない譯だ。一面から見れば、斯うして、我慢して居るから、人も許して、嚴しい催促もしない、といふ事も、あるに違ひないが、さればといふて、何時、片がつくか判らぬものを、斯うして居るのは、ます／＼一家のものが、苦しむ事になる。

それらの事情を、詳しく物語つたので、加藤も、しばらく考へて居たが、

「さういふ次第ならば、一時、私の村へでも来て、暮す事にしたらどうですか」

「此上、あなたに、お世話をかけては、相済みませんが、さうして戴ければ、此上の事は、御座いませぬ」

「どうせ、草深い田舎の事だから、萬事に不自由ではあらうが、そのうちには先生も、赦されて、歸る事であらうから、兎に角、明日にも、引移る事にしたら、どうですか」

「それでは、さういふ事に致しませう」

と、話が進まつたので、お貞は、子供を呼んで、加藤の前へ、坐らせた。

「小父さまのお情で、あちらへ、引取つていたゞける事になつたから、よく小父さまに、お禮をおつしやい」

お龍は、流石に、もう娘らしくなつて居るので、四人の同胞に代つて、

「ありがたう御座います」

と、物靜かに、挨拶した。外の子供は、黙つて頭を下げる。その寂しい姿を見ては、男優りのお貞も、涙の外なく

加藤も、思はず、貰ひ泣をした。

翌日は、道具屋を呼んで、大概なものは、買拂つてしまつた。近所の人へは、それ／＼に挨拶に廻つたが、行先は、はつきり言はずに、たゞ近い田舎へ、とばかり、別れを告げて、住み馴れた家を離れた。

しばらくは、加藤の世話になつて、田舎住みであつたが、將作のたよりは、さらに無く、事件は、いつ片づくとも見當がつかなかつた。

「お母さま」

「何だえ」

「斯うして、いつ迄、加藤の小父さまに、お世話になつて居ても、限りのない事ですから、わたしは、京都へ戻つた方がよい、と思ひますが、お母さまは、どう思ひます」

「さうだね、私も、さう思つた事もあるが、今では、京都へ歸つたところで、誰を頼らう、といふ的もなく、又、お父さまが、あゝしたお身の上になつて居られるから、人様を訪ねて、御迷惑をかけても、濟まぬと思つて、其考へ

は、やめたのだが、お前さん達にしてみると、以前、賑かに暮したのが、急にさびしくなつたので、都が戀しくな

るのも、無理はない。それにしても、お前さんは、京都へ行つて、どうしよう、といふつもりだね」

「小さい家を借りて、お母さまと、弟や妹は、其儘に、わたしは、何處へなりと、御奉公に上つて、幾らでも、暮

しの助けをしたい、と思ひます」

「お前さんが、それ迄に、考へて居るのなら、さうしてもよいが、加藤の小父さまに、一應は、相談をして見ないと

悪いから、私と一しよに、加藤の小父さまを、訪ねてみよう」

「それが宜しいでせう」

お貞とお龍は、これから加藤を訪ねて、母子で話合つた通りを、また繰返した。加藤は、あまり氣乗がしないで、

一應は、止めてみたが、肯かぬ氣のお龍は、しきりに繰返して頼むので、遂に加藤も、同意をする事になつた。

「而し、お前さん達は、京都へ行つて、どこへ頼らう、といふのか」

「その的は、まだ、ついて居ないのでありますから、いづれあちらへ行つてからの事に、しようと思つて居ります」